
Cherry Blossom & Spring Days ～※更新停止中

UNXYS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D. C. ? C. S. ~ Cherry Blossom & amp; Spring Days ~ ※更新停止中

【Nコード】

N0779P

【作者名】

UNXYS

【あらすじ】

僕の名前は春日^{しゅんか}。

風見学園本校三年のとき、枯れない桜の木が枯れると同時に僕は死んだ。

そしてふと気が付くと、僕は約50年後の世界にいて、そこで親友に再び出会う。

桜の木の暴走やら義之のドタバタ恋愛劇とか色々あるけど、毎日楽しくのんびり生きれば良いかなー、なんて。

コレはそんな僕と、親友兼幼馴染こと芳乃さくらや弟分の桜内義之、その他もろもろと過ごす日々の話。

ああ、そうそう。一つ言い忘れてた。

―――――実は僕、魔法使いなんだ。

作者は小説初投稿です。

二次創作に嫌悪感などを抱く方は戻るボタンをグォレンダァ！するか閉じるボタンを連打してください。

更新停止中。

僕とことりとさくらと桜。 (前書き)

見切り発車で始まりましたこの小説。

鈍亀更新ですのでお気をつけくださいませ。

僕とこりとさくらと桜。

それは思わず見惚れてしまうくらいの、綺麗な景色だった。

だから————だからこれは僕の、

“ 終わりなんだ ”

そう思うと同時に体から全ての力が抜ける。

肩からかけた銀色のギターを下敷きにしないように最後の力で体を捻った。

仰向け倒れたまま、空を見上げる。

そこもやはり、桜色の奔流。

————ああ、なんて綺麗。

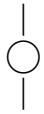
僕の小さな、小さな呟きは、誰かに聞こえたのだろうか。

その声は誰かに届いたのだろうか。

体がまるで羽毛のように軽い。

一気に睡魔が僕を襲う。

瞬間、暗転。



気付けば、病室のベッドにいた。

視界がぼんやりとしている。

身体がぎしぎしと痛み、思うように動かない。

周りを目だけ動かして見た。

傍に親友がいるのがシルエットでなんとなくわかる。

その親友——白河ことり——は僕が起きたと気付くとすぐに声をかけてきた。

「ねえ。……嘘………だよね？」

その声はすごく不安に満ちたもので、

————実はやばい。

それを和らげるためにそう軽い感じに伝えようとする。

声が出たかは判らない。

無言の数秒。

僕の言葉は霧散するかと思っただけで拾われた。

「まったく、また私をからかってるんでしょ？」

———ううん、今回はホント。

僕が喋る。

「……………うそつき。あれだけくたばらないって自信満々だったのに」

彼女が言う。

———無理なもんは無理なんだよ。

「じゃあ約束しよ。いつか必ずライブでデュエット。みっくんとともちゃんと一緒に、枯れない桜のところで」

また無茶なことを言われた。

僕はもう死にそうだったのに。

そしてそこには電気も無いだろうに。

でもまあ、別にそれぐらいなら。

———いいよ。……………多分叶わないけど。

ことりはむう、と少しむくれると、

「そーゆー言い方反対。希望を持つっすよ」

いつもの様子で励ましてくれた。

———おうともさ、希望くらい持ってやんよ。約束分ぐらいは。

そう言った僕は笑えていたのだろうか？

それはわからないけど、たぶん笑えただろう。

生きてる証の心臓の鼓動が、少し遠くに聞こえる気がする。

また睡魔が襲ってきた。

……………一度、僕は深く息を吐く。

規則的な音が、さらに遠ざかっていった。

次に目覚めたとき、僕は頼む。

———ごめん、今すぐ枯れない桜まで連れて行ってくれる？

「……………うん、わかった」

ぷろろーぐ。

第一話 「僕とことりとさくらと桜。」

行くときは二人とも無言だった。

その後。

僕が言ったのはムチャな要求だったけど、担当医、水越先生は外出を許可してくれた。

先生には今まで診てくれた恩もあって、本当に感謝しても感謝しきれない。

僕の身体がうまく動かないので、車椅子を借りた。

本当にありがとうございます、先生。

そんなことを思いつつ、雪と桜吹雪が舞う中、僕らは枯れない桜へと向かった。

そして僕らはたどり着く。

冬なのに桜が咲き誇る、なんて、普通ではありえない景色の中で、

「待ってたよ、はる、ことりちゃん」

この小さな魔法使いが居る所に。

———よう、さくらんぼ。

「む、何でその呼び方かなあ？」

———はん、気を紛らわすためと……アレだ、思春期の男の
コが気になる子について取ってしまう衝動みたいなも

「ダウト」

———ナゼワカッター。

「……これ、ボクをバカにしてるって事でいいのかな？　なんかひ
つじょーに頭にくるんだけど」

———ひいい、許して、許しておくんなせえ！

「おいおい、まさかただで助かるうなんて考えちゃいねえよなあ？」

———そんな芳乃さんへと、我が家の筆筒に純一と賭けをし
て勝ったお金で買った、水戸〇門（初代）の限定版DVD BOXを
…………。

「……………のう、はる。　おぬしもワルよのう」

———いえいえ、芳乃さんほどでは。

「あの……………なにしてるの？」

「悪代官と越後屋ごっこ」

—————キャスト、さくら御代官、僕が越後屋。

「……………」

「……………」

沈黙がはしる。

「————さて、息抜き終わりー！」

—————イエー！

「何でそんなに元気になってるっすか……………」

やれやれ、といった様子で額に手を当てることり。
僕らの中で、暖かい空気が流れた。

閑話休題。

「さて、冗談はこの辺でやめておいて」
「冗談!？」

————掘り返すと戻れなくなるぞ、ことり。

「うう、了解っす………」

しおしおと萎れることり。
それを傍目にさくらは語りだした。

「今からこの桜を枯らせる。この、魔法の桜を」

さくらは語る。

その決意と、願いと、思いを伝えるために。
色々な想いと、苦悩を認めるために。

「だからボクは桜を枯らそうと思ったんだ」

————なるほどな。 うん、まあ、理由は解った。

「だけど、それをしてら—————」

――― 僕が、死ぬかもしれない。

「……………はるの身体は奇跡によって成り立っている。『体が弱いのに病気にならない』奇跡。『心臓が弱いのに発作が起きない』奇跡。まだあるけれどそれら全てが枯れない桜の魔法によって成り立っているもの」

――― つまり、枯れない桜が枯れたら、その“奇跡全てが消える”んだよね？

「うん、そのとおり。 だけど枯らさなきゃ……」

脳裏に赤い桜を吐きだす音夢の姿が映る。

――― 皆前に進めないし、音夢がやばい、か。 ったく、純一もアイツも難儀な目にあってるなあオイ。

「でもお兄ちゃんは枯らさなくていいって。 『ハルがいなくなるぐらいなら最初からやり直す』ってさ」

……………あのバカは。 ほんとーにバカだ。
こっちはもうとっくに決心してるってのに。

――― まったく、あのお人よしが。 さくら、純一に言っただけ。 「もしテメーラが僕のことを気にして幸せになれなかったらあの世でサブミッシヨンフルコースだ」ってな。

「……………じゃあ」

そもそも僕の決意は、ここに来る前にされている。
あんな音夢と純一を見て、耐えられるかっての。

———枯らせ。それでさくらかも、ことりも、純一も、音夢も。
皆が前に進めるんなら。

「———うん、わかった」

「待って！」

突然ことりが声を上げた。

その瞳にはうっすら涙が浮かんでいる。

「いいの？ ハルは本当にそれでいいの！？」

———良いも何も、それがベストだろう？

「ハルの気持ちはどこにあるの！！」

叫んだ。ことりが、心の底から。

———……………。

「ハルはそれで満足なの！？ コレで終わりでいいの！？ こんな
終わり方で、」

———いいんだよ。

「……………え？」

「……………これでいいんだ。そもそもことりだって知ってるだろ？　僕は親友のためなら犠牲になったって良いんだ、ってさ。」

「でも！」

「……………音夢は、親友なんだ。幼馴染で、親友。風紀委員では最高の相棒で、非公式新聞部では最強の宿敵。そんなアイツを助けられるんだから本望だよ。」

「……………ほんとに、何を言っても聞かなそうっすね」

「……………頑固なのも知ってるだろ？」

「その通りっす」

笑顔のままため息をつくと共に、こたりの目尻から涙が零れ落ちた。それを何とか手を動かして拭う。

「……………それじゃ、いい？」

「……………OK、始めて。」

「わかった。ちょっと手伝ってもらっちゃうかも」

舌をぺろりと出してわらうさくら。それを見て苦笑する僕。

そして、さくらは桜に両手をあてて願う。

願う。
願う。
願う。

枯れない桜がざわざわとゆれる。

「……………」

「……………」

……………。

僕も立ち上がり、

「たどり着くまでは支えてあげる」

———ありがとことり、助かる。

ことりに支えられつつ枯れない桜にたどり着く。

———枯れろ。 僕の大切な人たちが前に進むために。

———枯れろ。 親友を助けるために。

———枯れろ。 ……………この決意と、願いを無駄にしないために。

そして。

枯れない桜は、その花びらを散らした。

—○—

枯れゆく桜を眺めていると、

———っ、あ。

急に胸が苦しくなり、崩れ落ちるように枯れない桜に寄りかかった。
背中を預け、息を吐く。

「辛いの？」

「大丈夫、はる？」

———大丈夫じゃない。でもそこまで辛くはないな。

———ああ、でも眠いかな。……………うん。すごく、ねむい。

「あ……………」

「やっぱり、ダメそう？」

———そうだな、だめっぽい。眠ったら多分アウトだけど、

眠いから寝る。

「眠いからって……………もう」

「はるらしいって言えばはるらしいね、にやははっ」

呆れたような声を上げることりと泣きそうになっているのか鼻声の

さくら。

そんな彼女たちに僕はお別れを告げる。

——んじゃ、お休み。僕はグースカ寝ることにするよ。

「うん……………おやすみ、春日。いい夢を見てね」

——お前はこれからも良い歌唄えよ、ことり。

「ばいばい。おつかれさま、はる」

——ばいばい、いつも楽しかったよ、さくら。

最後に二人の姿を目に焼き付け、僕はまぶたを下ろす。

ああ、世かいが、まるで、やみにのまていくみいだ。

「お休み。今までお疲れさま。本当に、お疲れさま……………」

「……………さよなら」

——ん……………。

かんかが、だんんにぶくっていく。

おと、も、だだんこえなる。

「……………っ」
「……………う」

……………。

くら。まっらだ。

「ねえ、やっぱり起きて……………目を開けてよ、ねえ……………」
「……………う、っく」

きえる、こえ。

「……………っ」
「っぐ、えぐっ……………」

なにをこらえいる、こえ。

「ねえってば……………」
「えぐ……………っ」

それは、こんがんのよう、おねがいった。

「っ、まだ沢山やることあるのに！　まだ私たちとバンドもちゃんと組んでないし、新曲も聞かせてもらってない！　ギターに魔法、他にもたくさんさんの事、なにも教えてもらってない！！」

「ことりちゃん……………」

こんなにしんぱいをかけたことり、さくら、そしてきつとおなじようにしんぱいしていたみんなに、せめて、かんしゃだけはしていい。

「コレでお別れなんていやだよ……………」

「……………っ！！」

——　　ばーか。　　おわかれって、それじゃやくそくをことりがあきらめてるじゃん。

——　　あーもー、さくらもないてるし。

——　　やくそくはちゃんとまもるからな、ことり。

——　　さくらも、みんながいるんだ。　　なきむしのまんまでいるなよ？

——　　あと、なんてゆーか……………さんきゅー、いままでありがと。

——　　まいにちたのしかった。

——　　またね、ことり、さくら。

——　　みんなにもよろしく。

「あ……………」

「う……………」

もう、これで、おしまい。

「う……あっ……」

「……っ……」

かんぜに ぼくの しきは くら みにのま。
ぼ の、し ぞうのお が、と った。

「あああああああああああああああああああああ！！！！」
「わあああああああああああああああああああああ！！！！」

こうして、僕は死んだ。

風見学園本校3年生、12月。

初音島の、枯れない桜が枯れた日のことだった。

僕とことりとさくらと桜。 (後書き)

さて、死にました主人公。

これからD・C・?へ飛ばします。

飛んだ理由はそのうち。

ついでに作者は中二病入ってますのでご注意を。

誤字脱字など、報告していただけるとありがたいです。

最後に、こんな駄文を読んで下さりありがとうございました。

僕と桜と雪と少年。（前書き）

内容的にはかなり薄いです。

次話から幼少期に入ります。

2011 8／14編集。うまく左右に表示しようとしてもできない……。というわけで追っかけにしてみました。
交互に読めばいい感じになるかもしれない。

僕と桜と雪と少年。

深々と。

桜が舞っていた。

深々と。

桜が舞っていた。

驚くほどゆったりと。

音もなく。

驚くほどゆったりと。

音もなく。

見渡す限りに舞い散る、雪と花びら。

見渡す限りに舞い散る、桜の花びら。

それは何も描かれていないキャンバスに散りばめられたように。

真っ白な世界と交じり合うかのように。

それは一面を色づけるように、

ただ、ゆったりと舞い踊っていた。

白で塗りつぶされた世界を彩るように、

ただゆったりと舞い踊っていた。

それはとても幻想的で。

思わず、息をするのを忘れるほど神秘的で。

それはとても綺麗で。

呆れるくらいとても綺麗で。

ここに居る理由もわからなくて。

理解も出来ず。

ただ震えることしか出来なくて。

二人きりで。

戸惑って、

心細くて、

そんな何もかもわからない僕が、絶句しながら見入ってしまうぐら

い、

どうしようもなく途方にくれていたボクでさえ、見惚れてしまうくらい、

綺麗な景色だった。

綺麗な景色だった。

だから、

だから、

だからこれはきつと夢なんだと思った。

だからこれはきつと夢なんだと思った。

サクライロのキセキ。

真っ白な夢。

夢のようなユメ。

夢のような夢。

いつかこの奇跡^{ゆめ}から覚めるがわかっているのに、

いつか覚めてしまうことがわかっているのに、

それでも、これが夢ではないことを夢見てしまう。

それでも夢みることを夢見てしまう。

新しい物に期待を膨らませるような、

新しい予感に胸を膨らませるような、

まどろみの中で、優しい唄を聴いているような、

陽だまりの中でふと涙をこぼしてしまうような、

曇の合間に、陽が差し込むのを待ちわびるような、

冬の最中に春の訪れを待ち望むような、

そんな、夢。

そんな、夢。

寒空の下、前を歩く二人を見る。

差し伸べられた手を、ぎゅっと掴む。

こちらに振り向いた金色の残滓を目で追う。

温かな手。

優しい笑顔。

凍える世界で、

僕のように手を伸ばす。

雪の中で、

桜舞う世界の中で、

ぬくもりを確かめるように、

それだけが、印象深かった。

ぎゅっと。

そんな、

そんな、

|

始まりを告げる夢のはじまり――

r
y
B
l
o
s
s
o
m
&
a
m
p;
S
p
r
i
n
g
D
a
y
s
「
D.
C.
?
C.
S.
)
C
h
e
r

第二話 「僕と桜と雪と少年。」
推奨 BGM 『Dream of
Cherry tree』

僕と桜と雪と少年。（後書き）

と、いうわけで2話でした。

桜の木の元に現れた二人。

二人の正体はいったい！？

次回、「僕とよしゆきと芳乃さんと記憶喪失」

お楽しみに……ってタイトルでネタばれじゃねーかつ！

追記。

おっかけ、先がオリ主、後が原作主人公でございます。

……えー、ここまで読んでくださって、まことにありがとうございます
ました。

次話もお楽しみください。

僕とよしゆきと芳乃さんと記憶喪失。 (前書き)

無謀にも連続投稿。

見ろよこれ、やけに早い投稿してるだろ……………？
やストックなんて存在しないんだぜ……………。
もうプロット

僕とよしゆきと芳乃さんと記憶喪失。

———桜が舞っていた。

まるで雪と踊るように。

その中で僕らは立ち尽くしていた。

ここに居るのは、寒さに凍える少年と僕の二人だけ。

見上げれば、自分の何十倍も背の高いさくらの木。

白い息を口元から漏らしながら、それを見上げて涙を流す。

「……………きみ、ないてるの？」

すぐ傍からかけられる声。

先ほど寒さに震えていた少年のものだった。

「どこかいたい？ それともさみしい？」

「いいや、どこも痛くない。寂しいわけでもない。でも……………」

———何で僕は泣いているんだろう？

わからない。

わからない。

僕が、なんでここに居るかわからない。

僕が、今までどう生きていたのかもわからない。

僕が、130cmに満たないであろう身長に違和感を覚えているのかもわからない。

「なんにもわからない。 記憶喪失って奴かな」

そういつて不安をごまかし、笑う。

少年はそれを聞いて同じように笑い、

「ぼくも、なんだ」

そう言った。

第三話 「僕とよしゆきと芳乃さんと記憶喪失。」

そうしてお互い、もう話すことは無くなったかのように沈黙を貫く。

僕は桜を見上げ変わらず涙を流し。

彼は体を縮こまらせて寒さから逃げる。

さらに数分。

すると彼は沈黙に我慢できなくなったのか（または寒さを堪えるのが辛くなったのか）、こう言った。

「名前……」

「ん、なに？」

「君の名前は、なに？」

それを聞かれて少し迷う。

………：名前は、覚えていた。

しかし苗字が思い出せない。

名前だけでもとりあえず名乗ろう。

「^{しゅんか}春日」

「え？」

「だから、僕の名前。 春の日って書いて、春日」

「へえ………：よろしくね、ハル」

「うん、よろしく………：って、ハル？」

あだ名をつけられました、びっくり。

でもなんだかしっくり来てる。

僕の昔の渾名だったのかもな、とか考えてみたり。
でも、ちょーっと女っぽい気が………。

「はるのひ、なんでしょ？」

「いや、そうなんだけど」

「だめかなあ？」

「んー……………まあ、別にいいよ」

ただやっぱりちょーっと女っぽい気がする。

……………特に気にすることは無いだろう（むしろ気にしていたらこの世の中の男のハルさんに失礼だ）。

彼の名前も聞きたいが、それよりも僕が気にしなければならぬのは、この初音島でこれからどうするのか、ということ。

まずは、衣住食を……………って、あれ？

そこで僕は自分の思考に気が付いた。

……………どうして僕は、ここの地名が、初音島って、解ったんだ？

なぜか冷や汗がどっと吹き出る。

足が緊張して息がうまく出来なくなる。

膝をつき、手をのばし、枯れない桜に手をかける。

「かれ、ない……………さくら」

自分の口から出た言葉とは思えないほどのかすれた声だった。それも気にならないほど、憶えていることを頭の中から掘り出す。

枯れない桜。初音島。さくら。魔法。芳乃。おばあちゃん。ことり。春日。

浮かぶ単語はこれぐらいだ。
 やっぱりわからない。
 さっぱりわからない。

わからない。 わからない。 わからない。 わからない。 わからない。
わからない。 わからない。 わからない。 わからない。 わからない。
わからない。 わからない。 わからない。 わからない。 わからない。
わからない。 わからない。 わからない。 わからない。 わからない。
わからない。 わからない。 わからない。 わからない。 わからない。

———！

「こんばんは」

突然の闖入者に現実に引き戻され、僕は体を固まらせる。

聞いたことのある声———のような気がした。

多分気のせいだろう。

記憶が無いから判断出来るわけないし。

そう心の中で割り切ってよしゆきに声をかけた人物に目を向ける。

雪と桜の中できらめく金の髪。

よしゆきを見つめる優しそうな碧眼。

僕より少し大きいぐらいのその少女を目に入れて、

――涙が溢れた。

理由なんてわからない。

いや、多分要らないんだろう。

今、僕の心に飛び交っているのは懐かしさと嬉しさがごちゃ混ぜになった気持ちだから。

それはまったく訳が分からない、でも悪い感じではない気持ちなのだから。

そんな感情をもたらした彼女は、少年――『さくらいよしゆき』
と言うらしい――に話しかけ、そしてこちらを向いた。

「あれ、君……は………」

彼女の目が見開かれる。

僕は息を一回吸って、昂った気持ちを抑えた。

頭がすっと冷え、いつもの自分を取り戻す。

“いつも”なんて言葉、記憶喪失の人間から滑稽だけれど。

「こんばんは、初めまして。……………いい夜ですね」

「……………あ」

「えっと、春日っていいいます。あ、僕の名前です。春の日って書いて春日」

「……………」

黙り込まれた。

ヤバイ、間が持たない！

何か無いか、何か無いか……………そうだ名前！

「えっと、あの、名前を教えてもらってもいいですか？」

「……………」

「……………あのー？」

「…………え？ あ、ごめんね。ええと、名前だったっけ。うん、ボクの名前は……………」

そこまで言くと、彼女は悲しんでいるような、懐かしんでいるような、そんな目をして、

「……………さくら。芳乃さくらだよ」

自分の名前を言った。

「……………よしの、さくら？」

「うん、それがボクの名前だよ。……………色々聞きたいことがあるけど、今はいいか」

最後が小声で聞き取りづらい。

「何か言いました？」

「ううん、何も」

そうはぐらかし、彼女……芳乃さくらはちよつと考えるそぶりを見せる。

「うーん……………」

「……………」

「……………」

考え込む少女、ぼけつとする僕、寒そうな少年。

カオスなラインナップだ。

それより“芳乃”と“さくら”。

この二つはさっき頭に浮かんだものだ。

もしかしたら、彼女——芳乃さくらさん——は僕の知り合いなのかもしれない。

でも違ったら申し訳ない。

記憶が戻ったらちゃんと話すことにしよう。

白い息が視界を覆った。

すぐ隣からも。

……………申し訳ない、完璧に忘れてた。ごめんね、よしゆき。

さて、それなら……………。

「よしゆき。 ちょっと手を貸して」

「……………? はい」

パーの形に開かれた両手に手を合わせる。

「変換／20kcalキロカロリー＝簡易カイロ20分×2」

手のひらに熱を感じる。

僕の手が、まるでカイロのように暖かくなった。

「……あったかい」

「だろーね」

「なんでこんなにあったかいの？」

「実は僕、魔法使いなんだ」

「へー、うそっばい」

そうよしゆきには言われてしまったが、実際に僕は魔法使いだ。

僕が使える魔法は数個。

その内良く使うのが、“カロリーを他の現象、物に変える”というものだ。

だから、『○○を凍らせる』とか、『2500kcalのおまんじゅうを創る』ことが出来たりする。

ただし、やはり等価交換が発生するのか、僕の体にある分しかカロリーは消費できない。
使い勝手は良いが、燃料が無かったら意味の無いエンジンみたいなものなんだ。

と、読者見えない誰かに説明していると、芳乃さんがこっちをじっと見ているのに気がつく。

「まさか本当に……………?」

「はい?」

「……………ううん、やっぱりなんでもないよ」

「……………そうですか」

気になるんですけど、すごく。

さて、と芳乃さんが仕切りなおす。

「おいで?」

「……………」

よしゆきが芳乃さんに手招きされた。
近寄ると頭を撫でられ手を握られている。

「寒くない?」

「……………さむい」

「おなか、へった？」

「……………へった」

「そっか。それじゃ、あったかくてご飯の食べられるところに行こっか♪」

こくり、と頷くよしゆき。

それを見て芳乃さんは笑う。

そうしてよしゆきは、芳乃さんに手を引かれて歩いていった。ドナドナ。

さらばだ、よしゆき。

生きていればまた会おう。

「って、なんで付いて来てないの!？」

「え、僕も？」

「当たり前だよ。少なくともボクは、寒空の下に子供を一人だけ残して去るなんて義理と人情に反しそうな事はやらないし」

義理と人情って。

少し苦笑を浮かべながら手をつなぎつつ歩く前の二人を追いかける。途中で付いて来てるかちまちま確認する芳乃さんが、ちょっと面白い。

「あ、キミも手を繋ぐ？」

そう言ってこちらに手を伸ばす芳乃さん。

その手を取って僕は少し息を吐く。

手のひらから感じるぬくもりに安心感を覚え。

横に人がいる実感に現実感を覚え。
そして、

「あははっ」

理由なんてわからなくても、また笑えることに心から歓喜するんだ。

ちらりと芳乃さんを見る。

「♪ ♪ ♪ ♪」

———久しぶり。 また会えて嬉しいよ。

機嫌のよさそうなその横顔に、今はそう伝えられないけれど。
僕はまだ、おぼろげにしか記憶を思い出せないけど。

この言葉を、記憶が戻ったら伝えよう。

そう心に決めた、桜舞う雪の日だった。

僕とよしゆきと芳乃さんと記憶喪失。（後書き）

と、ゆーわけでタイトルどおり主人公は記憶喪失……というか一部をおぼろげにしか覚えてない状況です。

思い出すのはいつのー日ーかー。

早めに思い出させることは確かです。

次回、「僕とゆめちゃんとおとめちゃんと朝倉家」

更新するのは、1から2週間後だろうなあ……………。

感想なんかをいただけると非常に嬉しいです。

ここまで読んで頂き、ありがとうございました。

改稿

To Youに詳しい出会いの様子があったので少し改稿しました。

僕とゆめちゃんとおとめちゃんと朝倉家。（前書き）

とは言っただものの音姫成分は激薄。

ちょっと原作まんますぎやしないか、とビクビクしてます。

ちなみに、主人公の髪はこげ茶のロング。普段はリボンで一纏めにしています。

ただし今はリボンが無いのでストレートになっています。

いつかこれもどこかに付け足さなくちやなあ……………。

僕とゆめちゃんとおとめちゃんと朝倉家。

桜並木を歩く。

隣では芳乃さんとよしゆきが何か話している。
でもその内容は頭に一つも入ってこない。

なぜなら……………

「……………あふ」

今現在、僕はヒジョーに眠いからです。

第四話 「僕とゆめちゃんとおとめちゃんと朝倉家。」

なぜだ。なぜこんなにも眠い。
夜更かしか？

昨日の僕は朝5…30まで起きていて6…00に学校やらなにやら

に出かけた大馬鹿野郎とでも言うのか!?

……んなわけないか。 作者じゃあるまいし。

……多分魔法を使った弊害だろう。

久々に使った『変換』で疲れたんだと思う。

カロリーが減ったせいでお腹が減るより先に、眠気のほうがやってきてしまった。

そんなところだと思いますですよ、僕は。

こんなときは歌うのが一番だ。 うんそうだ、多分そうだ。

歌って眠気を吹き飛ばせ!

……はてさて、どうしようか。

雪も降ってるし『Jingle Bells』かな?

それとも『あわてんぼうのサンタクロース』?

Last Christmasも捨てがたい。

んー、でもやっぱり……………

「————ね、春日くん?」

「ええ、確かに気分的にも明るい『Jingle Bells』が
いい気がします」

「…………え?」

「…………失言です、お気になさらず」

Oh. 失敬、失敬。 考え事で聞き流してました。
思わず返事がおかしくなっちゃってすみません。

「そ……………そうなんだ……………」

冷や汗を流す芳乃さん。

本題に戻ることにしましょう。

「はい。 で、なんですか？」

「ボクのこと、名前で呼んでほしいなって」

「だってさ、よしゆき」

話しかけられていないよしゆきに話を振る。

「うえっ、どうしてそこでぼくにふるの!？」

「…………… (期待に満ちた目) 」

「…………… (頑張れという目) 」

「え……………えっと……………さくらさん」

「うん♪」

「あ……………」

恥ずかしそうに言うよしゆきに、それに答える芳乃さん。

頭を撫でられて、恥ずかしいけど嬉しそうな顔になるよしゆき。

一人でいたから、人に呼びかけて笑顔が返ってくるのはとても嬉しいものなのだろう。

って、義之がクリアーしたって事は次は————。

「さて、次は……………」

「うっ……………」

「……………（自分もやっただからお前もやれよ的な目）」

「……………やっぱ僕か。」

あんまり年上の人を名前で呼びたくないんだけどなあ……………。
まあいいか、よしゆきみたいにさん付けをすれば。

「さくら」

「……………っ!？」

……………あれ？

『さん』がつかないぞ？

「さくらさ……………」

「あ……………」

どうしてもここでちゃん切れてしまう。

「あつれえ？ すみません、ちょっと待って頂いてもよろしいですか？」

「え、うん……………」

これは瞬間特訓で行くしかない!!
後ろを向いて、小声で呟く。

「さくら、さくらさくらさくらさ、さくらさ、さくらさ、さくらさ、さくらさ、さくらさん」

おけ、これで完璧。

誰にも文句は言わせねーぜ!

「おーけーです、『さくらさん』」

「あ……………」

どうしてそこで悲しそうな顔をするんですか。
勘弁してください、心が痛いです。

「えーと、あの一」

「…………あ、ええと、ごめんねー。もう会えない知り合いと被っちゃってびっくりしちゃったんだ、にやはは」

わざと明るく取り繕うさくら『さん』。

……………うう、『さん』がやけに付けづらい。

ってか、『もう会えない』って事は僕がさくらさんの知り合いじゃ

ないってことか？
でもそれなら色々納得がいく。

『僕がその人に声からなにまでそっくり』とか、『性格的にも似てる』とか。

それでその人を僕に投影して、そして僕がその人でないことに傷つく。

その結果がああ悲しそうな顔だ。

けどそうすると、僕のおぼろげな記憶が伝える『懐かしさ』やその他の気持ちはなんなのか、というところが引つかかる（納得いかない、とも言える）。

——— いったい、僕は誰なんだ……………？

「あ、ここここ。着いたよ、二人とも」

思考の海に突入しかけた僕を引き戻したのは、さくらさんの声だった。

「今日からここが、キミのお家だよ」

「————— え？」

「ここが？」

「うん、ボクのお兄ちゃんの家なんだけどね。みんな、いい人だよ」

そんな会話をBGMにして、僕は既視感を感じていた。
まるで、今までに何度も何度もここに足を運んだような、そんな感
覚。

その洋風二階建ての家の表札は、

「朝、倉？」
あさくら

……あさくら。 ■■と■■のいた、僕らの憩いの場。

そして――

「あれ？」

――なんだっけ。

そう考えてる間にさくらはインターフォンを押していた。

ぴーん、ぽーん、と鳴る呼び鈴。
インターフォン。

ドアの向こうから響いてくる小さな足音。
すぐに扉が少しだけ開いた。

その隙間から、興味津々といったような幼い顔が覗く。

■夢に雰囲気似ている気がする。

「え、あ、えっと」

「じー」

うろたえるよしゆき。

何も言わずによしゆきを見つめ続ける女の子。

「あ、あの」

「じーーーーーーー」

さらにうろたえるよしゆき。

そして僕にも視線を向け始める女の子。

「さ、さくらさん……………」

ヘルプを求めるか、よしゆき。確かにあの視線には耐えられないよな。

その視線を受けたさくらさんは楽しそうに笑うと、

「にやはは、こんばんはゆめちゃん」

「こんばんは」

そう夜の挨拶を少女と交わした。
僕らに視線を向けたまま挨拶する、えっと……ゆめ、ちゃん？

「この子がよしゆきくん。　この前お話した子ね」
「うん」

「で、この子が春日くん。　ちょっとした事情で一緒になったんだ」
「うん」

こくり、こくりと頷くゆめちゃん。
それを見て、さくらさんは玄関の奥へと声をかけた。

「おとめちゃんもおいで」

その声に応じるように小さい息が漏れ、

「……………」

もう一つの顔がドアの隙間から飛び出した。
顔を出した高さから感じるに、この子がお姉さんなのだろう。

「ほら、ゆめ。　ちゃんと外にでて」
「はい」

そして僕らの前に二人の少女が並んだ。
ぶすっとしている大きいほうの少女と、少し恥ずかしそうな小さい少女。

横にいるよしゆきは困ったような顔で僕とさくらさんを見る。
それがわかつているのにも関わらず、悪戯っぽい笑顔で無情にもさくらさんがこう言う。

「ボクはお兄ちゃんと話があるから、あとは適当にやってね」

「あ、ちょ、ま」

「ちゃんと仲良くするんだよー♪」

僕が声をかけかけたにも関わらず、さくらさんは家の中に入っ
ていく。

そして二人の視線に晒される僕ら。

まずは自己紹介、かな。

「はじめまして。春日っていいです。ハルって呼んでください」

「あーっと、さくらいよしゆきです、よろしく」

なんとなくよしゆきがつけたニックネームを気に入っていた僕である。

そしてよしゆきが僕の自己紹介に便乗した。

もし、よしゆきひとりでやっていたら、きっと頭を下げて手でも差し出していただろう。

「……………って、そんなことよりさっき僕、苗字名乗ってないじゃん。」

「……………どんまいどんまい、気にしない気にしない。」

と、ゆめちゃんがこちらに近づいてきた。

「ゆめ」

「へ？」

面食らったよしゆきの間抜けな声上がる。

ゆめちゃんは自分を指差し、にーっと笑った。

「あさくらゆめ」

「あーっと、名前？」

「うん」

「そっか、ゆめって言うんだ」

「そう。よろしくね、お……………」

「お？」

「お……………おにいちゃん」

そうしておたがい少し照れくさそうな顔をする。

ほとんど二人の世界を展開しているようだ。 若いってすばらしい。

……………いやまあ、僕も若いけどさ。

唐突にゆめちゃんがこっちを向いた。
どうやら律儀に再び自己紹介をしてくれるようだ。

「ゆめ」

「うん、あさくらゆめちゃんね」

「よろしく、ハルおねえちゃん！」

……………んあえ？

今、なんて仰いましたゆめさん？

「……………ねえ、ゆめちゃん」

「なに、ハルおねえちゃん」

「……………（言いようの無いダメージを受けている）」

「どうしたの？」

「……………ごめんね、ゆめちゃん。悪いけど僕は男なんだ……」

……………

「おとこ？ おじいちゃんと、おにいちゃんといっしょ？」

「キミのおじいさんがオナベでなければYesだね……」

「そうなんだ……………。おねえちゃんがふえるとおもったのに」

「……………うん、ごめんね」

「いいよ、はるおにいちゃん」

そうしてゆめちゃんは楽しそうに笑う。

……………ああ、そうだ。この子は純粹なだけ。純粹なだけな

んだ。

後ろ髪が長いってだけで女の人って判断するような可愛い子じゃないか。

決して僕が女っぽいとかそういうわけではない、はずだ、多分。

いいか、おちつけ、れれれれいせいになにに――――！！

そんなゆめちゃんの口撃（誤字にあらず）を受けた僕が目をそらすと、ちようどおとめちゃんと目があつた。

「おとめ」

「うん、よろし」

「……………」

返事も聞かずに歩き出すくーるびゅーてい（？）。

それを見てよしゆきがぽつりと漏らす。

「ぼくたち、もしかしてめいわくだった？」

「んー、そんなことないよ」

すかさずゆめちゃんがフォローする。

――――ええ子や。

「でも」

「おねえちゃん、さいきん怒ってばかりだから。　　気にしなくて

いいと思うよ」

なおもマイナス思考のよしゆきをゆめちゃんが励ます。
僕？

あの態度よりおねえちゃん発言が響いて響いてしかたないっす。

「おじいちゃんも、おかあさんもだいかんげいって言ってたもん。
………わ、わたしもいやじゃないし。 おにいちゃんが、おに
いちゃんになるの」

照れつつも、ちゃんとよしゆきに『ここにいていい』とつたえるゆ
めちゃん。

それに元気付けられたのか、よしゆきは頷くとお礼を言う。

「うん。 ありがとう」

「そ、それよりもはやく中に入ろう？ かぜひいちゃうよ」

照れ隠しなのか、ゆめちゃんはよしゆきと僕の手を掴むと玄関まで
引っ張った。

家の中には暖かい空気、そしておいしそうな匂いが漂っていた。

————— ああ、帰ってきたんだなあ。

なぜか僕はそう思う。

その時点で、僕がここに来るときの言うべき言葉は決まった。

「あ、え、えっと、おじゃまします」

「ちがうよ」

そうよしゆきがゆめちゃんに諭されている。
それを聞きながら僕はこう呟いた。

「「ただいま」」

奇しくもそれは、ゆめちゃんの言葉に重なって。
そして、僕が心に浮かんだ懐かしさを噛み締めながら言った二度目の『ただいま』は。

「「ただいま」」

……………よしゆきが、朝倉家の一員になった言葉に重なった。

僕とゆめちゃんとおとめちゃんと朝倉家。（後書き）

うーあー、文才がほしいー！

次回、「僕とさくらさんと純一さんと『はる』。」

誤字、脱字等がありましたら活動報告、または感想までお願いします。

なにか設定の矛盾、その他感じたことなどございましたら感想までお願いします（誹謗、中傷除く）。

ここまで読んでくださり、真にありがとうございました。

僕とさくらさんと純一さんと『はる』。(前書き)

難産でした。

しかもキャラが似非キャラに。

………やっぱ難しいな、文章を書くのは。

主人公のキャラが安定しない………。

あ、T o Y o u やりましたよー

ちょっと修正しました。

僕とさくらさんと純一さんと『はる』。

僕ら二人が、朝倉さんの家にお邪魔することになった晩（とはいっても着いたときには夜だったんだけれど）。

「私はこの姉妹の祖父、朝倉純一だ」
あさくむじゅんいち

———そこで出会った人物は、どこか懐かしい雰囲気をもった、ちよつと面倒くさがりなおじいさんだった。

第五話 「僕とさくらさんと純一さんと『はる』。」

「そふ？」

「ああ、二人のおじいちゃんってことだよ。 今日から君にとって
も『おじいちゃん』ということになるがね」

祖父という意味がわからなかったよしゆきに、純一さん（朝倉さん
じゃわかりづらいからコレで呼ぶことにした）が、のんびりと説明
する。

「ぼくのおじいちゃん……………」

なにやら感慨深げに呟くよしゆき。

純一さんはそれを見て少し笑い、こちらを見た。

「あー……………その、なんだ」

「はい、なんでしょう？」

「……………晩御飯でも、食べるかい？」

「……………はい？」

「よしゆきくんもお腹がすいているようだし、取って置きのシチュ
ーでも食べるかな？　　と思ってね」

なんか取り繕われた気がする。

さくらさんも小声で、「お兄ちゃんの意気地なし、にぶちん、ヘタ
レ」と呟いているし。

って言うか真ん中関係ないですよね、さくらさん？

とりあえずこういう時は……………

「……………だって、よしゆき。　どうしたい？」

「たべていいなら、たべたいです」

……………よしゆきへ、キラーパス放り投げる。
シュート

そしてそれを見事に受けて発言するよしゆき。

僕ら、いいコンビ目指せるんじゃないだろうか。

……………なに考えてんだ、僕は。

「はは、ここで『食べるな』なんて言うほど薄情な人間ではないよ、私は」

そう笑ってキッチンまで行き、コンロの鍋に火をかける。

その後、シチューを僕は頂いて（なぜかその場に居た純一さんを除くみんなが食べることに成った）、そして部屋へと連れて行かれた。

よしゆきは一人部屋、僕は純一さんと同じ部屋だ。

僕が寝るための布団を敷き終わり、中に入っていると純一さんが話しかけてくる。

「悪いねえ、ハル君。部屋がちよつと足りなくて」

「いえいえ、ここで寝れるだけでもありがたいです。ご飯も頂いてますし」

「ははは、おおげさだなあ」

純一さんは笑うけど、“もしさくらさんがあの場所にいなかったら”とかんがえるとぞっとする。

二人の子供が、真冬に寝る場所と食べるものを探して闊歩するなんて考えたくもない。
寒さを耐えるために魔法を使っても、僕がガス欠（カロリー切れ）になったらアウトだし、運よく寝る場所があったとしても翌日には補導されるだろう。

――あー、もうやめだ、やめ！ Ifの話なんてして立ってしょうがないだろうが！

「それじゃあ、電気を消すぞ」

「はい。 おやすみなさい、純一さん」

明かりが消えた。

それと同時に睡魔が僕に襲い掛かる。

あ、そういえばすごく眠かったんだっけ。

そう思うと意識はすぐ闇に飲まれていった。

「あしたも、このせかいでげんきにすごせますように」

最後に、小声でおまじないをして眠る。

じゃあ、おやすみなさい。

Side .. Junichi

「あしたも、このせかいでげんきにすごせますように」

その一言を聞いて、私は心臓が止まるかと思った。
思い出すのは色あせた記憶。

風見学園付属二年、夏休み。

自宅で音夢、私、ハル、ことりでお泊り会を開いたときのことだ。

『なあ、ハル。　なんでお前寝る前にいつも「明日も、この世界で
元気で過ごせますように」っていうんだ？』

『それはね、おまじない』

『おまじない？』

『それ、まだ続けてたんだ……………』

『ん、のとり。　もし明日目が覚めても、今日と同じように元氣
に過ごせたらいいなーっていう』

『『な、なんて後ろ向きな……………』』

『……………それ、教えたの私っす。　しかも七年前』

『それから続けてんのか!？』

『ん、のとり!』

『いや、そんなドヤ顔されても』

『皆もやればいいのに』

『』『絶対やらない!!』『』

“おまじない”

いつ悪化するかわからないハルが、次の日に恐怖しながら寝るのを
みかねたことりが教えた、この世界でたった一つのおまじない。

それを今、寝息を立て始めた少年、春日—————これもハルと
同じ名前だ—————が言った。

幼いときのハルと同じ口調で。

幼いときのハルと同じ顔で。

幼いときのハルと同じ声で。

「……………これは、本当かねえ」

先程の義之君と春日君を連れてきたときの、さくらの慌てっぷりと
いったら無かった。

「いきなり、『はるが生き返った!』なんて叫ぶなんてなあ」

大げさだと思った。

いや、でもさくらにとってはそれぐらいの衝撃だったのかもしれない。

親友………しかもあつというまに亡くなってしまった少年の面影を強く残している人物が現れ、言動、仕種、そして果てには同じ魔法まで使っているのだから。

そして体面した私も何も言えなかった。

無理に話を逸らしてやり過ぎたが、さくらにはボロクソ言われるし、結局彼と深く話は出来ずじまい。

寝るときならば、と意気込んでみれば疲れていたのか、電気を消すとすぐに寝てしまう春日君。

……さて、どうするか。

どうしようもないだろう、かったるいことに。

「春日君、君がアイツだったら言わなきゃいけないことがあるんだ。

………私があの時、怖がって言えなかったことを」

小声で呟く。

明日の朝にさくらと話し合おう。

そう決めて私は眠りの淵に落ちていくのだった。

S i d e e n d .

僕らが朝倉家にお世話になってから2日経った。

僕の部屋は相変わらず純一さんと一緒。

よしゆきは環境に慣れるのに精一杯のようだったけれど、僕のほうはこの2日間で何故だかわからないぐらいにすぐ適応してしまった。

長い間過ごしていた感じ、とでも言えばいいのか。

そんな空気の中、なぜか読めるハードカバーの小説をリビングで読む。

それが今日までの2日間の過ごし方だった。

「……………あ、お昼ご飯」

読書に夢中になっていたせいか、いつの間にか昼時になっていた。お昼はどうしようか、と悩む僕の耳に声が飛び込んでくる。

「ただいま」

最近朝からさくらさんの家に行っている純一さんが帰ってきた。と、思ったら僕に向かってこう言う。

「春日君、昼ごはんを食べ終わったら、ちょっと着いて来てくれるかい？」

「いいですけど……………どこに？」

「それは着いてのお楽しみ、だ」

そうして僕は、昼食を食べてから純一さんに連れられて散歩に出かけた。

相変わらず周りへの既視感デジャヴが酷かったけれど気にせずやり過ごす。そして純一さんといっしょにたどり着いたのは、昨日僕らが突っ立っていたあの、枯れない桜の下。

そこにはさくらさんが神妙な顔をして佇んでいた。

「……………来たんだね」

「ちゃんと連れてきたぞ、さくら」

「おはようございます」

互いに挨拶を交わすと無言になる。

さくらさんは真剣な顔をし、純一さんは目を閉じてなにやら考え込んでいた。

「それで僕になにか用ですか？」

僕はさくらさんに問う。

少しばかりの沈黙の後、さくらさんはこう、僕に聞いた。

「キミは……………『はる』、なの？」

僕に意味が解らなかった。

さくらさんが言っているのが、よしゆきにつけられたあだ名のことだと思ったからだ。

「はあ、僕のあだ名はハルですが」

だが、さくらさんが聞いたかったのはそのことじゃなかったらしい。

「違う………違う！ キミが『染衣春日』そめいしゅんかなのかって聞いているの！」

「染………衣……？」

「そう！ ボクの親友で、お兄ちゃんと音夢ちゃんことりちゃんと僕の幼馴染で！！ そして誰よりもすごい魔法が使えた『はる』なのかって聞いているのっ！！！」

手をぐっと握り締め、声を荒げ、肩で息をし、目に涙をためるさくらさん。

……………それでも、今の僕には答えられないのが現実だ。

『そうだな、その通り。むしろ当たり前だな』

「それでっ！！！」

「さくら」

さくらさんが次の言葉を言おうとしたときに純一さんからの仲裁が入る。

そこで自分かなり興奮していたのに気が付いたのか、さくらさんは深く息を吸うと目を閉じて息を吐き出し、そして僕に聞いた。

「……………つまり、キミがボクたちの知ってる人か確認したかったんだ」

「ああ、なるほど」

最初からそう言ってもらえればよかったのに。
僕はそれに口を開き、NOと……………

『……………なんだ。悪いけどごめん、ちょっと話を聞いてくれよ僕』

……………視界が急にブレ始めた。

足が勝手に枯れない桜に向かう。

手が届き、肘をつけ、体重をかける。

「……………春日、くん？」

「は、い？」

「大丈夫？　なんかフラフラしてるみたいだけど」

「ああ、大、丈夫、です。　こんなの、へっちゃ……………」

心配そうな声にそこまで言って、僕の意識は闇に沈んだ。



目を、開く。

仰向けに寝かされている僕を心配そうに見つめる二人。

「目、覚めた？ 大丈夫？ 具合悪くない？」

「うん、平気です。……………これ以上ないほどに具合は良いですし」

ニツ、と笑いかけるとさくらは安心したように息を吐き、純一もいくらか安心したような顔をしていた。

僕の意識がはつきりするまで数分待ってもらおう。

体の調子が悪いところが無いか確認し、さくらが顔を引き締めて再び僕に聞いた。

「で、どうなの？ キミは……………『はる』？ それとも別の誰か？」

そして僕は質問に答えるべく言葉を紡ぐ。

「えっと、答えですか」

「……………うん」

「僕、記憶喪失だって言ったじゃないですか。…………でも、
してはやけにデジャヴを感じたんだ」
「今まで来たことがあるとか、やったことがあるって感じの？」

さくらは、うーんといったような顔で僕に問いかける。
それに僕は笑いかけ、ある言葉で返答した。

「ん、の……り」
「「……………っ!」」

二人が驚いた顔でこちらを見る。
その顔が面白かったので少し笑ってしまった。

「この文頭の省略できるところは省略する癖も、さっきちょっと」
「なら、ほんとうにお前は……………」

その純一の疑問に、僕は不敵な笑みで答える。

「……………ん、僕は、黄泉返った染衣春日だ」

その言葉を言い終わると、さくらは僕に飛びついてきた。

「はる————！」

「あー、もー、落ち着いて。まだ話は終わってねえ……ないです」

「……………え？」

「少しだけ思い出したとはいっても、まだ完璧じゃないんです」

そう。

思い出せたのはほんの一部なのだ。

さくらが離れるのを見て、純一が僕に聞いた。

「……………なにを、思い出したんだい？」

「僕に四人の幼馴染が居たこと。自分の口癖。幼馴染の呼び方。

病気のこと。枯れない桜のこと。魔法のこと。自分の名前。

思い出は、学園生活でさくら……さんがいたときのことぐらいか。

……………そして最後に……………僕が死んだこと」

僕の名前、染衣春日。

音夢、純一、ことり、さくら。騒がしくも愛すべき幼馴染たち。

『う』ん、『そ』のとーりなどの先頭を略すクセ。

呼び方。音夢、純一、ことり、さくら。みんな下の名前そのままだ。

魔法を使えたこと。コレはまあ、ここに来たときにはもうわかってたことだけど。

枯れない桜。願いを叶える魔法の桜。あの奇跡は、僕ら幼馴染

全員に何かしらのことをもたらしていた。

心臓、いや、とにかく体が弱かったこと。

思い出は……なぜだろう、さくらに後ろからのしかかられたこと、ここの歌を聴きに行ったこと、音夢に料理を教えたこと、純一を杉■の間の手から救い出した———と思ったら僕が罠に嵌って強制的に非公式新聞部の副部長まで担ぎ上げられたような、そんな記憶ばかり浮かぶ。

完全には思い出していないからか、記憶の中の幼馴染以外の顔がはつきりしない。

そして、僕が死んだこと。その場面は思い出せないけれど、それだけはわかる。

「つまり、断片的にしか思い出せないということかい？」

純一が僕に尋ねる。　　やっぱ記憶の中と比べると、すっかり老けるな。

「ん、のーり。　　まあ、日常に支障のないレベルだから問題はない……ですよ」

こくり、と頷く。

「もしかして、さっきの気絶って？」

「あー、あれは………」

悩む。　　答えていいものか。

………言っているか。『僕』もそう言っていたことだし

「記憶を持った『染衣春日』に会ってきました」

「「……………は？」」

二人ともポカーンだよ。

なに言っちゃってんのって顔だよ。

「えっと……………つまり？」

おずおずとさくらが聞く。

「二重人格における、他人格に会ったと思ってくれればいいです。

まあ、正式にはちよつと違うんですけどね。で、彼に見せてもらったんですよ」

それに僕は答え、

「断片的だけでも、大切な記憶を」

彼————『ハル』————に良く似た笑顔で返した。

僕とさくらさんと純一さんと『はる』。(後書き)

初めての視点変更。

初めての文章書き。

初めての………似非キャラ？

とにかく、頑張ってみました。

『ハル』に出会った春日。彼から見せられた記憶は……？

次回「僕と春とはるとハル。」

ここまで読んでくださり、真にありがとうございました。

僕と春とはるとハル。(前書き)

疲れた……。

話を考えるのって大変だぁ……………。

っていうか今度(12/25?)発売のD・Cのおかげで外伝が出来てしまいそうなの。

それはまあおいといて死にそうになってまで書き上げた本編ドゾー

名前の漢字間違えてたので修正しました

僕と春とはるとハル。

目を開けると、そこには大きな桜が咲いていた。

花が咲き、夏日が射し、紅葉が落ち、雪が降り注ぐ、いつも変わらずにこの場所で。

そのちぐはぐで、でも神秘的な風景の中に、その人は佇んでいた。

背中をこちらに向け、目を桜に向けている。

白い聖歌隊の帽子を被ったこげ茶の髪は、背中半分近くまで伸びていた。

それを根元近くで青いリボンを使って縛っている。

髪は縛っている以外は無造作ながらも綺麗に整えられ、全体的に中性的な雰囲気醸し出していた。

今の服装が男子生徒の着るような学ランじゃなかったら、ぱっと見女と間違える容姿をしている。

そんな彼を見て僕は直感した。

……………あの人が、『ハル』なんだ。

そして『ハル』は、僕に気付くところらを向き、やってきた僕に向けて、静かに、その重い口を開いた。

「やー、悪いね。ちょっと話を聞いてもらいたくてさあ。無理やり呼んじゃった☆」

「……………はい？」

————訂正、軽すぎる口を利いた。

第六話 「僕と春とはるとハル。」

さっきの神秘的だと思える雰囲気は宇宙のどこかで吹っ飛ばした

『ハル』は背中を木から離し、僕のほうに歩き出した。

その後ろにひよこひよこ見えるのはおそらく後ろ髪だろう。

僕の目の前まで来ると、その髪を尾のように振り回してターンして、ビシッ！と僕を指差してから『ハル』は笑顔でさっきと同じことをもう一度言う。

「や、悪いね。話聞いてもらいたくてさ。ここに呼んじやつた、てへ☆」

「いや、あの、言った意味がわからなかったとかじゃないんで。

あとキモイですそれ」

「れ、そうなの？ なーんだ、てっきり言われた言葉の意味が解ら

ないぐらい精神が幼くなつたのか……！と勘違いするところだったよ。あと毒舌注意」

「すみません、記憶が無いもので」

「それまったく関係ないよね」

にはは、それでこそ僕だな。と『ハル』は笑う。

そうして僕の姿をしげしげと眺め始めた。

「それにしても……ん、どっからどう見ても僕だな。他人からは小さい頃、こんな風に見えてたのか。確かに間違われても仕方ないわな、こりゃ」

何か納得するように頷く『ハル』。

話はいったいなんなんだろう。

「……………あのー、」

「や、でもあの頃は普段着が病衣だったから……あ、それも原因か。くっそ、やっぱりもつと男っぽい服装にすべきだったな」

「えっとー？」

「ん？ でもまてよ？ ここはあえてそっち路線で行ってみるのも」

「話って何なんですか……！！！」

周りが静まりかえる。

「たく、僕はせっかちな。せっかく場を和ませるために真面ごほん！冗談をかましていたというのに」

「いや、本音が出かけてますから。—————じゃなくて！

僕に何か話すことがあるんじゃないかって話です！」

「……………ん、話すことなんて腐るほどあるさ。　ちよつと来て」

僕のツツコミを受けた『ハル』は目を伏せ、僕の手を引いて桜の木まで誘う。

歩きながら周囲を確認すると、そこはやはり不思議な世界だった。雪の中で舞う蝶や、夏に咲く秋の花、晴れているのに雪が降る。

そんな世界を目に移しながら僕らは木までたどり着いた。

そこで『ハル』は桜を見上げながら自分のことを語りだす。

「まず僕のことから。　僕は、そめいしゅんか染衣春日の記憶から生まれた擬似人格みたいなものなんだ」

「えーっと……つまり、『記憶が人格を持ったのが自分』ってこと？」

「ん、のーり。　そして僕は昔の君——染衣春日——の、生き写しみたいなものでもあるってことだ。　で、その記憶が抜け落ちたのがお前」

つまり、『今までの人生を生きていた記憶から生まれた僕』Ⅱ『ハル』と、『3日前、桜の木の下に現れた記憶が無い僕』Ⅱ『僕』。僕らは同じ存在ということなのだろうか。

その疑問に『ハル』はこう答えた。

「んー、ほとんどあってる……………かな。　違うのは記憶を持っている僕が君と同じ存在ってところ。　僕は君の中から別れたものだから、君が僕を含むことで染衣春日になる。　たとえばなら『染衣春

日』と言うカップの中に、『君』という紅茶があつて、そこに入っている砂糖が『僕』なんだ」

「えっと、つまり『ハル』＋僕＝染衣春日。そして僕が記憶を思い出せば出すほど、『ハル』は僕に混ざっていくってこと？」

「ん、のとり。生活している中で、記憶は徐々に思い出せるようになるだろうから。まるで、」

「『砂糖が紅茶に溶けるよう』に？」

「……のとりだ」

まあ、最終的に人格が二つある、なんてことにはならないから安心しろ。

そう『ハル』は言うど、桜に背を持たれた。

周りを眺め、懐かしそうに目を細める。

何を思っているのか、僕にはまったくわからなかった。

何かを眺め続ける『ハル』と、帰り方がわからくて佇んでいる僕。

少しの沈黙の後、『ハル』は僕に向けてこう言った。

「んじゃ、とりあえず記憶返すわ」

世界が止まる。

数秒停止した僕は思わずツツコんだ。

「いや『焦るな、戻るまで気長に待て』的なことを今言ったところじゃん！　なんであっさり『返すわ』みたいな事が言えるんだよ！？」

「や、あのさくらの様子を見てたらなんとも言えなくなってるさー。さっきの興奮ぶりを見たら少しは思い出させないと、って思ったから」

「それはそうだけど……！」

「そもそも、君がここに来たのは同じように『思い出したい』と君が願ったからだ。　無意識にでもな」

確かにそうだ。

あのさくらさんの叫びを聞いて、「僕が『染衣春日』ならさっさと思い出さなきゃいけない」と思って、そうしたら『ハル』の声が聞こえ始めたんだった。

「グダグダ言っていないでさっさとこっちに来なよ。　桜に寄りかかって、深呼吸するんだ」

「……うん、わかった」

言われた通りに桜に背を預ける。

「うわっ………」

暖かった。

桜はそれ自体が熱を持っていて、それは僕の体をやさしく包み込む。無意識に呼吸がゆったりとしたものになり、そして、

『かったるいけど頼んだ、親友』

『はあ、しゃーないなあ』

『貸し1で頼む』

『やだ。花より団子で何かおこれ』

『財布空なの知って言ってるだろ!』

『ん、たりまえ』

『はる、おっはよー!』

『うわ痛っ! 何してくれやがるさくらんぼ!』

『んー? スキンシップだよスキンシップ』

『降りろ、邪魔』

『うわ、ヒド! 幼馴染に言うような言葉じゃないと思うんだけど』

『……じゃあお前が押し掛かってきて零れた僕のドッペはどうしてくれる?』

『えーと……… s o r r y ?』

『いっぺん殴る』

『兄さん、ハル! もう少し静かにしてくださいって!』

『や、音夢。どう考えてもコレはさすがに無理でしょ。そう思

わない純一?』

『……音夢、お前は兄である俺の理解の範疇を超えるところまで行
ってしまったようだな………』

『ふ、た、り、と、も、そ、こ、に、な、お、り、な、さ、い!』

『音夢、落ち着くっす! ほら、瘴気みたいなのがでてくるから!』

『原因はきつと———』

『『枯れない桜だ^だね』』

『っ、げほ!』

『ハル、そんなたいちょうでだいじょうぶか?』

『だいじょうぶだ、もんだいない』

『……なんかだめそう』

『どうした、我らが非公式新聞部の副部長よ!!』

『どうしてこうなった………』

『オカルトの塊である魔法使いが下っ端では示しがつかないのでな』

『お前、それ………!』

『なあに安心しろ。この事は俺と口の堅い幹部以外誰も知らない』

『あのなあ、お前の「安心しろ」ほど安心できないものはないんだよ、杉■!!』

『ことりはさ、親しい友って言うより心の友って感じだよね』

『ハル ソウルイト春、心友っていい響きっすね』

『………そうか?』

懐かしい記憶に、感情が溢れた。なみだ

「ちったー思い出したようだな」

そう言って笑う『僕』。

それに向けて僕は同じように笑みを返す。

「ん、おかげさまでね。 にははっ!」

「そりゃよかった」

「これでやっと言えるよ」

「ここに来たときのやつか?」

「ん、のーり。 じゃあそろそろ行くよ」

少し臃げになった僕自身の背中を軽く叩いて僕は桜から離れた。さっき自分が立っていたほうへ歩き出す。

そんな僕の背後から声がかかった。

「まっすぐ行け。　すぐに目が覚める」

片手を上げ、その言葉通りに進んでいく。

僕が始めにいた場所を越えると、世界が白い光に包まれて――――

「で、目が覚めたってところです」

さくら、純一は二人とも真剣な顔でこちらの話を聞いていた。
そしておもむろに目をこすったり頬を抓りはじめる。
コレが本当に現実であるか確認するように。

「いふあい」

「耄碌したわけじゃないみたいだな、私は」

「や、当たり前でしょう、それは。　お二人にそこまで疑われると
流石の僕も傷つきますよ」

「はる、なんだ。　本当に、はる、なんだ」

「ハル、なんだな。　ちゃんと生きている、ハルなんだよな」

「だから言ってるでしょう、僕はちゃんとここにいますよって。」

さくらさんも純一さんもあんまりですよ」

あんまりにも疑われたのでちょっとむっとした。
そういえばなんとなくさくらが落ち着かない様子なのが気になる。

「どうしました、さくらさん？」
「……………」

そう言うと、さくらはさらに落ち着かない様子になった。
……………なぜに？
さくらは言いづらそうに言う。

「あのさ、はる。　ボクたちに敬語はやめてくれない？　一応勝手知ったる仲なんだし」

「あー、なに？　そんなの気にしてたんですか」
「うにゃ、だって……………ね」

「他人行儀なのが嫌だったんだろう、さくら？」

純一の指摘にさくらが照れたように縮こまる。

「あー、はいはい。　これでいいだろ、さくら」
「……………うん♪」

一発でご機嫌になったさくら。
そしてそのまま僕に飛び掛ろうとしたのでそれを手で制す。

「まだ挨拶が終わってないから」

????とクエスチョンマークを浮かべるさくら、そしてそれを眺めていた純一に向かって、不思議な世界にもあった桜の下で、僕はこ

の言葉を言った。

「久しぶり。 また会えて嬉しいよ」

満面の笑顔になったさくらと、苦笑した純一の顔は二度と忘れることは無いだろう。

「はる!!」

「ぐえっ」

.....このタツクルの痛みとともに。

僕と春とはるとハル。(後書き)

この回、前回と出てきた？の原作キャラが2人しかない（しかも無印登場キャラ）ことに気がついてしまったUNXYSです。

まあ気にせず書き進めますが。

記憶が微妙に戻った春日。

そんな彼が、一人の女性と二人の少女に出会い、何を考え何を伝えるのか。

次回、「僕と由姫さんとミキミキとまひるっち」

……………こめでい予定！

ここまで読んでいただき、真にありがとうございました。

ちょっと修正しました。

次回更新は未定です。

ええ、未定ですとも。

番外1「朝倉音姫との関係、染衣春日の一日」(前書き)

感想が来て狂喜乱舞して書いた短編、長さが短編レベルじゃないのはなぜだ。

とりあえず音姫フラグ仮建設。

ヒロインは……誰になる？

あ、口調崩壊注意です^^

フラグ建設状況

さくら	100/100	OK!
音姫	60/100	Normal
■	80/100	OK!

番外1「朝倉音姫との関係、染衣春日の一日」

本日、12／11。

義之（さくらに漢字を教えてもらった）と僕が、朝倉家のお世話になって3日がたった。

僕の部屋は相変わらず純一と一緒に。

ただし4日ほど経ったらさくらの家に移動することになっていました。

その理由？

「ボクの家に来て欲しい！」

と、僕の幼馴染の『体は子供、頭脳は大人』な金髪碧眼が声高に叫んだからです、はい。

純一のヤローも、

「……私の家の部屋も余ってないし、良いんじゃないか？」

そう賛同しまして。

晴れて僕は12／15を持って芳乃家の居候になり下がる（？）ことになったのでした。

それはまあ、さておき。

いつものようにハードカバーの本を読み漁っている僕です。

「ハルー、さくらこうえんにいかないー？」

「ハルおにいちゃん、あそぼー！」

玄関口から声がかかりました。

義之と由夢ちゃんでしょう。

この3日の間、家族が増えたのが嬉しかったのか由夢（こっちもさくらに教えてもらった）ちゃんは義之にべったり。

今日もこの島で一番大きい公園に二人で出かけるようで。

「んー、ちょっとやりたいことがあるから僕はパスでー」

「わかったー！」

「いってきまーす！」

「気をつけてなー！」

にぎやかな二人。

仲良きことは美しき哉、とでも言いますか。

ちなみに純一はご飯を食べて毎朝さくらの家に出かけ、お昼ご飯を食べてさくらの家に向かい、帰ってきて晩御飯を食べるというサイクルを繰り返しています。

なにしてるんだろう、謎だ（実はこのとき、戸籍をどうするか考えていたらしい。お疲れ様様だよ、二人とも）。

さて、そんな中僕は――――

「……………なに？」

「や、ちよつと考え事をね」

この向かいに座る少女に、笑顔を見せてもらおうと必死に努力中なのです。

番外1。

「朝倉音姫との関係、染衣春日の一日」

ブリーフィングスタート！

T a r g e t. 朝倉音姫（さくらに以下略）

D e t a i l. 無愛想、そっけない態度。 少なくとも僕は、一度も彼女の笑顔を見ていない。

A i m. 彼女を一度でいいから笑わせる。

さて、僕の今日までの戦績発表。

1日目…ちよつと気になったので話しかける。

「あの、」

「(ぷいっ)」

そっぽ向かれて逃げられた。

2日目…リベンジに燃えて再び話しかける。

「ちよつといい？」

「いそがしいから」

セールスマン真っ青なぶった切りかたでスルー、撃沈。

3日目…今日。

「なに？」

「や、ちよつと考え事をね」

そして今回も撃ち……………つて、あれ？

今回は聞く前にあちらから返答が！

やった、これ偉大な前進ですよ！？

さあ、彼女の僕への返答は—————！

「へえ」

「……………」

「……………」

おう、じーざす。

会話が終わっちまったぜ。

————————いやいや、終わりにすんなよ僕。

「の、さあ」

「なに？」

さてどうしよう。

世間話からはじめたほうがいいのだろうか。

直球でいけばいいんだろうか。

それとも違う方向から行けばいいのだろうか。

「なんでそんなに笑わないの？」

「……………え？」

はい直球ありがとうございますー。　口が勝手に動きましたー。

ええい、やけくそだ！

「この3日の間見てたけど僕の前ではまったく一度もくすりとも笑わないじゃんだから気になって話しかけたんだでもなんていうかどうすればいいのかわかんなくなったから」

口がまわるまわるまわる。

句読点なしで一氣に言い終えてぜーはー、ぜーはーと息継ぎをした。びっくりした顔をこっちに向ける音姫ちゃんに『で、どうなの？』と視線を送る。

「……………それ、は」

「けほけほっ、それは？」

「……………」

「あ……………」

暗い顔になっちゃった。

あーあ、惜しいところまでいった気がしたんだけど、撃沈か。

まあ、ですよー。 僕もこんなに早く聞きだせるなんて思ってますしー。

「……………」

「……………」

今日は失敗だな、こりゃ。

「創造／50kcalキロカロリー 饅頭25kcalキロカロリー×2個」

甘いもので気を紛らわそうと、ぽん、と自分で作った饅頭を口に放り込む。

もう一つを音姫ちゃんの手のひらへ。

そして渡されたそれと僕を交互に約3秒づつガン見している音姫ち

やん。

.....。

あ、やば。

人前で普通に魔法使っちゃった。

「いまの……」

「あ、あー！！ 用事思い出しちゃったなー！ 出かけてきますー！！」

「あ………」

「じゃあねー！！！！」

ごまかして逃げるようにその場を立ち去る。

上着を羽織り、真っ赤なマフラーを首に巻いた。

目的地は本屋、お金は十分。

『ヌー』（オカルト本。ガセっぽいのがたくさん載ってる）でも買って爆笑してやろう。

そう僕が現実逃避に浸りながら玄関を出る。

その頃、リビングにポツンと残されている音姫ちゃんが、

「……………おいしい」

僕が創った饅頭を食べて、その可憐な笑顔を浮かべたことを僕は知るよしもなかった。

—○—

参った。

「しまった……………」

小脇に『ヌー』を持ちながら思う。

何でこんなことを忘れていたのか。

人前で簡単に魔法を使うなんて。

いや、確かに「変換」だったらまだよかったんだけど「創造」はまずい。

自分や他のものに影響を及ぼす変換に、物体を作り出す創造。

前者は『体が暖まった』とか言い訳が使えるけれど、後者は創造過程を見られたらどうしようもない。

ばれにくい変換、ばれやすい創造。

これから気をつけなきゃならないな……………。

毎回逃げて言い訳考えて戻るなんて厄介なことしたくないし。

それよりも、今重要なのは。

「音姫ちゃんになんて言い訳しよう……………」

そう、まずはそれなのだ。

「実は隠し持っていたんだ！

————アホか。出すところから見られてただろ。

透明な饅頭に色をつけてみたんだ！

————どうやって？とか聞かれたら崩壊じゃん。

わあ、びっくりして手から饅頭が出てきちゃった！

————って芸人かよっ！！！！」

後々気付くことになるが、傍から見たら独りでツツコミをいれる少年というのは、実に不気味なものだった。

—○—

「よし、手品と言うことで誤魔化そう」

そう僕は言い訳を決めると桜公園に向かう。

今は大体午後三時。

目当てはもちろんチョコバナナの屋台だ。

「おじさん、バナナー！」

「おう少年、バナナー！」

バナナ
B N N 帝国風挨拶を交わす。

コレで僕らはブラザーさ！

「2本ください」

「あいよっ！ 半分おまけしてやらあ！」

「え？ いや、それは……………」

「俺達はブラザーだろ？ ならもってけ！」

「あ……………ありがとう、ありがとうおじさん……………！！！」

というわけで2・5本チョコバナナを入手した僕は、義之と由夢ちゃんを探し始める。

15分後。

「いない……………」

どこを探しても二人はいなかった。

せっかくチョコバナナをあげようと思ったのに。

主にバナナ色に。

「ひっぐ……………」

「……………ん？」

泣き声が聞こえたのでそちらを見ると、少年が泥だらけで座っていた。

「どうしたの？」

思わず声をかける。

少年は泣いているまま、

「うちゅうじんはいないってばかにされた」

と言った。

ああ、なるほど。

つまりオカルトを否定されて一対多数でボコボコにされたと。

なるほどなるほど。

「……………これ、あげる」

「え？」

隣に座り、小脇に持っていた『ヌー』とチョコバナナを渡す。

さて、ちょっと話でもしますか。

「いいかい、宇宙人はいるんだ。 ピンク色の皮をかぶったクマ型宇宙人とかね」

「……………」

実際に会ったことがあるからなんとも言えないんですよ。

ちなみに僕の私物（さくらが保存しておいてくれた）には、友好の証的なアイテムが眠っているんです。

「今渡した本にも載っている宇宙人は、いる『かも』しれない。でもそれを『いない』にするのは君自身なんだ」

「うん」

こくり、と頷く少年。

僕は話を続ける。

「バカにされても『いる』って思うこと。もしそれで殴ってきたら、殴り返せ。もしそれで勝てないならトラップを仕掛けろ」

「トラップ？」

「そう、トラップ。たとえば落とし穴とか、ね。インターネットとか使えば作り方とかすぐに出てくるよ」

「……………」

「まあ、それはどうでもいいや。とにかく、信じ続けること。

そうすれば、宇宙人にいつか会うことが出来るかもしれないよ？」

「……………うん！」

少年に笑顔が戻ったところで立ち上がった。

「じゃあ、帰るから。またいつか、縁があったら会おうね」

「うん、ばいばい」

「ん、ばいばー」

僕は手を振り走り出した。

向かうは朝倉家。

このチョコバナナを、音姫ちゃんにあげようかなと考えながら。

「しんじれば、か」

僕は知らない。

僕が走り去った後、そう呟いたその少年が、三日後にはガキ大将をトラップに引っ掛け、グループの頂点に降臨することを。

その少年の苗字が、『杉並』ということを……………。

—○—

「だいまー」

「……………さっきの」

玄関で待ち構えていた音姫ちゃんに遭遇した。

「あー、さっきのは手じ「まほう？」な……………」

……………え？

何でそれを知ってるんですか？

混乱する僕に、音姫ちゃんは告げる。

「わたしも、おかあさんもまほうつかいだから」

驚いた。

思わず右手に持ってる0・5のチョコバナナを落とすぐらいに。

「音姫ちゃん………も？」

「そう、わたしも『せいぎのまほうつかい』」

「……正義、ねえ」

この歳で言うなら微笑ましいもんだけれど。

「それで、ハルは………」

「魔法使いだよ」

わかってるなら誤魔化す必要も無い。

「じゃあ———！」

「あー、ストップ。とりあえずはい、これ」

音姫ちゃんの話を通り、左手のチョコバナナを渡す。
そしてその背中を押し、リビングへ。

「はい、ここで話は聞くから」
「……………」

そして僕らは、少しの間語り合った。

—○—

「だからさ、義之ともお話してあげてよ」

「……………うん、わかった」

少しは打ち解けることができたからか、僕の頼みを受け入れてくれた音姫ちゃん。

彼女は今、話しかけてきた義之とポツリポツリとだが会話し始めている。

「うんうん、良き哉良き哉」

「なにが？」

さくらがぼくの頭に頭を乗せて話しかけてくる。

「ちゃんと会話してるからさ。…………義之、迷惑だったとか勘違いしてみたいだし」

「……………はる、まさかそれを気にして？」

「なんのこと？　僕は音姫ちゃんと仲良くなりたかったただだよ。それに、他の人とも話せば笑顔が見れるんじゃないかなって思っただけだし」

「まったく……………はるは相変わらずだね……………」

やれやれ、と言わんばかりの口調にイラっとしたので思わずこの言葉を言ってみる。

「日本の名物と言えば？」

「スーシ、テンプーラ、フジヤマー！」

……なんか安心したと同時に和んだ。

「あーあ、見せてあげたいなー」

唐突にさくらが意味不明なことを呟き始める。

「……なにを、誰に？」

「今のはるを、あの娘に」

？と疑問符を浮かべる僕に、ひ・み・つ（はあと）と言い、料理の出来具合を確認しにいくさくら。

「――――――あの娘って、だれだ？」

その呟きは、純一の晩飯の完成を告げる声にかき消された。

「おつかれさん、純一」

「ああ、お疲れ様、ハル」

「あー、眠い。子供の頃ってこんなに眠いもんだったか？」

「そんなもんじゃなかったか？ 私もこの時間には眠くなっていた気がするぞ」

「あ……あーあー。そうか、昼も辛くて病院のベッドで寝てたからそうは感じなかったのか」

「いやハル、そんな重いことをさらっと言わないでくれ」

「なかったよ。でもなんか幸せだ。体はおかしくない、病気も無い。また明日の陽が見れる安心感なんて得られるとは思ってなかった」

「代わりに私が明日の陽が拝めるかわからなくなってるけどな」

「にはは、ちげーねー」

「ん…………そろそろ私は寝る」

「わかった。僕も寝ることにするよ」

「おやすみ、ハル」

「ん、やすみ、純一」

「『明日も、この世界で元気に過ごせますように』」

「あ、お見舞い行かなきゃ」

番外1「朝倉音姫との関係、染衣春日の一日」(後書き)

なんかノリノリで書いた。

コメディ色は強いと思う。

『NGパターン』

「あー、さっきのは手じ「まほう？」な……………」

……………え？

何でそれを知ってるんですか？

「あ、はる。　どうしたのこんなところで？」

困惑している僕の前に今一番いて助かる人物が現れた。

「結婚してくれ」

「うにゃ！？　えっと、はい、ボクなんかでよければ……………じゃなくて！」

「……………ごめん、あまりにいいタイミングに感動して変なことを口走った」

僕らはお互いに混乱していた。

思わずプロポーズしてそれに答えるぐらいに。

とりあえず僕は質問をさくらにぶつける。

「……………音姫ちゃんが何で魔法を知っているのか10文字以上5

文字以内で答えろ」

「それ、誰も答えられないから（プロポーズが変なことって………
…）。音姫ちゃんのお母さんも魔法使いなんだ」

「ああ、なるほどなるほど。理解した」

なら安心だ、誤魔化さなくてすむ。

「わたしと、おかあさんは――――――――――」

この後の音姫とのフラグ建設に関わりそうなのでさくら介入は却下に。

代わりにチョコバナナに活躍していただきました。

次回、本編更新。

『ヌー』が『ムー』になってたので訂正。

ここまで読んでいただき、真にありがとうございます。

僕と由姫さんと病氣と病院。 (前書き)

新年明けましておめでとうございます。

あまりにも長くなったので分けました。

そして作者は新年早々桜内くん達張りにスキー旅行へ。
楽しんでできましたよー。

ではでは、本文をどうぞー。

あ、別キャラ注意です。

僕と由姫さんと病氣と病院。

僕は死んだ。

それは変えようの無い事実。

病氣になった僕に、奇跡が起こり続けたその果てで。

治療法は確かにあった。

でも捨てられた僕にはどうしようもできなくて。
なにもあたえられなくてなにもできなくてなにもうまくいかなくて
なにもうまくあわなくてなにもかまがくるしくて。

それでも、無様に生き続けた。

そんな僕は、本日。

誰かを救う、一步を踏み出せたかもしれません。

第七話「僕と由姫さんと病氣と病院。」

ことの始まりは、純一の一言だった。

「そうだ、見舞い行こう」

京都行きを告げるような発言だったが、みんなの意見もあってお見舞いに行くことになった。

それが昨日の夜の出来事。

そして今日、早速出かけることにしたらしい。

「ちょ、ちょっとまってー」

「ゆめ、はやくしなさい……」

いつもより幾分か浮かれている姉妹^{ふたり}を見て、義之も楽しみなようだ。そんな義之が純一に尋ねる。

「ねえ……じゅんいちさん、ぼくたち、これからどこへいくの?」

って、純一説明してなかったんかい!?

純一も驚いた顔で義之を見る。

「おや、義之君には言っ
てなかったか」

「わたしたち、これからおかあさんのところにいくんだよ」

「おかあさん………」

「うん。おかあさん、びょうきでにゅういんしてるんだ」

会話を続ける義之と由夢ちゃんを視界に入れながら僕は純一に質問

する。

「病氣って、どんな？」

「一族特有の、魔法使いが罹^{かか}る病氣だそうだ。彼女の母も、祖母もそれで亡くなっているよ」

「……………そっか」

一族特有。

不思議なもんだよ、まったく。

水越病院？

水越病院。

そんなアイコンタクトを交わし僕は歩き出す。

「ゆめ、おしゃべりしないでいくわよ……………」

後ろからは、楽しげな足音が3つ、連なるように響いていた。

—○—

病院なう。

「ごめん純一、ちょっと探検してくる」

「……………わかった。それまでにハルのことは説明しておくから安心してくれ」

「助かる」

純一に一言断ってから目の前にある階段を一段飛ばしで駆け上がる。
西病棟、3階、左回りで奥から2番目。

部屋に誰もいないことを確認してからドアを開く。
そこには、

「ん、のまんまだ」

僕が病に臥せていたときと何一つ変わらない光景があった。

窓から見える12月の景色。

ただただ白くて清潔なシーツ。

外が見やすいように配置されたベッド。

そして鍵がかけられた金庫。

何一つ変わりが無い。

「そりゃ、そうか」

そう僕はポツリと漏らし息を吸い込み、吐き出した。
ふと、ベッドに目を向けて、そこに少年じぶんを幻視する。

「――――」

瞬きを一度すると、その姿は消えてしまうが、それでもこう眩かす

にはいられなかった。

「ただいま、ありがとうございます、いってきます、さよなら」

歓迎、感謝、出発、告別。

一気にその言葉を伝え、僕は病室のドアを閉める。

なんだか、すっきりした気分になった。

—○—

病室の前に立つ。

中からは賑やかな声。

「よしっ」

カラカラ、と扉を開けて入ると、そこには見知った顔4つと知らない顔が1つあった。

「「「あ、ハル」」」

「遅かったな」

「ちょっと前の部屋見てきた」

そう言葉を交わし、ベッドにいる女性へと目を向ける。

———あれ？

「彼がそうなんですか、お義父さん？」

「そう、春日だ」

「あ、はい、はじめまして。 染衣春日です。 『ハル』 って呼んでください」

違和感を見して頭をぺこり、と90度下げる。

それをみてその女性は笑いながら答えた。

「私は朝倉由姫。あさくら ゆき 音姫ちゃんと由夢ちゃんのお母さんです」

柔らかな雰囲気纏っている『お母さん』がそこにはいた。

僕は礼儀正しく対応する。

数回の応答の後、僕は「由夢ちゃんと音姫ちゃんが話したがっているの」といって会話を打ち切った。

「純一。 ちょっと残るからロビーで5分ぐらい待っててくれない？ もし遅れたら置いてっちゃって良いから」

「それぐらいはいいが………なにかあったのか？」

「んー、ちょい由姫さんが気になって」

「……………人妻はやめておけ」

「何の話!？」

「冗談だ」

意味不明なコントを終え、純一は3人に呼びかける。

「そのの姉妹、それと義之君。 そろそろ時間だから帰るよ」

「わかった」

「はい。 ばいばいおかあさん」

「うん。 さようなら」

次々と挨拶をして病室の外に出るみんな。
そして純一が最後に僕らに目配せをしたあと、ドアが閉じられた。
すっ、と息を吸う。

「ええと、これからよろしくお願いします」

「はい、よろしく願います。ねえハル君、さっきから思ってたことだけれど、もっと砕けた口調で話していいわよ」

「……………いいんですか？」

「ええ、もちろん♪」

「じゃあ遠慮なく。よろしく、由姫さん」

「はいはい、よろしくね」

にこやかな挨拶を交わす。

ああ、なんか和むなあ……………。

「で、魔法使いなんですって？」

「ごふっ!!」

すいません、和みなんて1秒持ちませんでした。
というかこのお母さん直球過ぎ！

「音姫がちよっと嬉しそうに伝えてきたわよー？ 『せいぎのまほうつかいのぶかがふえた』って」

「それは……………その……………」

「ふふ、ありがとね、ハル君。音姫、なんだか思いつめてるみたかったから」

「あ、いや、別に…………」

やっぱり年上の人は苦手だ。

どうしても言いくるめられたりしてしまうことが多いから。
……ってというか音姫ちゃん、部下って。

「これで、私がいなくなっても安心ね……………」

「あの一、多分治りますよ」

「いいのよ。 慰めなんて必要ないから」

「慰めもなにも僕、多分治療法知ってますし」

「……………え？」

す、そういえばそうなのだ。

先ほど抱いた強烈な違和感と純一から聞いた症状、原因。
それらを統合して僕が思ったことは、

————— 昔の僕と、酷似してないか？

ということだった。

病気になった原因だって、大切なものがキャパシティ限界までいく
ことだけだと、

幼い頃から“自分より大切”が多くあったけれど増えはしなかった
僕。

結婚して子供が出来て、一気に“大切”が増えた由姫さん。

この違いは早いか遅いかだけだし。
それに魔法使いだし。

「じよ、冗談でしょ、ハル君？」

「ん……………残念ながら事実かもしれません。 あれ？ この場合は

残念ならじゃないか。 喜ばしいことにだな、うん」

「本当に？」

「多分、僕が知ってる病と同じなら」

病気の治療法は確かにある。

だけどその方法は、この病を知つて^{にかかった}いる人物が手助けしないと治らないというものだった。

僕の場合、治療法はわかってても治療が出来なかったから駄目だったんだ。

しかもそれが原因で体は弱くなるわ心臓は爆弾を抱えるわで。

ま、僕がそれで死んだからこそ、由姫さんを治療できたりしちゃうんだけどねー。

「ただ確証が無いから『治るッ!!』とは言えませんが」

「……………」

「あー、由姫さん？」

「ぐすっ」

黙っていてなんだと思ったら泣いていた。

「っ、ごめんなさい。 ぐすっ、まだ家族と居られると思ったら涙が」

「あーほら、大の大人がみつともない。 はいハンカチ。 これで涙を拭いて拭いて」

「創造／250kcalキロカロリーハンカチ×1枚」

ハンカチを渡す。

まったく、まだ治ると決まったわけじゃないのに。

「とりあえず、確証を得たらすぐにやりますよ。具体的には一週間以内には」

「ごめんね、ありがとう」

「ん、気にしないでください」

そうして僕は伸びを一つ。

病室から退出しようとドアに手をかける。

「あ、早めにはしますので報告をお楽しみに」

「……はいはい、楽しみに待たせていただきます♪」

「じゃあまたー」

ひらひらと手を振って退出する。

やった。

僕が死んだことで助かる命を見つけた。

そんなルンルンな気分で階段へ向かう。

上機嫌から僕が注意不足になっていたのが不味かった。

「あ」

気付いたときには浮遊感。

やっぱ!!

「変換／500 kcalキロカロリー⇨自重軽減19kg⇩500g／1分」

体がふわりと軽くなる。

しかし完全に衝撃が殺せるわけではない。

頭から落ちているので、たんこぶを覚悟してぎゅっと目を瞑る。

そして、

「あぶない!!」

誰かの声と同時に僕は何かに受け止められた。

「……………あれ？」

「大丈夫？」

心配そうにこちらを見るのは茶髪をポニーテールにした風見学園付属の制服を着ている女の子。

抱きかかえられているようで、なんだか気恥ずかしい。

……………じゃなくて。

「あ……………ありがとうございます」

お礼をきちんとして立ち上がる。

少女は訝しげに僕を受け止めていた自分の手をちらりと見て答えた。

「ううん、別にいいよ。それでちょっと聞きたいんだけど」

「はい？」

「……………体重。何でそんなに軽いの？」

あ、ヤッバー！！！！

思わず体重減らしてしまったー！

「ああ、これは魔ほ—————」

「まほ？」

「—————らばにたどり着いたものだけが取得できる、特殊スキルなんです！」

……………いや、もっと誤魔化しようがあっただろう、僕。

「へえ、そうなんだあ……………」

「はい、そうなんです」

「あはははは」

「にはははは」

「で、本当は？」

「……………気のせいじゃないですか？」

「本当は？」

「だから、」

「ほ・ん・と・う・は？」

「……………」

「……………」

「魔法使いなんです、ごめんなさい誰にも言わないでください」

負けた。

もうどこにでもなれ。

ってゆーか生まれ変わってからガード薄くなってないか、僕？

音姫ちゃんの前でも使っちゃうし、今もバレてるし。

もし世界が違ったらオコジョになってるかもしれないぞ？

と、自分自身を殴り飛ばしたい衝動に駆られていると僕の発言を聞いてなにやら考え込んでいた少女が口を開いた。

「……………わかった、黙っててあげる」

「ありがとうございます、それじゃ！」

「……………その代わり」

さわやかスマイルで逃げ出そうとしたけど無理だった。

そんなに世の中甘くないですね。

はてさて、何を要求されるのか。

体重を減らせとか？

……………多分ないな、それは。

「私の友達を、助けて」

そういった少女の顔は、とほうに暮れているみたいで、すぐに泣きだしそうだった。

僕と由姫さんと病氣と病院。（後書き）

由姫さん生存フラグ、そしてまひる生存フラグ。

由姫さんはキャラが「ノリのいいお母さん」ということしか解りませんでした、すみません。

友達と、その友達。

彼女たちは願う。

願いをかなえる桜の下で。

そして僕が気付いてしまったことは――――

次回「僕とミキミキとまひるっちと桜の木」

指摘、気になること、誤字脱字などございましたら感想まで。

ここまで読んで頂き、まことにありがとうございます。

僕とシキシキとまひるっちと桜の木。 (前書き)

つかれた。

つかれた。

つかれた。

キャラ崩壊……………というか別キャラ注意。

ではどうぞ！。

ああ、文才がほしい……………。

僕とミキミキとまひるっちと桜の木。

友達。

そう、友達。

僕の人生でそう呼べるやつは結構居たけど、『親友』といったら幼馴染4人だろう。

風見学園において知名度が恐ろしく高かった僕ら5人組。

「かつたるい和菓子製造人間」^{工場長} 朝倉純一。

「猫かぶりの風紀委員病弱娘」^長 朝倉音夢。

「風見学園1の読心アイドル」^{スーパースター} 白河ことり。

「帰ってきた金髪の魔法少女」^{使い} 芳乃さくら。

「新聞部兼風紀委員の二重スパイ女男」^{かけもちダブル} 染衣春日^{がお}。

さくらが外国に行っていたとき以外はほとんど一緒に。

『皆のためなら自分の命を投げ出してもいい』くらい、僕にとっては大切だった。

もし、同じような人がいるとしたら、僕は全力で助けるだろう。

昔、そう決めたのを覚えている。

そういえば、僕は約束をちゃんと叶えられたのかな？

……………そして、桜の木は何故再び咲いているんだろう。

まだまだ、『今』には謎が多い。

第八話「僕とミキミキとまひるっちと桜の木。」

朝比奈ミキ——通称ミキミキ（命名、僕。本人には不評）——には、友人がいる。
その娘は病魔に侵されていて、現在は学校にも通えない状態のと。
と。

「だから魔法なんてものが本当にあるなら、病気をパッと消し去れないものかなーって」

「さすがに病気は無理だよ。魔法が原因の病気ならともかく」

由姫さんの病気、おそらく僕と同じ病気ならばそうだ。

魔法が根底にあるものと普通の体の不調では魔法なんて役に立たない。

「じゃあ————」

「いや、実は方法、ないこともないんだけど……………」

魔法で治らないならどうするか。

……………簡単だ、枯れない桜に願えばいい。

僕の病気も、最初はといえば魔法のせいだ。

でもその後は弱くなった身体が病気を患い、内臓器官が悪くなって
いていた。

それを誤魔化し、僕を約20年生かし続けた桜。

最後に死ぬということがわかっていても、それでも幸せにすごすこ
とができる。

そんな桜が、今咲いているんだ。

「枯れない桜」

おとぎばなし

「…………御伽噺の？」

「信じてみる価値はあるよ。……………絶対にね」

桜が叶えるのは純粹な願いのみ。

ミキミキとその友人が、純粹な気持ちで願えば確実だろう。
話を聞く限り、大丈夫そうではある。

ただちよつとだけ心配なんだ。

「ねえ、ミキミキ」

「なに？　ってミキミキゆーな」

「その友達。　つと、のびるちゃん？に会いたいんだけど」

「『まひる』ね。　そんなたまに黒くなりそうな名前じゃないよ」
「そうそう、まひるさん。　病室どこ？」

そこまで言うと突然顔を曇らせて考え込むミキミキ。

「……………うーん」

「どうしたの？」

「いや、もしコレで詐欺だったらどうしてやろうかと思って」

びっくりした。

いや、なんていうかもうびっくりした。

「ひどっ！　信じてもらえてないってことですかい！？」

「じゃあちよっと想像してみてよ。　自分の友達が不治の病に陥りました」

ふむ、さくら……………いや、音夢で想像してみよう。

いや、病弱（笑）娘っていったら音夢だし。

「日に日にやせ細っていき、話すのも辛そうです」

ふむふむ。　まんま付属3年時、純一と恋仲になるかならないかの頃だな。

あの時はもう大変だった……………。

「そんな友達が助かる方法があると、魔法使いを名乗る子供が言いました」

えーっと……………さくら、じゃなくて杉並を小さくした子供でイメー

ジ。

うわ、想像するとちよつと嫌だ。

「『御伽噺は本当だった！ だから桜に願ってみなよ！！』」

そしてかなりうさんくさい。

杉並的な意味で。

「うっわ、うさんくせー」

「でしょ？」

「…………でも。それでも僕は嘘をついてるわけじゃないから。信じてほしいよ」

うん、信じてほしい。

いくら嘘っぽいと言われてもこれだけは。

なんたって、ほんの少ししか経ってなくても、僕らは、

「知り合い、っていうか。…………ともだち、だし」

照れくさくなってそっぽを向く。

それを聞いたミキミキはきよとした後、すぐに笑い出した。
むう、遺憾である。

余は実に遺憾であるぞ。

「友達かぁ。ともだち、ね……………ふふ」

「……………何、その笑いは」

「恥ずかしがって可愛いなーって」

「恥ずかしがってなんかないやい！！」

「はいはい。　そうだねそうだね」

くそう。

いつか見返してやる。

そんな風に軽く流されていたから、次の言葉は僕に衝撃を与えた。

「……………うん、信じるよ。　まひるの病室はこっち」

驚きで息が止まる。

すう、と息を吸いなおしてミキさんに僕は聞いた。

「……………自分で言うのもなんだけど、かなり怪しいと思うよ、僕」
「でもミキは信じるって決めたの。　『ともだち』なんでしょ？」

そう真っ直ぐな目で言うミキさん。

ともだち。

……………たった5分前に知り合っただけ。
でも僕らは友達だった。

……………嬉しい。

そう言ってくれたことが、とても、とても嬉しい。

「……………にはは、さんきゅーミキミキ」
「どういたしまして。　それとミキミキゅーな」

僕の笑顔の返答は、この5分ですっかり定着した切り返しだった。

—○—

「あれ、ミキちゃん？」

「やつほー、まひる、また来たよー」

「……………」

あれから数分。

僕らは一つの病室の中にいた。

ベッドの主がミキさんに声をかける。

少しくせっ毛のある柔らかそうな髪。

大きくてくりくりした澄んだ瞳。

表情がころころかわり、ほんわかした雰囲気を持っていた。

そして頭には白くて大きなリボン。

明るい無邪気な人。

それがベッドの主の第一印象だった。

「「へーよーぶらざー！」」

こぶしとこぶしをぶつけ合い、同じ台詞を言う二人。

その笑顔はすごく楽しそうだ。

思わずこっちも優しい気持ちになれそうなぐらいに。

「そうそうミキちゃん、その子は誰？」

「あ、この子はね……………えっと、その……………」

ちゃんとその辺考えておいってくださいよ。

「魔法使いなの!!」

おい。

待てよ。

いや。

い や い や い や い や い や い や い や い や
い や い や い や い や い や い や い や い や
い や い や い や い や い や い や い や い や

。。

もうちよつとこう、捻るとか、誤魔化すとか、そんなんじや色々言われるに――

「へえー、そうなんだ。すごいねえ」

[illegible]

ええええ！！！？！！？

それでいいんだ！？

そんなんでいいんだこの娘！！？

すかさずミキさんにアイコンタクト。

なにこの娘天然さん？

天然産。

天然産かー……………。

びっくりだよ。

それよりなにより頭がフリーズしかかってる僕を助けてへるぷみー。
そう心の中で叫ぶ僕を無視して話は進む。

「名前は春の日って書いて春日^{しゅんか}。 ハルって呼んでほしいんだって。
こんななりでも男の子だよ」

「うん、わかったよミキちゃん。 ……………ハルくん？ 私は小^た鳥遊^{かなし}まひる。 小鳥が遊ぶって書いてたかなしに、平仮名でまひる。
わかるかな？」

「……………あ、だいじょぶです、はい。 よろしくお願いします、まひるさん」

「よろしくね、ハルくん」

よろしく、と笑顔を向けるとそれに合わせてにっこりと笑顔を返された。

互いにぺこり、とお辞儀する。
ぺこりないと。

いや、何でもありませんです。

「でもびっくり。ミキちゃんが男の子、しかも魔法使いさんを連れてくるなんて」

「おいまひる〜？ さっき言ったミキも悪かったけど少しは人を疑うことを覚えようね〜？」

「え！ 嘘だったの！？」

「いや、本当だけど」

「なーんだ、それなら安心だよ」

「……………なにが？」

「そういえばミキちゃん。なんで魔法使いの男の子なんて連れてきたの？」

「それはね、」

「まひるっちの病気を治すためです。あ、まひるっちっていうのは愛称ですよ」

ミキミキの言葉を遮って話をする。

面白くない顔をするミキミキが怖いが、話を進めることにした。

「ええと、どういう意味？」

「枯れない桜の魔法で。小鳥遊まひるさんの病気を。治療します」

「……………」

ぽかーんと口をあけるまひるっち。

そりゃそうなるわ、おとぎばなし御伽噺で治療なんて言われたら。

僕だって魔法使いじゃなかったら『何言ってんだこいつ』ってなるっての。

「……………」

「「す？」」

「すごいよミキちゃん！ 例えるならみんなでくつろぎ始めた夜7時。 ゴールデンタイムのもんたさんのクイズ番組で、出てきた問題をお茶を飲みながら10問連続正解するぐらいすごいよ!!」

それは確かに凄い。 でも凄く微妙だ。

そして彼女は呆れてたのではなく、純粹に驚いていただけだった。

「でも……………本当の本当に魔法使い？」

「そうだよ……………っと、じゃあ一回使ってみようか」

手をグーパーグーパーと握り、開く。

「創造／10kcalキロカロリー|| 饅頭包装紙付き5kcalキロカロリー×1」

「はい、出来ましたー、と」

「……………凄い」

「さっきはわかりづらかったけど、今度のはわかりやすいね」

「……………魔法かぁ。 本当にあったんだぁ……………」

「で、今のトリックは？とか言わないところが最高です、まひるっち」

これだけ純粹なのは桜に願う人にとってはありがたいことなんだけれど、それでも大丈夫なのだろうかこの子は。

そのうち詐欺か宗教に引かかって大変なことになりそうだ。

そんなことはミキミキがさせないんだろうけど。

……………それはとりあえず置いて、っと。

「んじゃ、ミキミキ説明よろしく」

「ミキが!？　なんで!？」

「……………言うのかったりいから」

ミキミキに説明を任せ（放り投げ、とも言う）、まひるっちについて考察してみる。

—————まひるさんとミキさんが願えば桜は願いを叶えるだろう。

あの純粹さと友達を思う気持ちがあれば。

なんと言っても、ミキさんと話しているときのまひるさんは生き生きして見えて、その逆もまた同じようだったし。

だから二人で願えば、きっとなんとかなってしまうだろう。

たとえば、それが純粹な願いから数mmはみ出しているても、桜は。

きつと奇跡を起こしてくれるに違いない。

そのための手助けを、僕は今から始めるんだ。

「—————って、わけ」

「なるほど。　ミキちゃんはそういうの信じないって思ってたからちょっとびっくりだよ」

「私は信じてないよ。　ハルを信じただけ」

「そうなんだ。　ハルくんを信じた、かぁ……………」

「あ、お話終わりました？」

声をかけると、向こうを向いて話していたミキミキはこちらに向き直りグツとサムズアップする。

僕は頷いて、まひるさんの肩に手をかける。

真面目にいかないとコレは結構不味い難易度の魔法だからちゃんと指定して、

「対象…小鳥遊まひる」

時間も設定して、

「継続…次の夜が更けるまで」

どんな風にするかも確認して、

「効果…身体能力の向上、並びに病の悪化、発作防止」

合計カロリーを出す、と。

「合計消費…1800kcal」
キロカロリー

……………げ。

目の前がくらくらする。

「大丈夫、ハル？」

「……………りない」

「え、なに？　なんて言ったの？」

声がちゃんと出ない。

ああ、もう。

コレはまずいぐらいに、

「おなかへった……………カロリー足りない……………」

「……………ああ、そうなんだ。カ

ロリー使うんだね、ハルの魔法って」

「い、いえす……………」

締まらない終わり方で、手助けは終わった。

桜に願うのは今夜。

奇跡を、起こしにしよう。

—○—

一度僕は家に戻り、晩御飯を食べてから外出した。

まひるっちのほうは『今日の夜だけ』といって許可を得たらしい。
とりあえず桜公園で合流し、そのまま枯れない桜へと案内する。

その道程、ねえ、とミキミキが声をかけてきた。

「どうしたの？ なにかあった？」

“薫にも縋る”とはいえうまくいきすぎじゃないかなって。 夢

じゃないよね？」

「頬でも抓ってみれば？　痛かったら夢じゃないし」
「なるほど、確かに」

僕の提案に頷いてまひるっちの頬を抓るミキミキ。
うわ、よく伸びるなあ、まひるっちのほっぺは。

「痛い痛い痛い痛い痛いー！！　どうしてミキちゃんはわたしのほっぺを引っ張るのー！」

「うん、夢じゃないみたい」

「……………もう、なんでわたしで試すのかなあ」

「あー、ごめんねまひる。　うりうり」

「わわ、苦しいよ、ミキちゃん」

仲良きことは美しき哉。

そんなことをいう気は無いけれども、この二人は親友なんだと思わせられる光景だった。

いいねえ、こういうのは。

そんな和やかな光景を見つつも桜へたどり着く。

「わあ……………」

「すごい……………」

『今』の僕の出発地点。

そして『昔』の僕が死んだ場所。

相も変わらず咲き誇る桜が、そこにはあった。

「さあて、と。　じゃあそろそろ始めますか」

その空間に囚われた二人を連れ戻すように僕は声をかける。

「わたしはどうすればいいの？」

「桜に手を当てて願うだけ。　自分で思ったことを口にすれば良いんだ」

そこまでのいうと横からミキミキが悪戯な笑顔を浮かべながらまひる
つちに言った。

「私も手伝っちゃおうかな。　まひる一人じゃ心配だし」

「あ、ミキちゃんひどーい」

軽口を叩きあいながらも桜に近づいていく二人。
その背中を見つめながら思う。

……………これは、今日して来たことは、僕のエゴだ。

目の前の人が悲しむのが嫌だったから、魔法を使って助ける。

他にもたくさん助かる人がいるかもしれないのに、それを無視して
目の前の、一つの命を助けようとしている。

全て救うなんて不可能だ。

解っている。

だから見捨てている。

生きたい。

そう何度も考える人がいるだろう。

死にたくなんてない。

そう思い続ける人が沢山いるだろう。

でもそれら全てを僕は助けられないから、せめて目の前の人ぐらい。その命が未来へ向かう手助けぐらいしてもいいだろうって、そう思った。

やっぱり、それもエゴなんだけど。

「お願いします」

「聞いてください」

二人が、願い始めた。

「わたしが、」

「まひるが、」

月光を浴びた桜が、少し震えた気がした。

ほのかに光を帯びているような気までする。
ざわざわと、風もないのに桜が戦慄わなないた。

……………。

「健康になりますように」

そうして、桜は。

少女二人の真摯な願いを受け。

『魔法』という、奇跡を起こす。

「へー」

「よー」

「「ぶらざー」」

二人がたがいに顔を合わせてほほ笑み、そのこぶしが合わさったとき、桜は震え。

ミキさんとまひるさん、二人に光の胞子を散らした。

そしてその光が収まる一瞬。

桜の花びらの半分が、黒く染まって見えた。

「な、え————っ!？」

そう見えたのはその瞬間だけ。
でも確かに、桜が——————。

そう、思考の海に沈もうとしていた僕をミキさんの一言が引き揚げた。

「……………これで、終わり？」

一瞬何のことを指しているのかわからなかったけれど、すぐに魔法のことだと気付く。

焦りを隠しつつもねぎらいの言葉をかけた。

「う、うん、終わり。二人ともお疲れ様」

「これで？ あっさりなんだね、結構」

「でも、ハルくん。わたし、何か変わった感じもしないし……………」

「それは明日の朝に体感することになります。安心してくださいな」

まひるうちに返答しつつポケットに突っ込んでいた手のひらで道具を創造。

「変換／1000kcalキロカロリー＝快眠香り袋―リラックス編―2年間×2」

「はい、これ。気持ち落ち着くよ」

「あ、匂い袋」

「また懐かしいのをハルは持ってるんだね」

二人とも軽く匂いを嗅いで、うっとりした目で袋を見ている。

「それ、あげます。記念ってことで」

「ありがとう、ハルくん」

「大盤振る舞いだね、ハル」

「そりあもちろん。ま、なんとたってお別れだから」

今宵、一夜限りの奇跡は此処に成った。

なら僕は家に帰ってゆっくり眠ろう。

正直、階段から落ちたりカロリー不足でぶっ倒れそうになったり桜の嫌な幻覚的なもの見ちゃったりしたから早く眠りたい。

「……………」

「……………」

「魔法使いも楽しいから、さようならってこと。おやすみな

さいー」

なぜか沈黙を保つ二人に手を振り、すたこらと家路を目指して歩き出した。

寒いし。

その途中、突然背後から嗚咽交じりの声が聞こえてくる。

「ハルくんのこと、忘れないから！魔法使って誰にも言わないからね！」

「私っ、ハルの友達になれて、っ、良かったよ！」

軽く手を上げて走り出す。

それにしても泣くなんて、そんなに病気がなんともかなるのが嬉しいのか。

それなら手助けして良かった、良かった。

そうだ。

明日、お祝いもこめて見舞いの品を持っていこう。

ミキミキと時間合わせるなら、土曜日だし昼過ぎかな？

そういえばさっきの二人の言葉、なんだか告別の言葉にしか聞こえないけれど、まあいいか。

今日は帰ったらお風呂はいつてゆっくり寝よう。

明日か明後日には、さくらに桜のことを聞かなきゃならないし。

由姫さんの病気のこともあるし。

これから忙しくなるかな。

………ちなみに、先の判断（告別のニュアンス）があながち間違いではなかったことが、次の日のお見舞いに行って判明したことを先に言っておこう。

まひるっちは泣き出すわ、ミキミキは怒るわで大変だった。

………まったくもって。

僕とミキミキとまひるっちと桜の木。 (後書き)

難産でした。

まひる生存フラグ+まひる&ミキ友人フラグ完遂。

夜中テンションじゃなきゃ書けないような文が沢山。
こんな駄文でいいのだろうか。

朝倉由姫。
おかあさん。

やっぱり、目の前で女の子に泣かれるぐらいなら助けるしかないでしょう。

次回「僕と由姫さんと治療とメリークリスマス。」

ここまで読んでくださり、まことにありがとうございました。

次回更新は未定です。

「……………なら書くなよ」

僕と由姫さんと治療とメリークリスマス。(前書き)

今回も別キャラ注意とだけ言っておきます。

G O D E A T E R 楽しい♪

魔法は独自解釈を含みます。

ああ、次回でやっとタグが一つ追加できる……………。

僕と由姫さんと治療とメリークリスマス。

今まで言っていなかった僕の魔法の欠点を上げてみよう。

- ・カロリーを使用する（つまりお腹が減る）。
- ・カロリーは僕の体の中にある分しか使用できない（他人からの搾取NO!!）。
- ・同じタイミングで二つはかけられない（どんなものも一つずつかけなければならない）。
- ・手、または体の一部が触れている場所でなければならない（遠隔は不可能）。

そして次が一番重要。

・カロリーが足りない場合は、睡眠で補う（1時間50キロcalの計算）。

つまり、僕の体に200kcalしかないとして、500kcal使用しようとする、僕は魔法を使ってから数分で、6時間程度の睡眠にその場で入ってしまう。

ガソリンカロリーが無くなったエンジンまほうは、その過ぎた分の代償だけ僕の時間をガソリンに換算するんだ。

まあ、睡眠状態の間はカロリーをまったく消費しないからありがたいんだけど。

さて、何でこんなことを説明しているのかというと、

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

今の僕は、ちょっとばかりウラシマ気分な状態だからです。

第九話 「僕と由姫さんと治療とメリークリスマス。」

「…………あー、えー、うー、いー、おー」

「くっらいなく。もっとほら、スマイルスマイル♪」
「や、そうしたいのは山々んだけどさあ」

そこで僕はそこにいる面々を見渡した。

僕の目の前に広がっているのは、改装された芳乃家の一階。

座敷とリビングのふすまを開けた状態でテーブルを繋げ、クロスを敷き、たくさんの料理が置けるようにした、いわゆるパーティ用テーブル。

そこに、朝倉家一同、さくら、ミキさん、小鳥遊家一同が勢ぞろいしている。

「……………なに、このカオスな状況」

「それはね、由姫ちゃんとまひるちゃんの快復祝いと、クリスマスパーティの同時開催をしてるからだよ♪」

そんなところにいきなり叩き込まれてみなさい。

意味判らなさと理解力が追いつかないせいでテンションなんて上がらないから。

「すみません、さくらさん」

「ありがとうございます、芳乃学園長」

「んもー、二人とも主賓なんだから申し訳なさそうな顔しない！
ほら、笑って笑って」

ぺこぺこ、と頭を下げてお礼を言う二人とスマイルを薦める一人。
そんな三人を放って置き、ふらふらと縁側まで出る僕。

……………おおう、寒い。

いくら桜が咲いてるとはいえまだ12月。

寒いものは寒いのだ。

「雪の降る中に咲く桜吹雪、ね。……………だいぶ戻ってきてはい
るけど完全じゃないか」

庭に広がる景色にまだ少し違和感を覚えている僕自身を自嘲する。

記憶。

僕の記憶は大分取り戻した。

音夢、純一、ことり、さくら以外にも、

わんここと天枷美春、水越眞子、萌先輩の鍋コンビに男装少女の工
藤叶、宇宙人の紫和泉子、騒がしい漫画家彩珠ななこに神出鬼没の
オカルトマニア、杉並。
人形遣いの月城アリス、巫女さんこと胡ノ宮環。
深窓の令嬢、鷺澤美咲、みっくんこと佐伯加奈子に、ともちゃんこ
と森川知子。

ほら、ぱっと思い出すだけでもこれだけの人数と関わりを持っている。
る。

枯れない桜のこと、美春の父親とH Mシリーズを開発したこと、毎日のように純一や音夢、ことりと遊んでいたこと。

そして、

……………そして？

あれ。

あれれれれれ？

「どうしたの、はる？　こんなところでご飯も食べずに」

「あ、さくら」

心が疑問で埋め尽くされたそのとき、いいタイミングでさくらがやってきた。

「……………僕らが桜を枯らしたのって付属3年のクリパの後だったよな？」

「え？　ああ、うん。　そうだね、付属3年の時だったよ」

ふむふむ。

「じゃあ、僕が死んだのもそのときだよな？」

「え……………何言ってるの、はる。それから2年間、意識不明で寝たきりになったこと覚えてないの？」

……………マジですか。

「……………生憎、思い出してない」

「……………そっか」

さくらが言うには、僕は桜を枯らせたあと、2年間ほど眠り続けていたらしい。

3年目の春、普通になった桜が咲いたと同時に目覚めたとのこと。

そして、その冬に僕は、再び咲いた枯れない桜を枯らせて……………

「……………死んだ、か」

……………とうとう、死んだらしい。

「なるほど。さんきゅ、さくら」

「気にしないで。……………ほら、ご飯一緒に食べよ♪」

「ん、よーかい」

静かな縁側から、にぎやかな輪の中に戻って思う。

死ぬ。

死ぬ、か。

まひるさんも、あの日に僕がミキさんに助けられてなかったら、桜には願わず、そのまま死んでいたかもしれない。

由姫さんも同じく、僕がいなかったら病気で死んじゃってたかもしれないんだよな。

5日前に完治して、今は元気になっている由姫さんが……………。

5日前、か……………。

—○—

さて。

日本晴れしてお日柄も良いので。

12月20日日本日、由姫さんの治療を行いたいと思います。

準備も整ったし。

「というわけで、さくら。協力しろ」

「何が『というわけ』なのかまったくわからないけどおっけー♪」

さくら（魔法使い）がなかまになった！

「じゅんいちー？　ちよっとこいこらー！」

「かったるいな……………」

じゅんいち（かったるい魔法使い）がなかまになった！

「音姫ちゃんもちよっと」

「……………なに？」

おとめ（正義の魔法使い）がなかまになった！

「偏ったパーティーメンバーだな。まったく、攻撃役が一人もいない」

「ねえはる、ボクたちが集められた理由、まだ何も教えられてないんだけど」

「私もだ」

「……………私も」

僕の軽口にまったく反応を返してくれない仲間達。
パーティーメンバー

午後の暖かい光が射す朝倉家のリビングで、僕はそんな彼らに宣言した（ちなみに由夢ちゃんと義之は出かけていた）。

復唱お願いします。

「本日！」

「ほんじつ？」

「朝倉家の！」

「朝倉家の？」

「大黒柱とでもいうべき、由姫さんの！」

「だいこくばしらとでもいうべき、おかあさんの？」

「っておい、私は違うのか!？」

「お兄ちゃん少し黙ってて」「おじいちゃんうるさい」

「……………すみません」

純一、哀れなり。

それをスルーしつつ再び叫ぶ僕。

「由姫さんの！」

「由姫ちゃんの？」「……………おかあさんの？」

音姫ちゃん、さくら。

復唱ありがとう。

「病気の完全治療を行いたいと思いますッ!!!!」

「完全治りよ——————ええええええええ!!!!?」

Yesメンになりかけていたさくらが驚愕して飛び上がった。
おおう、これは…………。

「ナイスリアクション、さくら♪」

「いえーい…………じゃなくて！ 本当に言ってるの!？」

「ん、もち！」

サムズアップ。

付け合せには満面の笑みを忘れずに。

「おいおい…………最近怪しい動きをしてると思えばまさかそんなこととは……………」

「なんだよ、ただ饅頭出してメシ食ってただけじゃんか」

「それが一日八回、四日間続いたら誰だっておかしく感じるわ!!」

純一に言われたのでこの四日間の僕のスケジュールを思い出してみる。

朝八時、起床。

朝九時、朝ごはん食べて一口饅頭（400kcal）生成。

朝十時、おにぎり二つ食べて一口饅頭（200kcal）生成。

朝十一時、おにぎり以下略。

昼十二時、昼ごはん食べて一口饅頭（400kcal）生成。

昼三時、チョコバナナ食べて一口饅頭（500kcal）生成。

夕方五時、おにぎり以下略。

夜六時、おにぎり以下略。

夜七時、晩ごはん食べて一口饅頭（400kcal）生成。

夜九時、疲れ果てて就寝。

ほら、どこもおかしくなんて――――すみません、凄く……
……おかしいです。

ちなみに貯まった饅頭^{カロリー}は2500×4で計10000kcalです。

おや、音姫ちゃんが詰め寄ってきた。

「……ねえ、おかあさんは」

「うん、おかあさんは？」

「たすかるの？」

その不安と期待に揺れた瞳をきちんと見返して、僕ははっきりと答えた。

「もちろん。 僕の命を賭けたっていい」

不敵に笑ってみたりする。

まあ、失敗なんてする気はない。

その為に、この数日は準備してきたんだから。

「あの………ありがとう」

「ストップ！」

「……………え？」

なぜ、と不思議そうな顔をする音姫ちゃん。
その頭にぽん、と手を乗せて僕は言う。

「全部終わった後にその言葉を言ってよ。　そのほうが僕もやり
がいがあるしね」

OK?と確認すると音姫ちゃんは、

「……うん、わかった」

こくり、と可愛らしく頷いてくれた。
そのままぽんぽんふわふわと頭を撫でていると、後ろから僕に聞こえるように話している内緒話が聞こえる。

「うわ、気障ったらしー」

「気障っぽいな、あれは」

「はいそこ、黙りなさい」

指差し注意。　ああいうのはそのままにしておくとか大変なことになります。

っていうか、いつまでたっても始まらないじゃないか、これじゃ。
呼んだ理由だって説明できてないし。

「昔からたまにそういうところあったよね」

「ああ、ことりの時とか多かったな。さくら絡みも多かったが」

「『お前の友達は、目の前にいるだろ』」

「『だから頼れよ。寄りかかれよ。一人で抱え込むんじゃないよ』」

「ひゅー、かっこいいー♪」

「よ、この気障男」

「あーもうるさい！ そのころの話を持ち出すな！」

まだきちんと戻りきってないんだから！なんて口には出さない。
場の興奮が少し下がったのを感じてから、さて、と仕切り直して僕は皆に言う。

「そういうわけで、万が一、治療後に何かがあったときのためにさくら、純一、音姫ちゃんを呼んだんだ。治療の失敗は絶対にならないけど、その後に何か起こるかもしれない。……………だから、皆」

思いっきり頭を下げる。

「よろしく、お願いします」

そのお願いへの返答は、頭を軽く叩いた三つの手で十分だった。

「と、ゆーわけで治療にやってきましたー」

「と、いうわけらしい」

「と、いうわけなんだってさ、由姫ちゃん♪」

「……………だって、おかあさん」

「予想以上に早く来ましたね……………」

文字で表現したら（汗）とでも出そうな感じに面食らっている由姫さん。

それもそうだろう。

『治療する』と言った少年は挨拶が終わると同時に一心不乱に一口饅頭を食べ続け、義父とお隣の魔法使いはそれを真面目な顔で眺めている。

娘はそんな少年にお茶を渡しているし。

「（いつからここは、フードファイターの戦場になったのかしら？）」

とか考えてそうだ。

そんな考え事とお茶で饅頭地獄に飛びそうな意識を繋ぎ止めた僕は、両手を上げてガッツポーズをとる。

それに拍手をくれる音姫ちゃん、さくら、純一、よくわかってない由姫さん。

「さて、お遊びはこれぐらいにしますか」

ベッド横の椅子に座り、由姫さんに説明する。

とはいっても、説明なんてものじゃなく、ただそこに座ってじっとしててください。後は僕がやりますので、って言うだけなんだけれど。

「じゃあ、よろしくお願いします」

「はい。じゃあ、手を出して貰ってもいいですか？」

無言で手を差し出す由姫さん。

少し震えているのはまあ、仕方ないだろう。

そのあたかな手を僕は握り、眼を閉じる。

部屋の中には緊張感が満ち、目の前の人の息遣いしか感じられない。

数日だけど準備はした。

間違いなくこれは成功する。

そう、自分に言い聞かせた。

息を吸い、吐き、緊張する身体をほぐす。

———さあ、僕にしかできないことをしよう。

「魔法治療を始めます」

目標指定。

「目標…完全治療」

対象指定。

「対象…朝倉由姫」

効果指定。

「効果…魔法治療／永続」

結果。

「結果…治療、完全完了」

その言葉を言い終わるより少し早く、ぽう、と僕の両手から由姫さんへ薄い光の膜が伝わる。

それは桜色のように、空色のように、虹色のように、何色でもない。

そんな光が由姫さんを包み、

———そして僕の言葉が終わると同時に、身体から病魔を、完全に消し去った。

「これで、終わりですね」

そう言って、手を離す。

信じられないように身体の調子を確かめる由姫さんに、僕は満面の笑みで、語りかけようとした。

「あとは病院側に見てもらおうとして……………おめでとうございます、由姫さ———」

「カロリー算出…16000kcal / 不足分6000kcal
115days」

「—————」

やっぱ、ちょっとたりなかったか。

しせいがたもてない。

まえのめりにたおれこむ。

だれかのこえがとおくにきこえる。

でもよかった。

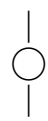
うまくいった。

これで、またひとつ。

ぼくがここににいるいまが。

みつつめ。

———おやすみ。



S i d e .. S a k u r a

見ているこちらが楽しくなるような笑みで、はるは由姫ちゃんを祝った。

………正確には、祝おうとした。

「後は病院側に見てもらおうとして……おめでとうございます、由姫さ——」

ぱたん、とまるでブレーカーが落ちたように、はるは頭からベッドに倒れこむ。

その姿は、桜を枯らした日のはるにあまりにも似ていて、ボクは頭の中が大パニックになった。

「……………はる？　ねえ、はる！？　そんなふざけてないで、はるってば、はる！！　起きて、起きて、起きて起きてよ！！　はる！！！！」

身体を揺さぶっても目覚めない。

耳元で叫んでも眉ひとつしかめない。

血の気が、ざあっと引いていく。

「あ、あ……………」

思わず叫びそうになったところで、はるが言っていたことを思い出した。

『さくら、僕に何かあっても取り乱すなよ。　すぐに、とはいかないけど起きるからさ』

起きる、っていう言い方。

はるはこの状態になるかもしれないってことを予測していたの？

「さくら」

「…………大丈夫。　大丈夫だよ、お兄ちゃん。　もう落ち着いたから」

焦らない。

先走らない。

落ち着いて、物事を観察する。

はるはボクにいつもそう言っていた。

…………はるは意識がない、というよりは眠っている状態。
ならボクは昔みたいにな、はるが起きるのを待てばいいんだ。

「…………お兄ちゃん、はるをボクの家までおぶっていつてくれる？」

「…………もちろん。　お安い御用だ」

お兄ちゃんがはるを背中に乗せる。

ボクはドアを開け、お兄ちゃんが外に出たところで振り返り、呆然

となっている音姫ちゃんと由姫ちゃんに手を振った。
なるべく笑顔を心がけて……っと。

「ちゃんと病院の検査を受けてね、由姫ちゃん。 そうしたら早く
退院して、ボクたちに元気な姿を見せること。 それじゃ、シーユ
ー♪」

扉を閉める。

お兄ちゃんの背中に負ぶさっているはるの顔は、やけに満足そうな
寝顔だ。

その顔を見て、安心と可笑しさで少し笑いながら、ボクたちは病院
を後にした。

結局はるが起きたのは、それから五日後のことになる。
まったく、心配ばかりかけさせるんだから、はるは。

そんな無茶をするはるが好きだから、別にいいんだけど。

S i d e e n d .



新しい朝が来た。
希望の朝だ。

「————ラジオ体操かよ」

そんな眩きとともに僕は布団から身体を起こす。

時間は10時。

昨日寝たのが遅かったのか、かなり寝坊している。

「8時には起きてたのになあ……。何でだろ？」

昨日の記憶を思い返してみる。

確か、朝から病院にいつて、由姫さんの病気の治療を「はる？」して……。

入り口を見ると、驚いた顔をしたさくらがいた。

「あ、おはよう、さくら」

「……………ばか」

馬鹿にされた。

なぜだ。

最後になにか……………したな。

そっか、僕、5日間眠ったままだったのか。
そりゃ怒られるわ。

「はるのばか！ すかぼんたん！ トーヘンボク！ 鈍感！」
「はい、すみません」

最後の二つに関しては色々疑問が沸くがとりあえずおとなしく怒られておこう。

「いっつもそう！ 何も言わないで無茶ばかりして！ ボクたちがそれで何度心配させられたことか！！」

「ほんとにすみません」

いや、それに関しては本当に心から詫びよう。
申し訳ありませんでした。

「……ホントに、心配したんだよ」

「————や、まじで悪かった。だからちよっと先にいいか？」

「なに？ 大抵のことは許せるから言ってみて」

それじゃ遠慮なく言わせてもらおう。
正直もう限界なんだ。

「ご飯……………食わせてくれ……………」

「あー、5日間ひじょーに損した気分なんだけど」
「事実損してるから仕方ないんじゃない？」

賑やかな食事会の中、僕の呟きに訂正を入れるさくら。

……まあ確かにそうなんだけど。

「でも、まあ————」

音姫ちゃんと由夢ちゃんに挟まれて笑う由姫さんを見た。
三人皆がとても楽しそうで、嬉しそうで幸せそうだ。

その向こうではまひるさんとミキさんがお互いにふざけあいながら、
それでもやっぱり楽しそうに過ごしている。

「損でもよかったかなって。今の皆を見てると思うんだ、僕」
「うん。ボクもそう思うよ」

そう僕に同意した、隣に座る幼馴染を盗み見る。

その瞳は、楽しそうに、そして愛おしそうにこの光景を眺めていた。

……………あ、そういえば、忘れていた。

「さくら」

「なに、はる？」

僕はグラスを持ち上げる。

それを見て何をしたいかわかったようで、さくらも同じようにグラスを持ち上げた。

「「メリークリスマス♪」」

かちん、と鳴ったグラスに、皆の笑い声が響いていた。

僕と由姫さんと治療とメリークリスマス。(後書き)

厨二病がッ!! 叫んでいるッ!!

一部表現が厨二ってる気がしますすが気にしないでください。

サンタクロース。

僕はサンタクロースを信じている。

それはなぜかって？

それはもちろん知り合いに――――。

次回「僕とさくらとサンタクロースと過去話。」

誤字脱字、または指摘、気になることなどございましたら感想まで。
普通の感想も募集しています。

ここまで読んでくださり、まことにありがとうございました。

次回更新は……一週間後にはできると良いなあ……………。

僕とサンタクロースと少々の昔話と涙。(前書き)

長くなったので色々(題名とか)修正して投稿。

お帰りアイシア!!

そして最終投稿を1月23日と勘違いしていた自分……。

僕とサンタクロースと少々の昔話と涙。

僕は病気で死んだ。

桜の木を枯らした反動と、酷使しすぎた身体の限界が同時に襲い掛かったことによって。

枯れない桜を再び枯らした、そのときの会話を臆げながらも思い出している。

そこにいた、誰かを励ます言葉。

『だから……こふっ……だから■■■■のせいなんかじゃないって』

桜を枯らせて、

『ほら、すまいるすまいる。■■■■が笑えばきっと誰かがハッピーになるんだから』

桜の袂で、

『あ、そうだ。……………これをあげよう。アイ■■■■にぴったりなりボンの贈り物』

あの日、

『んじゃさくら、後は頼んだ。　ことりもありがと。　アイシ■、
元気でね』

“君のせいじゃない” って伝えたことを、僕は記憶の中から見つけ出した。

もし、もしも、また彼女に出会えたのなら、その時僕はなんて言おうか、なんて。

……………そんなことを考えていた時期が僕にもありました。
なんて、ちよつと言ってみたりする。

そういえば、彼女も魔法使いだった。
木彫りのおもちやを得意げに見せてきたっけ。

まあ本当は、あの娘は魔法使いじゃなくて――――

……………それはぽかぽかとした陽気になるであろう、快晴の日、1
2月28日の朝一番のことだった。

ここ数日（とは言ってもまだ一月たっていないのだけれど）、色々なことを体験しすぎて目が回っていた僕は、それでもこの環境に慣れていった。

最初は空気に慣れ、次に人に慣れ、そして最後は記憶との相違に慣

れた。

明日の朝を怖がらず、幼馴染は二人しかおらず、病院の窓から空を見上げることのないことに。

ノスタルジックな気分になりつつも、故郷はここであると自分自身を嘲笑する。

「はる？」

「ん？」

現実に引き戻されると、そこには荷物を持ったさくらがいた。

玄関前で今年の仕事納めに出るさくら。

芳乃邸の大掃除をしつつもそれを新婚さんよろしく見送る僕。

最近の朝によく見る光景である。

玄関口で鞆を持ち、欠伸をしたところで、さくらはふと思い出したような顔をした。

「そういえば、そろそろ帰ってくるころかな？」

「……………へ？ 誰が？」

僕がさくらに誰のことか聞き返す前に、目の前のドア————つまり、玄関が————開く。

「た、ただいまあ……………」

「あ、おつかえり〜！ 今までお仕事お疲れ様♪」

「うん、ありがとさくら。　うう、疲れたあ……………」

さくらに声をかけられ、それに応答しつつもへなへなと精魂尽き果てたように玄関でぐったりとする少女。

――アッシュブロンドの髪。

――ルビー色をした眼。

――赤い帽子に赤い服。

――ミニスカートに赤い長靴。

――そして、桜の刺繍がされた緑色の大きなリボン。

――袋を担げばあら不思議。

――聖夜に夢を届ける、子供たちの人気者。

「……………アイシア？」

そう、その娘は――――サンタクロースだった。

第十話 「僕とサンタクロースと少々の昔話と涙。」

「う？」

アイシア（？） 僕の声にがばっ！と顔を上げる。

目をぱちくりと瞬かせ、僕のことを数秒見た。

……と、ぐりんとさくらのほうを向いて、それから僕のほうを見る。
目をごしごし。

細眼でジーっとみる。

目をぱちぱち。

そして彼女は、さくらに詰め寄った。

「さくらさくらさくら！ 誰！？ この春日にそっくりの子、一体
誰！？」

「本物のほる」

玄関口から固まっている少女をリビングに運び（自分に魔法を使って運びました。この身体で人を運ぶのがどれだけキツイ事か……）、椅子に座らせる。

お茶の準備をし始めたところで少女は再起動した。

「……………なんで！？ どうして！？ 一体何が起こったのさくら！
！」

「いや、さくらは出かけてもういないし。 ってーか、慌てすぎだよ……。ほら、お茶でも飲んで落ち着いて、ね？」

「あ、ありがとー。 ……んー、おいしー♪」

僕が創造した和菓子を食べながらお茶を飲む。

いやなに、美少女が和む姿は目の保養になるねえ……………。

若干現実逃避気味なのが気にかかるが。
お互いにお茶を啜り、ふう、と一息つく。

「……………って、ちっがーう！！」

「お、現実逃避をやめた」

「なんで先生が、春日がいるの！？」

「A：生き返ったから」

「なんで！？」

「んー……」

なんでだろう。

話し合ってみたけれど、さくらにさえわからないようだった。

「なんでだろーな？」

「わからないんだ!?!」

「奇跡って陳腐な言葉で考えちゃって。面倒だし」
「うわ、その適当さが完璧に本人と物語ってる!」

どうでも良いけどさっきからエクスクラメーションとクエッション
マークばっかつかってません?
そもそも僕は聞きたいことがあるんだ。

「で、君はアイシアでいいんだよね?」
「? うん、あたしはアイシアだけど」
「そっかー、アイシアかー」

うんうん、と頷いて目を細める。
また、久しぶりに懐かしい顔と出会ったなあ。

「そんな顔してどうしたの?」
「ん、少し変わったかなって。昔の雰囲気から、焦りが消えたみたいだ」

「えー、いや、その、そんなー、照れるなあ……」
「さらにバカっぽくなったようにも見えるけど」
「うえええ!?!」

「ちなみに聞くけど、 $x^2 + 2x + 2$ を微分した答えは?」
「び、びぶん!?! えーと、えーつと……」

相変わらずこの娘との会話は楽しい。
からかう的な意味で。

「そう! $2x + 2$!?!」
「正解。じゃあ積分したら?」
「せきぶん!?!?」

おお、目がグルグルしだした。
まるで困ったときのHM-A05ミハルみたいだ――――

「う、ううう、うううううう………ばかでいいもん!!」

―――な。そしてそれで良いのかアイシア。
ちなみに僕が今出したのは本校3年、しかも学年初めに習うあたりのところだぞ?

「……………ま、いいけどさ」

「つていうか、先生はあたしのことからかいたいただけでしょ?」

「ん、のとり!!」

「うわあ、またすごいドヤ顔を……………」

はてさて、こんな会話をし続けてていいものか。
僕は話の流れを変えようと試みた!

「―――で、アイシア。何でここにいるの?」

「あたしがまず春日に聞きたいんだけど……………」

「さくらに拾われた、以上。さあ、話せ」

「ええええええ、適當すぎてちょっと驚きだよ!」

「Harry! Harry! Harry!」

「あたしだってさくらの家に居候してるだけだもん!」

「え……………居候? お前が、さくらの家に!」

「何でそんな驚いてるのかわかんないけど、そうだよ」

「うっわー、マジか。ホントに人間は変わってくんだな……………」

「けなされてるように感じるのはあたしだけかな？」

いや、だってさくらとアイシアですよ？

ほぼ完全に記憶が戻った今だから言えることですけど、この二人。

昔は、犬 猿 の 仲 といっても過言じゃなかった。

魔法で何もかも解決できると思い込んだアイシア。
魔法じゃ全て解決できないと現実で知ったさくら。

この二人の衝突は毎日のように起こっていた。
そう、毎日のように。

「だって二人とも、病室なのに喧嘩始めるし……………」
「う、それはその、その頃のあたしもさくらも若かったというか…
…」

「若かったねえ…………。そうだな、あれはもう昔なのか」

思いにふける。

あれは僕がすごした、最後の夏的一幕—————。

—○—

「——から——じゃ——！」

「！」

「——で——くらだ——もん！」

「！」

白い、白い病室だった。

そこにあるのは窓から見える外の景色。

ただただ白くて清潔なシーツ。

鍵がかけられた金庫。

手入れがされたギターに、使い込まれたノート。

そしてその部屋の中心にあるベッド。

それに僕は座っていた。

幼馴染の一人に向け、その位置から疑問を発する。

「で、ことり。後ろの二人は何で頭を押さえてるの？」

「あんまりにもうるさかったから怒りました。　こう、げんこつで、
ごん！って」

「うう、ことりちゃんは手加減を覚えるべきなんじゃないかなあ……」

「こればかりは、さくらに同感かも……」

「喧嘩両成敗っす。　反省しなさい」

謝りながら縮こまる二人を見て、ことりと一緒に小声で笑う。

喧嘩していても、ほとんど毎日のように訪ねてくれるのは僕にとってとても嬉しいことだ。

……まあ、毎日のように喧嘩するのだけは勘弁して欲しいんだけど。

「さくら、ほら」

「あ、ありがとほら♪」

ぽいっと苺大福を投げる。

さくらは両手で捌うように受け取り、それを口に運んだ。

「んー、でりしやす♪」

「さくら、最近お前が英語圏の人間か判らなくなるんだけど、そんなに大丈夫なのか？」

「Fine at all (全然平気) . I say a little more decent rather (むしろきちんと
言うほうが少ないかな)」

「……………お前誰だ」

「うわ、それひどい！」

「あははははぐ、ごほっ、ごほっ！」

唐突に咳き込む。

するとそれに反応したように発作が始まった。

痛い。

心臓が、肺が、内臓が、頭が、肌が、手が、足が、身体の全てが痛い。

苦しくて前が見えなくなる。

仰向けにベッドに倒れこんだ感触がした。

まるで自分の身体が自分のものじゃないみたいだ。

「ぜっ……………ぜっ……………ああ、くそ、もう、この、身体は……………っ!!」

「春、平気!?!」「大丈夫、はる!?!」「大丈夫、春日!?!」

ぐっとシーツを掴んで痛みをこらえる。

数秒で体の痛みは治まり、すぐに体は元通りになった。

……………痛みに耐えた疲労以外は。

「ふーっ、ふーっ、ふうう……………。あー、しんどー」

「……………その様子なら大丈夫っすね」

「あー、心配したぁ……………」

「……………よかった」

冷たかった空気が元に戻る感じがして、みんなの心配そうな顔が笑

顔に変わった。

発作について少し思うところがあったけれど、心配をかけたくないが故に顔を上げ、にへらと笑い、いつも通りを演じる。

「……………いよし、それじゃアイシア。今日も教えるからこっちおいで」

「はい。今日もよろしくお願いします、先生」

「はいはい、よろしく。今日はまず、魔法の話から—————」

—○—
こうして、僕の、命が燃え尽きるまでの一日が過ぎてゆく。

昔の思い出。

一幕のことを思い出し、懐かしんでいるとアイシアが僕の目の前で手を振り始めた。

「おーい、春日？ 起きてる？？」

「起きてるよ、失敬な。あの先生って言って後ろをついてきた雛鳥のようなアイシアはどこいったんだか」

ほぼ毎日のように授業してたからなあ、魔法の。

その時だけ『先生』って呼ばれてたわけだけど。

「そ…………っ、それは今関係ないでしょ！」

「ふう、本当にそう思ってるの？」

やれやれ、といった様子で言ってみる。

案の定アイシアはそれに引っかかり、あわてた様子で聞いてきた。

「え？ 今の本当に何か関係があったの！？」

「実は……………」

「じ、実は……………？」

深刻な雰囲気に合わせてぐくり、と息を吞むアイシア。

僕はそこで軽めにこう告げた。

「……………悪い、『特に何もない』なんて僕には言えないや☆」

「……………こら春日 ああああああ！！」

ああ、楽しい。

楽しくて涙が出る。

昔のことを思い出したからか、涙腺が緩んでいるみたいだ。

「あはははは、はは、は……………っ」

「……………春日、泣いてるの？」

「っ、ばかアイシアっ、そんっ、そんなわけっ、ないだろっ！」

過去には戻れない。

時は戻らない。

あの頃には帰れない。

楽しかったあの頃には、もう。

時は過ぎ、周りはすっかり変わってしまった。
みんな年をとり、老けていく。

そんな中、一人残されて。

さくらかも純一もいたけど、やっぱり違ってて。

やっと、ほとんど変わってない人物アイシアに会えて。

「孤独だ」っていう気持ちを必死に隠し包んでいたモノがぶっ壊れて、耐え切れなくなった。

泣いてるのがバレバレでも、せめて泣き顔を見られないように、顔を下に向ける。

涙があふれてとまらない。

ぬぐってもぬぐってもこぼれてくる。

「まったく、春日は仕方ないなあ……………」

アイシアの声が間近で聴こえ、僕は、やわらかく、そして暖かい感触に包まれる。

ふわりと甘い香りが漂い、背中に手がまわされる。

……アイシアが、僕を抱きしめていた。

「『わたしはちゃんと傍にいるよ』」

「……………っ……………っ！」

すう、とアイシアの言葉が、声が心に入ってくる。

「『だから安心していいよ』」

「う、……………っ」

そのぬくもりは、その声は、暖かくて、優しくて、心地よくて。

「『泣き止むまでぐらいなら、この胸を貸してあげよう』」

「うああああああああ！！！」

そして僕は、子供のように泣き疲れて眠るまで泣いた。

僕とサンタクロースと少々の昔話と涙。(後書き)

文才がほしい。

それだけです。

なんかもーどーしよーもない。

文才プリーズ！

さくら。

アイシア。

そして僕。

魔法使いはそろったけれど、何か起こるのかなんていったらそりゃあ…………。

次回「僕とさくらとアイシアと日常生活。」

誤字、脱字、気になることがあれば感想にて。

もちろん普通の感想もお待ちしております。

ここまで読んでくださり、まことにありがとうございます。

僕とさくらとアイシアと日常生活。(前書き)

今回は一週間以内。

でも大分内容がorzな感じに……。

年数はD・C・? (前作より52〜4年?) から風見学園3年時年数の(約20年)を引き、D・C・S・S. を大体2004〜5の時間軸と考えたものです。

……誰か良い情報サイト知らないかなあ?

そして日常なのに分量が少なすぎる件。

僕とさくらとアイシアと日常生活。

2004年、12月25日23..35。

その日、その時に返り咲いた初音島の枯れない桜は完全に枯れ、この世から魔法使いが一人消えた。

それを知っているのは、ほんの数人のみ。

それから約40年が経っていた。

つまり、僕が死んでからそれだけの年数が経っていたということ。

あの頃の僕は、朝から誰かに起こされて、遊んで、学んで、充実していると言い切れるほどの毎日を送っていたと思う。

賑やかで、穏やかで、騒がしくて、消閑する暇さえない。

そんな日々が、僕にはあった。

そして、今。

ここでも僕の日常は、相変わらずのままだ。

第十一話「僕とさくらとアイシアと日常生活。」

正月におけるエピソードは、あけましておめでとうございます、な

んていう言葉と合わせて僕に酒を飲ませようとする三人（さくら、純一、アイシア）は、ただの鬼畜なんじゃないかって思った（ちなみに由姫さんは笑って見てるだけだった。へるぷみー！）事だけだ。

そして音姫ちゃんと由夢ちゃんがお酒に弱いことまでわかった。

……………いや別に、だからどうしたってわけじゃないんだけど。

何はともあれそんな正月も1月3日、三が日の最終日。

さくらはコタツに入り浸り、テレビに蜜柑にお菓子にお茶と、猫のようにだらけ外に出ようとはせず、アイシアはお菓子を食べつつも自分のおもちやの設計に精を出し、僕はそんな二人（たまに音姫ちゃんが来るから三人かな？）にお菓子を創るのがこの三日間の行動になっていた。

ただ今、さくらと一緒に水戸の光圀さんの活躍を見ているところ。

「アイシア、黄門様の活躍と一緒にみない？」

「あ、見る見る。まだやってるんだそのシリーズ」

「名作は時を越えて愛されるんだよ！」

胸を張って言い放つさくら。

まあ確かにそのとおりだ。

そして君達二人並んで仲良く座していると違うと違和感しか感じない。

「……………しかし、この数十年で大分変わったなあ、色々と」

「えっと、たとえば？」

思わずこぼした言葉にさくらが食いついてきた。
素直に僕は答える。

「二人が仲良く座ってたり、CG技術が進歩してたり、テレビの大きさ、ケータイの小ささとか。特に一番小さいやつ。なんだあれ、吹いたら飛んでっちゃんそうじゃんか」

「にやはは、確かにそうだね。ボクもあれは小さすぎじゃないかな〜って思ったもん」

「あたしはあれもアリだと思うけど……技術の最先端はここまで来た！っていうのがわかる気がするし」

「技術の最先端、ねえ……………」

その言葉で、天枷研究所を思い出した。
あまかせ

昔の最先端と言えはあそこで産み出されたロボットだろう。

人間そっくりのロボットを作るとかもう何なんだよ、ってレベルだったし。

って、そこで手伝い兼開発をしていた僕に言えたことじゃないか。

……………ああ、そうだった。

亡くなってしまった博士先輩さんにはもう会えないんだっけ。

また涙が少し零れた。

あれから涙腺がゆるくなってるなあ、僕。

最近はもう、泣くことなんてしよっちゅうになっている。

『精神は身体に引っ張られる』なんて聞くけど本当にそうなのかもしれない。

とにかく、僕は泣くことが多くなった。

あれから――アイシアの前で思いっきり泣いた日からだ。

――

泣き疲れて眠ってしまった僕が起きたのは、夕方だった。

「う……………ん？」

夕焼けがまぶしい。

そしてやけにすっきりした気持ちになったのはなぜだろう。

……………思いっきり泣いたからです、本当にありがとうございます。
た。

うわ、恥ずかしい。

年下だったの女の子に抱きしめられて泣くとかなんかもうホントに
恥ずかしい。

「――あ、起きた。おはよう春日」

「ん、はよー、アイシア。……………ありがとね」

料理の準備をしていたらしいアイシアがひよっこ顔をだした。
片手を挙げて挨拶をし、感謝を述べる。

「気にしないで、あたしは嬉しかったし」

「嬉しい？」

なにがだ。

僕が泣いたのがそんなに嬉しかったのか？

「そうだよ。だって春日はあたし達……っていつでもあたしが初音島^{ミコト}に来てからだけど、一度も泣いたところを見たことがなかったから」

「———そうだっけ？」

「うん、だから春日もちゃんと泣けるんだな……って少し安心しちゃった。昔は喜怒哀楽の哀がないのかと思ってたもん」

そういや、確かにそうかもしれない。

まあ確かにあの頃は悟っていたというかなんとか、心配をかけたくなかったというか。

泣いたら心配されるんじゃないかって思い込んで必死に耐えてた。僕の回りに、そういうのに対して気付く鋭い人が多かったから、ぼろも出さないようにしてたし。

「ん、それは申しわけない」

「まったく、そんなだからはるはことりちゃんにいつも心配かけて怒られてたんだよ」

「あー、それは本当に申し訳なかったなあ———ってさくら！？」

おま、いつ帰ってきたんだ!？」

「……………ボクが帰ってきたとき、二人が抱き合って眠ってました。やけに幸せそうな顔でした。さて、ボクは何を考えただしょう?」

想像してみよう。

夕陽が射す夕陽色に染まる部屋の中、仲よさそうにぐっすりと眠っている2人。

少し寒いのか、互いに抱きしめあっている。

———うん、普通に添い寝ですね。

にしてはさくらの発言に所々棘があるのだけれど、なぜ?

「あのー……さくらサン?」

「別に楽しそうとか暖かそうとかうらやましいとかじゃなくて、仕事してきたボクに何かないのかな?なんて考えたりもしていないから安心してよ、はる」

おお、Lv高い怒り方でございます。

………ったく、しゃーない。

「創造／50kcal＝苺大福50kcal」

ポンと創り出した苺大福をさくらに食べさせる。

「今日もお仕事お疲れさま」

「ん、むぐ、さんきゅー、はるる♪」

一気に破顔するさくら。
うむ、いい笑顔である。
創った甲斐もあったというもの。

「む……………」

「はいはい、アイシアもこれ」

「わー、ありがとう」

不満そうに眺めていたアイシアには生クリームでカスタードを包んだ大福を渡す。

……………なんか餌付けしてる気分になってくるんだけど、これ。

「んぐんぐ、あ、さくら」

「んむ？（なに？と聞いているらしい）」

「あたしの部屋、そのままになってる？ 3ヶ月もほったらかしだとちょっと気になっちゃって」

「んむ、むーむむむむむむむむむむ（うん、掃除した以外は変えてないよ、と言いたい以下略）」

「……………さくら、とりあえず食べ終わってから話しなよ」

僕が注意すると急いで飲み込むさくら。

のどに詰まるかもしれないからそーゆーことはしないの、まったく。

さくらがちゃんと飲み込んだのを確認して、アイシアは他の懸念事項を聞き始めた。

「でさ、春日のことなんだけど、純一達には……………」

「お兄ちゃんたちは知ってるから問題なし♪」

「あ、そうなんだ。……………あたしがいない間に色々あったんだね」

「まあね。はると義之くんがこっちに来たりしてるし、由姫ちゃんも病気も治った……………治した、が正しいのかな？」

「あ、義之くんも連れてきたんだ。——って治した!？」

「そ、はるが治したの♪」

「ああ、春日が治したんだ。へへ」

「……………やけに軽いな、アイシア」

「だって春日だし。忘れたくても忘れられないような奇跡を起こしてるんだもん、あっさり治したんだろうなっと思って」

「そんな非常識な事したんだっけか、僕」

「「うん、したよ」」

桜の木を枯らしたことでぐらしか覚えてないんだけど。

確かことりとさくらとアイシアがいて、僕が魔法を使って、それから……………なんだっけ？

何かした気がするんだけど、まったく思いだせない。

「うーん……………思い出せない」

「まあ、それは追々思い出していけばいいんじゃない？」

「んー、なるべく早く思い出したいけど、今はそれでいいか」

無理して思い出すと頭痛が走りそうだし。

無理はしない方向でってことで、これからは過ごしていきますか……………と。

あ、そうだ。

さくらが怒っていた理由ってなんだったんだろう？

「さくら」

「ん、なに？」

「何でさっき怒ってたの？」

さくらは僕がそういった瞬間にじと目になった。
いや、だからなんで？

「それは―――――なんでもない。…………どーせはるだし」

「む、それはどーゆー意味ださくらんぼ」

「なんでもなくい。アイシアの前じゃ泣いてるのにボクの前じゃ泣いてくれないんだなうなんて思っ
てないもん」

「あ……………」

さっきアイシアとも話してたことだけど、昔の僕は周りに心配を
かけまいと、心を隠して生きていた。

だからさくら達の前では一度も泣かなかったし、一度目の桜を枯ら
す寸前まで、弱音を吐かなかった。

心配事があって隠そうとするとすぐに心を読めることりにばれて、
結構叱られていた。

そのうち心を読まれないように魔法まで使って隠したっけ。
それで純一とかに押しかけられて、喧嘩して。

―――ああ、懐かしい。懐かしくて泣けてくる。

あの頃は、隠し事ばかりですごく申し訳なかった。

……でも嬉しかった。
だって心配してくれていると、自分が一人じゃないって言われてる
気がしたから。

「……………ごめん、さくら。今から泣く」

「え？ いや、そんな無理に泣かなくても」

「限界、耐え切れない」

さくらを抱きしめて涙をこぼす。

嗚咽を噛み殺しているとおずおずと背中中に手が回された。

言いたい事とか、いっぱいあったんだ。

「ありがとう、ありがとう、ごめんね、ずっとじんばいがげでばっ
がりで」

「……………良いんだよ。ボクもはるに心配かけて助けてもらって
ばっかりだもん」

「ごめんなさい、いつもかくじでばっがりで」

「ううん、ボクにも隠し事はあったからいいの。謝らないで」

「ありがど……………」

そして僕は、空腹で涙が引つ込むまで泣き続けたのだった。



それからというものの、ふとした拍子に泣いてしまうことが多くなっ

た。

今もぼろぼろ涙がこぼれている。

それを拭い、ふう、とため息をついて外を眺めた。

「————」

「……………はる、大丈夫？」

「ん。変わってることも多いけど————」

「変わってないものもあるから平気？」

「……のとーり、さくら」

変わらないものなんて少ししかない。

そうばあちゃんと言っていた。

それなら僕は、その変わらないものの中で、ハッピーに過ごしてやろう。

……とりあえず天国（に行けたかはわからないけど）の博士先輩さん、元気にやっていますように。

————あ、そういえば。

「さくら、天枷研究所ってまだあったよね？」

「？ うん、あるけど……………」

「そっか、わかった。今度行ってくるね」

「はい、了解。IDカードは箱の中ね♪」

「ん、さんきゅー」

「春日、シュークリーム」

「はいはい只今」

ぽん、とシュークリームを創り（ちなみに超低カロリー。大体20kcalで生成している）、みかんをもぐもぐ。

「うまうま……………まぐまぐ」

「はぐはぐ……………もぐもぐ」

「おう、かっこいいー！ いいぞ、黄門様ー！」

こんなのにびりしている毎日を、僕らはこれからも送っていくのだろう。

「あ、はる、ボクきんつば食べたい」

「あたしエクレアー♪」

「はいはい。……………あ、そのみかん取って」

……………もぐもぐ。

僕とさくらとアイシアと日常生活。(後書き)

完！！

まぐまぐ。

とかついてしまいそうです。 いや、続きますよ？

ロボット。

僕がその単語で思い出すのはバナナが大好きだった人間と一人のロボットのこと。

はてさて、研究所はどっちだったかなーっと。

そういえば、桜のことも気になってた。

一回見に行ってみようかな？

次々回「僕とロボットとバナナとマフラー。 & 僕と少女と歌と

願い事。」

短編挟んで更新予定。

誤字脱字、指摘、気になることございましたら作者にメッセージを

送るか感想にお書きください。

ここまで読んでいただき、まことにありがとうございました。

……………これ、マルチエンディング風にしたら面白いかも？

番外2「朝倉姉妹＋1との初音島観光と『桜内』春日」（前書き）

ノートがご臨終につき新しいのが届くまで時間がかかります。

これもちまちま書き続けたやつなんだぜ……。

あ、お気に入り登録100件、ありがとうございます！

番外2「朝倉姉妹＋1との初音島観光と『桜内』春日」

朝早くに起きてしまった。

昨日特に早く寝たわけでもないのに。

どれもこれも窓からの冷気のせいだ。

――あー、そのー。春眠暁をなんたらといいますか。

――雪が降り積もる初音島において、朝というものは非常に寒いものなのです。

――これを体験したらあら不思議、嫌でも布団から離れられなくなる魔法のような現象が！

――というわけでお休みなさい。

……なんて、言い訳を頭で言葉にしつつ、ふとんのなか幸せな空間にしようとバカなことを考えていた僕にかけられる声。

「ハル、おきて」

僕のものびりとした1日は、その言葉から始まった。

番外2。

「朝倉姉妹＋1との初音島観光と染衣春日の思い出。」

「あ……と……2時間………まだまにあう………」

「……………おきてよ」

「うう、ねむい……………」

重い体を動かして頭を起動させる。

あ、あいさつは大事だね。

僕はいつものように顔を上げ、

「おはよう、こと———」

僕を起こしに来た音姫ちゃんを目に入れて、自分が何を言おうとしたか考え、違う言葉に変換した。

「————ばに出来ないぐらい可愛いね、音姫ちゃん」

……あれ、なんか重大な間違いを犯した気が。

なんか外堀どころか内堀を自分でマッハを越えて埋めた感じ。

「……………（ぷいっ）」

「————とりあえず聞こうか。どこから入ってきたの？」

顔が少し赤い音姫ちゃんは、何も言わず窓を指さす。

「窓……………って、まさか」

窓からは桜の木が覗いている。

それは音姫ちゃんの部屋にも近く、僕の部屋に入れるぐらいの高さに太い枝を伸ばしていた。

昔、さくらが純一の部屋にそれで侵入していたのを思い出す。

「枝を伝ってきたの？」

「……………ん」

こくり、と頷く音姫ちゃん。

おう、とうとう侵入経路が完成してしまいました。

部屋の窓の鍵が壊れてるのもいけないんだろうけど。
まあ、それはどーでもいいことです。

「危ないからやめなさい。落ちたら怪我じゃ済まないかもしれないんだよ？」

「だって、ハルとおはなししたかったから………」
「うぐ」

なにこの涙目でちよつとむくれてる娘かわいい。

そしてこの姿を見てるとこっちは間違ったことは言っていないはずなのに、ものすごく謝らなきゃいけない気がしてくる……っ！

「と、とりあえずお話したいなら玄関から上がるように！」

「……はい」

本当に分かっているのかい、音姫ちゃん？

「まったく。怪我なんてしたら健康な意味がないじゃんか」

「……………？」

そう、まったくもって。

病気で動けない人だっているのにわざわざ怪我しに行くなんて緊急時以外は考えたくない。

健康がどれだけ幸せなことか。

「とりあえず、いくらお話がしたいからって危険なことをしちゃいけません。お話したいならちゃんと玄関から来ること」

「はい、ぜんしよしまーす」

そう政治家のようにそっぽを向きながら言う音姫ちゃん。
結局、僕が打開策を思いつくまでこの後何度も侵入してくる音姫ちゃんだった。
打開策の話はまた今度ってことで。

—○—

「はよー」

「はろはろ」

「おっはよー！」

「……………おはようございます」

挨拶だけでどれが誰かわかる芳乃家＋１クオリティってすごい。

ちなみに上から、僕、さくら、アイシア、音姫ちゃんだ。

「うにゃ、寒いねえ」

「あたしはそこまで苦じゃないけど……………あ、さくら。醤油とって」

「はい。アイシアは昔から寒いところにいたからでしょ。ボクは今日一日、布団に丸まって過ごそうかと思ったぐらいだもん」

「絶対やめろよさくら。僕だってやりたくても我慢してるんだから」

家に二つも布団達磨があっただまりますかい。

「はーい。 あ、そうだ。 はる、例の件なんだけど……」

「ああ、どうしようかって話な。 んー、僕はどうでもいいかなって思うんだけど」

「でもそのままだとイロイロ問題が出てきちゃうんだよね……」

さくらが言っているのは僕の苗字のこと。

『染衣』という苗字の人間はもうこの世に一人として存在していない。

そして僕、染衣春日が存在するのもまずい。

だって、『染衣春日』は死んでしまった人間なのだから。

ってなわけで昔の僕の戸籍をそのまま使うのはNG。

クローン技術なんでもので疑われるのも嫌だからという理由で『染衣』もNG。

だからと言って……。

「芳乃にして、さくらの息子になるってのもありっちゃありだけど」

「それはダメ」

さくらと音姫ちゃんが口をあわせてそれを拒否する。

戸惑う僕。

「……………なぜに？」

「それは……」

「よし——おとうとくん、ひとりだけみようじがちがっちゃう」

「そうそれ！」

「へー、そうかい」

テキトーに返事を返す僕。

そんなこと言ったらさくらだって一人になっちゃうんだけど。そういうば音姫ちゃん、最近義之を弟と見始めたようです。

「（だってそうしたら絶対に結婚できないし）」

「（さくらさんのおむこさんになってるみたいで……なんかいや）」

アイシアは苦笑いしてなにかを考えている二人を見てるだけだった。

—○—

「おねえちゃん！ あそぼー！」

「ハルー！ あそびにいこー！」

食後。

縁側でお茶をすすりながら音姫ちゃんと雑談もとい歌の講義をしていると、由夢ちゃんと義之が家に遊びに来た。

「だってさ、音姫ちゃん」

「いこ、ハル」

ノータイムで返事を返される。

やれやれ、お家でのんびりライフは終了みたいですな。

「ん、りょーかい。先に玄関まで行ってる」

「わかった」

自分の部屋まで駆け上がり、深紅のマフラーとくたびれたコートを羽織る。

「ばなーなー、なんちゃって」

自分の言ったことにくすりと笑みをこぼし、ゆったりとした足取りで玄関に向かう。

「ふんふふん♪」

「あ、しらかわことりさんのだ」

「お、よくわかったね。撫でてあげよう」
「んう」

鼻歌を奏でつつ自宅に服を取りに行った音姫ちゃんを待っていると由夢ちゃんが曲名をズバリ言い当てたので頭を撫でる。

『白川小鳥』（芸名）。

わが日本が誇る世界的なシンガーソングライター。
もう70近いという話だが、その声、美貌ともに衰えを見せない。

今は海外に派遣されている医療グループと一緒にチャリティコンサートを開きながら全世界を回っている。

出身は年十桜が咲き誇ること有名な初音島。

彼女の歌はそこで生まれ、育まれたとのこと（本人談）。

（出典引用…ういくいぺでいお）

まあつまり、僕がよく知ってる『白河ことり』と同一人物ということだ。

だからなんだ、って言われたら特に何でもないんだけど。

とりあえず、付属の時に作った曲を歌っていてくれたのはとても嬉しかった、とだけ言っておく。

まあ、作ったのは5、6曲。

それ以外は全部知らない曲だ。

ことりが歌う、僕の知らない歌。

そんなものが存在するなんて思いもしなかった。

「第2ボタンの誓い、かぁ……………」

僕は卒業なんてできなかったわけだけど。

もし卒業してたら第2ボタンを誰かにあげていたんだろうか。

……………ないわー。

自分が恋愛感情ってものを持って誰かに接することが考えられない。

『好き』なら好き、『嫌い』なら嫌い。

そういう区分しかしてこなかったから。

告白なんてされたこともねーし。

……べっ、別にうらやましいとかじゃないんだからね!?

実は卒業式に無事出ていたら誰かから告白されるんじゃないか、なんて考えてないんだからっ!

……………ないわー。

「おまたせ」

「あ、おねえちゃん」

「おねえちゃん」

「ちゃんと暖かくしてきた？」

「……ん」

考えに耽っているうちに自分の家に行って着替えてきた音姫ちゃんと合流。

「で、どこにいくの？」

「「さくらこうえん！」」

最初の目的地は、桜公園のようです。



「というわけで桜公園に到着、っと」

「とうちゃくく！」

由夢ちゃんを見てるとなんだか癒される。

まるで純一の後ろについて歩く裏モードの娘のよう。

それは置いておいて。

「んー、桜がこれまた見事に咲いてるねえ……」

「きよねんまで、そんなことなかった」

「あれ、そうなの音姫ちゃん？」
「……………ん」

そう言われて思い出すのは雪降る中で桜が咲く、奇跡のような光景。
むう、と唸って首を捻る。

桜が咲いた理由^{わけ}、そういや聞いてなかったな。

今夜あたりにでも「よう坊主。今日は賑やかだな」あ、チョコバナナ屋台のおやつさんだ。

「おやつさん。バナナナ！」

「おう、バナナナー！ 今日も買ってくかい？」

「んー……じゃあ、4本お願いするね」

「あいよっ！ 1本分サービスだ！」

「え、マジで？ ありがとうおやつさん！」

「気にすんなくて。 まあ、これからも御贔屓になってやつだ」

じーん。

おやつさんいい人。

春後輩、やっぱりお前が言ってた通りバナナ好きに悪い人はいなかったよ……。

少々感動しながらお金を払い、みんなに配る。

「んぐ。 ……………うまあ」

一口食べて感動。

そう、これだよ。

これが僕が求めてやまないBANANAの最終形態(?)だよ。

……って、あれ？

何か考え事をしていたような……？

「ハル、ぼーっとしてないでいくよ」

「こっちこっちー!!」

「いこうよ、ハル」

「あ、うん、今行くよ」



市街地を探検中。

「これまた、大きい家だな……………」

鷺澤という表札の付いた豪邸。

水越と表札の付いた大豪邸。

なぜだろう、知り合いにいた気がするのは。

特に後の方。

「あ、みてみておにちゃんおねえちゃん！　こうえんがあるよ！」

「ほんとだ」

「……………でもちいさい」

「――――」

ああ、そっか。

宇宙人のいる公園、そういえばこの辺だったっけ。
しゃけおにぎりでも持ってくればよかった。

「ハル？」

「ん、ちっさくて良い公園だ」

ええと、隠れ家にはどう行くんだっけ？

「鉄棒で逆上がりを……違うなあ。ベンチで待ち合わせ、3時間
待って『雪、積もってるよ』って言われる……これも違う。あっ
れえ？」

「うぐう」

ありがとう由夢ちゃん。

でもそれ今僕が求めているものと違う。

「……………」

「ながいちんもくがハルにはしった……」

「わざわざナレーションまで入れなくていいからね、音姫ちゃん」

思い出すのは無理そうだ。

放置安定になりました、っと。

そういえばさつきから喋っていない義之はいずこ？

「ハルー！！　すごいよー！！」

あ、いた。

「どうした、義之。何がすごいって？」

「ぴんくのくまさんがいた！」

「————は？」

「もうどこかいっちゃったけど」

いるのか。

いや、まだいたのか宇宙人。

とりあえず……………。

「今度来るときはしゃけおにぎりを持って来よう」

「しゃけ？」

「ピンクのくまさんの大好物なんだ」

「へー」

嘘っぽい返事を返され、そこで話は打ち切られた。

さあて、久しぶりに遊具やら何やらで遊びましようかね……………！

—○—

只今帰宅途中。

「よくもまあ、こんなにぐっすりと寝られるもんだよ」

背中には音姫ちゃんに乗っている。

隣を歩く義之の背中には由夢ちゃんが。

「たくさんあそんだからじゃない？」

「ま、だろーな」

眠るまで遊ぶってどんだけはしゃいでんねん。

いやまあ、音姫ちゃんちゃんがちゃんと笑ってくれてる様で安心したけどさ。

「すう……………」

「……………はあ。ま、いいことなんだろうけどね」

とりあえず今度はちゃんと起きて帰ってこれるぐらいの外出にしよう。

「ん……………ハル……………」

「はいはい、君をおぶってますよー」

この体勢でハルって呼ばれるのも久しぶりな気がする。
さくらかことりか忘れたけど、どっちかおぶったし。

「あ、はる」

「春日だ、やっほー♪」

「さくら、アイシア」

「さくらさん、アイシアおねえちゃん」

あ、義之が言ってる『おねえちゃん』ってのはアイシアが呼ばせてるだけです。

気にしないであげてください。

とまあ、二人と合流して家に…………って、もう家か。
目と鼻の先だった。

「さて、おじゃまします……っと」
「ただいまー」

朝倉家にお邪魔する。

『ただいま』と言わないのはもう半ば自分の家のようなものだがせめてもの抵抗なのです。

「おかえりなさい。……あらあら、二人とも幸せそうな顔で眠っちゃって」

「ただいま、由姫さん！」

「こんにちは由姫さん。音姫ちゃんお願いしていいですか？」

「はいは———あ、晩御飯の準備途中だった。義之君、ハル君、二人を部屋に連れて行ってあげて」

「今の微妙な間はいったい……」

「じゃあよろしくねー」

ひゅん、と台所に引っ込む由姫さん。
なんかあったのか？

「ま、いつか。義之、運んじゃおう」
「りょーかい」

とりあえず、背中の娘らをどうにかしますかね。

「第4回!! はるの苗字をどうしようか選手けーんっ!!」

「わーわー♪」

「どんどん」

「ぱちぱちぱふぱふ♪」

ご飯を食べおわり、さくらに呼ばれて朝倉家のリビングに向かったは良いものの、突然の出来事に僕は目が回っていた。

「え、なに、は、え、は? つまり……どうゆうこと?」

「あんまりにも結論がつかないからみんなに決めてもらおうと思つて!」

「The・丸投げ。本当にありがとうございました、と。――
つてなわけでさくら。お前が決めてちゃっちゃんと片付けろ」

「それでダメだったから頼んでるんだよ」

まったく、これだからはるは……みたいな顔するんじゃないよ。

溜息すると幸せが逃げて行くぞ。

「大丈夫、これ溜息じゃなくて呆れ息だから」

「結局名前しか変わらねえから。で? そんなことより苗字候補
つてなんなんだよ」

「それはねえ……… じゃん!!」

どこからともなく……魔法を使ってホワイトボードを出すさくら。
以下の文章、もとい苗字が書いてあった。

- ・芳乃
- ・染衣
- ・朝倉
- ・桜内

・杉並

「「とりあえず最後のだけは無い」」
「にゃはは、やっぱり？」

当然。

僕とアイシアと純一の声がぴったり揃うぐらいない。
杉並って……………万が一まで考えていたけど無い。

もうあの「はーっはっは！」っていう笑い声と同じとは思われたくない。

「はい次」

「染衣？」

「芳乃」

「ソメイヨシノでもいいよ♪」

「いいよ♪ じゃねえわ！ ならまだ染衣 芳乃っていう本名にし

たほうがいいっての！！」

「……しちゃう？」

「しねえよ！ 次！」

誰だよ染衣芳乃って。

もはや苗字以外面影がない。

「次は……朝倉？」

「だめ」

「うおう、速いな音姫ちゃん。 ……………なぜに？」

「もういっぱいいい」

「ちら」

「とき」

由姫さんをチラ見したら乙女な反応を返された。
ちょっとかわいい、じゃなくて救援もとい説明はなさそうだ。

「んじゃ、これも消去つと。残るは桜内しかないんだけど………」

「もういいんじゃない？ 義之くんもはるがお兄ちゃんなら嬉しいよね？」

「ハルがにいちゃん……うん、うれしい」

「だってさ」

「ん………」

まあ、桜内なら本当に問題ないし。
周りも反対してる奴はいないみたいだし。

「んじゃ、それでいこうかな。新・春日の誕生ってことで」

にこやかな顔で言い放つ。

この日、僕は、桜内春日になった。

番外2「朝倉姉妹+1との初音島観光と『桜内』春日」（後書き）

ってなわけで、春日、染衣から桜内にネームチェンジしました。

次回予告はもう終わってるので前回のを御覧あれ。

気になること、誤字脱字、設定の矛盾などありましたら感想まで。
もちろん普通の感想もOKです。

此処まで読んでいただき、誠にありがとうございました。

次回更新は………3月以内にできたらいいな。

僕とロボットとバナナとマフラー。(前書き)

申し訳ございませんでした。

遅れに遅れた結果がこれだよ！

というわけで、天枷さんち編（2部構成）。

はっじまっるよー！

あ、オリキャラが追加、かも

僕とロボットとバナナとマフラー。

小さいころ。

病院のベッドで寝ていたとき、ふと考えたことがあった。

『もし、ぼくがロボットだったら、きっとこんなくなるしくなかったのに』

それから、毎日のように機械工学関係の本を読み漁った。
魔法、本、時間。

使えるものはすべて使った。

“もしも僕がロボットだったら”そのことを現実にしようとして、
そして、

『————ん、やっぱ無理だったか』

その現実に向かい合った。

でもその時に吸収したものは決して無駄ではなくて、

『春博士』 『春日博士』 『染衣博士』 『ハル先輩』 『春の坊主』 『春ハカセ』

『ははは、そんなこと気にしていたのか。 バカだなあ、博士は』

確かに僕が、

『感謝してるにきまってるだろう。 生みの親みたいなものじゃないか』

その時、そこにいた証明の一つになっていたのだ。

第十二話

「僕とロボットとバナナとマフラー。」

「さて、と。　まだ残ってるといいんだけどねえ」

研究所を見上げてぽつりと漏らす。

ポケットに入れた右手に握りこんだ、カギとゼンマイがぶつかり合
って小さな音を立てた。

今の僕の服装は、黒目の服上下に白衣、首に真紅のマフラー。

ポケットにはシガレット（チョコ味）とケータイ（この前買ったも
らった）。

音楽再生機とIDカードが首から下がっている。

腕には昔作ってもらった『開発副主任代行主任』の文字が入った腕
章。

なんだかテンションが上がってきたので叫んでみた。

「……………天枷研究所よ、私は帰ってきた！……………！」

受付と通りかかったお姉さんに白い目で見られた。

—○—

「気を取り直そうか、うん。 誰にも見られなかったし、聞かれなかった」

あの後、やけに受付のお姉さんがやさしい目で案内してくれたのは気のせいなんだ、そうなんだ。

結局、見学かなんかと勘違いされてるみたい。
子供が背伸びしちやってあらまあみたいな。

まったく、僕はちゃんとした研究所員だったのに。

まあそれは置いといて。

「はい、待ったその少年！」

置いておこうとしたらもう一人のお姉さんに絡まれた。

「一人なの？ お姉さんが付き添ってあげようか」

「あ、だいじょぶです。道わかってますので」

「そう言わずに、年上の好意には甘えときなさいって」

「……や、あの。本当に場所は大丈夫なんで」

「いいからいいから。お？ IDカードあるじゃない。お兄さ

んでもいるのかな？」

「や、だから」

「んじゃ、行くわよー」

強引に腕を引っ張られる感覚を久しぶりに感じながら、僕は思考の海に沈む（現実逃避した、とも言える）。

———実は、さくらにここに来ることを少し反対された。

カードキーのある場所をあっさり吐いたくせに、さくらはなぜか僕がここに行くのを嫌がったのだ。

「なんでさ」

「……また、悲しい思いをするかもしれないから」

「は？」

「今までそこにいた人がいなくなってる、はるが悲しい思いをするのが嫌だから」

「ああ、そういうことか。大丈夫、それはわかって」

「わかってない！！！！！！」

「……………」

「全然、全然わかってない！ 少し前の記憶の中にいる人がいない

現実を、はるはわかってないよ！」

「それはっ————」

「きっと、悲しんで泣き出すよ」

「泣くわけ………ある、なあ」

「でしょ。だからボクが付き添いで」

「でも、それを乗り越えてこそ何かが手に入る気がする!!」

「……………へ？」

「ばあちゃんが言った。『人は別れを乗り越えて強くなってい
くんだよ』 ならこれは僕が強くなるための一歩！ そう、そうだ

！ ありがと、気づかせてくれて。 さすがさくらは頭が回るな！」

「え、あ、うん、ありがと……？」

「よし、じゃあ行ってくる。 帰りは遅くなるかもしれないからご
はんは取っておいてくれ！」

「あ、いつてらっしゃい。 ……………あれ？」

反対、ばあちゃんのことばというか大切なことを思い出させてくれたさくら。
すぐくありがたかったです。

最後、何かうまくいかなかった顔をしていた気がするけど、気にし
ない方向で。

昔っから、ことりとさくらはあんな顔ばかりしてた気がする。

気のせいかな。

うん、多分そうだろう。

「はい、着いたわ。 ここが天枷研究所のトップ、第一研究室」

見知った研究室にたどり着く僕。

いや、だから知ってるんですってば。

研究員なんですってば。

そんなことを顔で表現する僕をガン無視していくフリーダムなお姉さん。

「ちょうど最高責任者がいるから見学できるか聞いてみましょうか。

おーい、沢井博士ー!!」

「おや、水越君。今日も来たんだね?」

「はい、今日も来ちゃいました!」「ぶっ!?!」

水越!?! 水越ってあの水越!?!

「……………彼は誰だい? 水越君の、ええと…………妹、かな?」

「男の子ですよ。そして弟でも何でもありません」

「……………」

女扱いされたことは右耳から入って、少し止まったけど左耳から出ていく。

水越って。

眞子^{まこ}か萌先輩^{もえ}の娘か孫ってこと?

確かに髪色同じだし、なんとなく雰囲気も似てると思ったけどマジですか!?!

いやいや、まさか子孫に出会えるとは、びっくりですよ僕。
もしかしたら誰かに会うこともできるかも…………。

「っていやいや、そうじゃないじゃん」

一つ溜息。

そして周りを見渡してみる。

内装は少し変わっているものの、ほとんど昔のまま。

いや、この空気も、匂いも、何もかもが懐かしい。
まるで昔に戻ったみたいだ。

そう、あれは―――。

……………って、だから違うっての。

回想に入ってる暇なんてなし。

目的は部屋に行くことなんだから。

「さてと」

「「？」」

不思議そうな顔をする二人を置いて、カードキーのロックがかかったドアに近づく。

「ああ、済まないけどそこは関係者以外立ち入り禁止で、」
「知ってます」

ドアの前に立つと、合成音声のような、そうでないような声がドアについているスピーカーから流れだした。

「名前とパスワードをどうぞ」
「『ハル』。『バナナは世界を救う』」

そういつて少し背伸びし、IDカードを通す。

「IDカード————識別確認しました。……………お久しぶりです、ハル博士」

「こちらこそ久しぶり。ちょっと黄泉返ってみたよ」

「ジョークが相変わらず上手ですね、博士」

「……………いや、冗談じゃないんだけどさ。まあいいか」

AI——シーズという——に言葉を返し、部屋に進む。

職員が導入したのか、仮眠ベッドが置いてあり、その近くに研究用の個人机が置いてあった。

一番端、僕の机に椅子、マグカップまできれいにそのままの位置で固定されている。

色褪せた写真が時間の経過を教えてくれた。

すっと椅子を引き、そこに腰を据える。

帰ってきた。

素直にそう思える。

「————ただいま、シーズ」

「43年と4か月19日、11時間56分ぶりの再会です。お待ちしておりました」

「そんなに？ やっぱ気づかないなあ、こうなると」

「なにがでしょうか？」

「時間旅行」

「タイムトラベルということですか。若返ったようにも見えますが」

「それがわからないんだよな。　　どうだろう？」

「私には理解しかねます」

「だよねえ」

このまま雑談にシフトしていきそうな僕らに、とうとう……ええと、沢井博士（？）が話しかけてきた。

「君は、いったい……」

「僕ですか？　僕は――――」

「染衣春日博士。　2004年時における天枷研究所のロボット開発における開発副主任代行主任。　そして、私のAIを当時の研究員と開発した博士でもあります。　一番貢献した事はHMシリーズの誕生。　病に侵された身ながらもその他いろいろなことにも手を出しており――――」

「ああ、もういいもういい。　わかった、ありがとう、シリーズ」

「もう少し語らせてください。　私を産み出した博士の自慢ぐらいさせて頂いてもよろしいではないですか」

「……お前、この40年でかなり変わったんだな」

「気のせいです。　昔から私は博士のことが大好きでしたから」

「あー、そーかい」

「ええと、君は染衣博士、ということでもいいのかい？」

「今は苗字が変わって桜内ですけどね。　あ、『ハル』って呼んでください。　そのほうがわかりやすいので」

実際、僕が『染衣博士』なんて呼ばれたのは覚えているだけでも5回ぐらいしかないし。

もはやシリーズ以外の誰も僕の名字覚えていないんじゃない？　ってぐらいの呼ばれなさだった。

「ええと……ハル博士は、その年月をどうやってその姿で？」

「コールドスリープ。病気でね、この時代に入ってやっと治ったんです」

「コールド……ッ!？」

「びっくりしました。こんなに経ってるなんて思いもしませんでしたし」

「では病気は、もう」

「治りました。いやはや、技術の進歩って凄いですね」

「そうなのですか……」

「はい、そうなんです。あ、よろしくお願いします。お姉さんも」

「はいはい。私は水越舞佳。よろしく、ハルショーねん」

握手を求め、手を握った時に、

「変換／500kcal＝強制認識」

すみません、と心の中でこっそり謝り、魔法を使う。

ちなみにコールドスリープ云々はさくら、アイシア、由姫さん、純一と話し合って決めた設定。

昔の僕を知っている人（または知った人）にはこれを強制的に認識させないとちよつとまずい。

頭のいい人は特に。

一回かなり危なかったこととかあったからこればかりは仕方ないと割り切った。

本当はあんまりこういうことに魔法は使いたくないんだけどね。強制認識は副作用で数分ぼけつとしちゃうから。

「ハル博士。お茶とバナナです。貴方と私の再会を祝して」

「お、ありがとう」

「いえいえ」

隣の部屋から出て来た銀髪の綺麗な人が出てきて僕の机にお茶とバナナを置く。

そのまま隣の机に座ると自分用のお茶を————って。

「え、なに？ まさかシーズなの？」

「ええ。今はHM-A08ミフユの体を借りていますが、間違はなく私はシーズです。この体に入っているときは『四季』と名乗っています」

「え、ああ、そうなんだ……。あれ？ じゃあその体の持ち主の人格は」

「こちらです、染衣さん。初めましてですね。ワタシは天枷美冬です」

「うひゃ!？」

スピーカーから今までとは違うやわらかい声が僕に掛けられた。心臓に悪いからやめてくださいよ、とか思ってみたり。

「……あー、うん、初めまして、美冬さん。僕は桜内春日、ハルって呼んでくれるとうれしい」

「はい、ハルさん。天枷研究所に、おかえりなさい」

「うん、ありがとう。……ただいま」

「————ふふふ、ハルさんはいい人なんですね」

「え、いきなり何さ。僕、なにかした？」

「いえいえ、シーズ姉さんの中のデータバンクをですね、ハルさんで検索をかけて拝見させていただいたのですが、遺言が「何も言わないでくださいお願いします!!!」はあ、そうですか。ハルさんがそういうなら、そうしますけど」

シリーズの中にある隠しファイルの遺言。

博士たちに、ロボットと人間が仲良くできる世界を作って貰いたい
がゆえに残した言葉。

色々なことや方法を詰め込み、シリーズに託した、僕の研究成果、並
びにコネやら何やら。

ぶっちゃければ、ロボットの人(?) 権を認めさせる条約とかを纏
めたものだったりする。

でもまあ、実は。

「それはもういいんだよ。 消去してもいいぐらい。 だって――

――」

「わたしたちロボットの権利は、もう存在しているから、でしょう?」

「ん、のとり」

ロボットの権利は、5年ほど前に制定されているからだ。

今世界は、ロボットが人間と同じように暮らせるように変わってき
ている。

それもこれも、みんな博士やロボットを愛してくれた人たちのおか
げだ。

「博士先輩も春後輩も頑張ったよなあ。 びっくりしちまったよ」

「ええ、特に天枷大博士は凄かったですよ。 なんせ90の大病ま
で頑張ったんですから」

「もう死んじまったみたいだけどね、にはは。 まあそのおかげ、
だよな」

「突っ走った、そんな感じですね。 やり遂げた顔でお亡くなりにな

なりました」

「そっか。……………そうか、よかった」

目を閉じて、あのバナナが大好きだった天枷博士のことを思い出す。

その声を。

その言葉を。

その思いを。

ほほを温かい何かが伝う。

それを拭わず、僕はバナナの皮をむく。

「にはは。 博士先輩、お疲れ様でした」

今日の乾杯代わりに食べたバナナは、少ししょっぱい味がした。



ぼけっとしていた二人が元に戻り、シーズが美冬さんと交代したり、『ロボットのこれからについての考察』という議題で会話を繰り広げていると、しゅいん、という音とともにドアが開かれた（ちなみに自動ドア。 凄く便利）。

そこに立っていたのは————和服みたいな服を着た女性と、小さな女の子だった。

また女性か。

って、言うかこの人———。

「ハル博士。 紹介します。 彼女は———」

「美秋姉さん。 今日は遅かったんですね」

「美冬ちゃん、私そんなに時間食った覚えはないのだけど……………」

「彼女———」

「あら、男の子がいるなんて珍しいわね」

「時を超えてきた博士だそうです」

「へえ……………って、なにかしらそれって。 びっくり人間なの？」

「コールドスリープだそうで」

「ああ、なるほど」

「……………」

くじけるな博士。 無視されてもファイトだ。

「ごほん、私の娘の麻耶と美秋です。 美秋は———」

「ロボット、それもH Mシリーズのですか？」

「H M……………っと、よく気づきましたね」

「違ったら凄く恥ずかしかったんですけど。 なんていうかこう、
雰囲気かね、似てたからですかね」

「似てた？」

「こっちの話です。 初めまして、美秋さん。 桜内春日です。
ハルって呼んでください」

「こちらこそ初めまして、ハルくん。 沢井美秋、H M—A O 7 ミ
アキです」

「どうも、よろしく」

「はい、よろしくお願いします」

落ち着いた雰囲気的女性だ。

そして後ろで縮こまってる女の子、沢井博士の娘さんは大丈夫なのだろうか？

「こんにちは」

「ひう!!!？」

だめだ、このパターン。　　というか悲鳴。
絶対怖がられて終わるまで予想できた。

話をそらすために沢井博士に話しかける。

「沢井美秋……ってことは、嫁入りですか？」

「ごふっ!!!」

「それもいいかもしれませんが。　あなた、どう思います？」

「げほ、げほっ！　　じょ、冗談はやめてくださいハル博士、ちゃんと私には妻がいて、美秋を養子に取っただけですから！」

「あ、やっぱりそうですか」

「子供できませんしね」

「……………勘弁してくださいよ」

「にはは」

「うふふ」

「なんなんでしょうこの空間。　不思議すぎます」

「　気にしたら負けよ、美冬。　私はこの空気が懐かしいけどね」

「　シーズ姉さんも不思議すぎです　」

「あら、ありがとう。褒め言葉よ、それ」

いや、違うから。

「……………あれ？」

「？　どうかなさいましたか？」

「いや、秋、冬、四季がいるんなら——」

相棒、というか、親友は——

「夏。　美夏は？」

「あ——」

「……………」

「——美夏、姉さんは……」

「その問いにはお答えできません、博士」

その場の皆が黙り込む中、シーズが僕にそう告げる。
いやな空気だ。

まるで、なにか隠し事をされているような……。

「なんなのか言え、シーズ」

「答えられません」

「シーズ！」

「ショックを、受けることを考慮したら、言えるわけありません」

「ショック……ッ!？」

その言葉に驚愕した僕は、

「どういふことだっ!!! 何が、何があっ——」

「今帰ったぞおー!! お土産は首都で売ってたバナナと会議でもらったバナナだ!」

思わず怒鳴ってしまった険悪なムードをぶち壊す言葉が聞こえてきた。

ドアが勢いよく開き、赤いマフラーとホルスタイン柄の帽子を付けたラフな格好の少女が姿を現す。

右手には、バナナ。

左手にも、バナナ。

肩から掛けたくたびれたバックが、少女の雰囲気を少し大人びさせているように感じた。

で、彼女はテンション高く美冬さんに駆け寄るとバナナを突き出す。

「ほおら、どうだ四季! なんと、な・ん・と・だ! わざわざ完熟のものをわざわざ取り寄せてくださったのだ! ほら、見ろ!」

「見えています。ですがそっちはミフユですよ、ミナツ」

「おお、すまんすまん!」

「いえ、ワタシは全然かまいませんけど……どうしたんですか、お姉さま? テンションが少しおかしい気がしますけど」

「そうそれだ! 聞いて驚け、なんとなあ……」

ばあん！と、そこに置いてあった机を叩くと、がばっ！と少女はポーズをとり、

「染衣春日博士が、生きていたのだ……！！」

「「「な、なんだってー←」」」

衝撃の事実（笑）を口にした！

ノってあげてる皆、やさしいね。

僕だったら多分もうツツコミを入れているよ。

そしてそんなことを気にせず饒舌に話し続ける少女……もとい、H
M—A 0 6 ミナツこと天枷美夏。

そして僕の驚愕と怒りはどこへ行けばいいんだろう。

「だからショックを受けると。 あんなバナナなんて貰ってきて……恥ずかしいです」

「アア、ソウ……」

そしてそんな僕をガン無視してノンストップな美夏。

「美夏も驚いた！ まさか勤務中のランプが点灯しているところなんてもう二度と見ないと思っていたからな……。 あの博士のこと

だ、時間でも超えて来たんだろう。なあ、博士もそう思うよな！？」

「うん、あー、うん、そうなんじゃない？ 僕に聞いた理由はわからないけど。あーいや、確かに聞く相手は間違ってたかい」

「それはもちろん近場の人間に聞きたかったからに決まっているじゃないか！ ああ、博士にもう一回会え、あ……え………あ、え？」

「はろはろー、美夏。元気がつバナナも好きそうでなにより」

「……博士。博士か。うーん……舞い上がってたけど実際に会ってしまったんだかなあ。いや、誰かがネタで仕組んでるにしてもこれはひどい。歳ぐらい取らせるだろう？ なんだ、なら簡単だ。これは夢だ。こんなのありえないからな」

うんうんと頷く美夏に近づく。

ロックオン。ステンバーイ……ステンバーイ……。

「そう、これは美夏の夢だ！」

「んなわけないから！」

「やっぱりー！！」

ばしん！と机に常備されているハリセンを叩きつける。

おお、ちゃんと手入れがされている。ナイス強度。

「うう、痛い……」

「このバカ。どうしてそうお前は自己完結するかな」

「博士のせいになんか感じられないと美夏は呟いてみる」

「どこの妹達だ」

「ちゃんとネタを拾ってくれるあたりやっぱり博士は優しいってミ

ナツはミナツは——」

「もういいわ！」

バカにしてんのかと。

いや、実際仕込んだのは僕だけど。

閑話休題。

「久しぶりだな、博士」

「ん、久しぶり、美夏」

「とりあえず、一発殴らせてくれ」

「ん……ってはあおぶっ!?!」

殴られた。

割と本気で。

「これでチャラだ。 美夏が今まで寂しかった分のな」

「……………ごめん」

「別にいい。 今チャラにしたからな」

さて、と、美夏が仕切りなおす。

「だいぶ変わった天枷^{こし}研究所にようこそ、博士」

「ただいま、でいいのかな？」

「もちろんだ。 だが、その前に……」

すっ、と美夏は立ち上がると、立っている美秋さん、美冬さんの隣に並んだ。

「改めて自己紹介だ。左から、開発主任、沢井拓馬博士」
「ようこそ、天枷研究所へ」

博士と握手をする。

「開発主任補佐、HM-A07ミアキこと、沢井美秋」
「よろしく、ハルくん」

美秋さんに会釈を返す。

「事務、会計その他、HM-A08ミフユこと天枷美冬」
「よろしくおねがいます、ハルさん」

深々と礼をされ、同じようにそれに返す。

「そして期待の新ホープ、水越舞佳」
「よろしく、ハルしょーねん」

ぴし、と手でポーズをとったので同じように返す。

「最後に、美夏だ。この研究室の総責任者であり、現在最古の“生きるロボット”、そして人類の友人、HM-A06ミナツこと、天枷美夏！！」

「……………」

堂々と。

美夏はそう名乗りを上げた。

「そんな美夏の夢は、」

そして、彼女は。

「人類とロボットが、ともに歩める世界を創造することだ！」

輝かしい笑顔で、そういったのだった。

僕とロボットとバナナとマフラー。(後書き)

おりきやら…シーズ

正式名称… Beautiful Seasons

稼働歴…45年と10か月

性格…生真面目のはずだったがいつの間にかいたずら好きに。

詳細…天枷博士と春日によるAI作成実験のプロトタイプ。

プロトタイプといっても、機能を詰め込みすぎた結果大きさがとんでもないことになってしまったがゆえにプロトタイプということになっている。

ふだんは研究室の中でもりっぱなし、もとい存在しっぱなしだが、暇になると美冬に体を借りて外に繰り出したりする。

なんていうか、すみません、

更新遅れてるのにこんなのしかかけない。

くそう、文才……。

次回も天枷さんち。

そしてその次がお待ちかね白河さんち回。

僕と美夏と日々と今後の話。(前書き)

今回は短いです。

指が動かない。

でも今は、そんな事はどうでもいいんだ。重要なことじゃない。

次回に繋げなきゃいけない最後を考えるのが楽しかった。

では、どうぞー。

僕と美夏と日々と今後の話。

春。 日々を賑う花々のように。

夏。 大空を踊る風花のように。

秋。 美しく散る紅葉のように。

冬。 木々を彩る雪花のように。

四季。 巡り巡るダ・カーポのように。

そばにロボットが居る生活。
友人としてそこにいる世界。

僕達の想いや願いは、繋がっているのだろうか。
そこにいた、あの時の僕らの。

「……………これで、完成、かな」

『うむ、これでいいだろう。 私たちにできるのはここまでだ』
「何言ってるんですか、博士先輩。 まだまだこれからです」

『…………ふう、まったく。 このご老体をこき使って楽しいか？』

「ええ、楽しいです。 未来につながる一歩でもあるんですから」

『むう、確かに。 しかも笑顔で答えられると背筋が冷えるんだ
が』

「にはは、そりゃそんな笑顔で笑ってますから。付き合ってもらいますよ、耄碌するまでは」

『これは手厳しい……手加減は無しか?』

「ええ、もちろん。でも、博士先輩——」

『でも?』

「——文句ばかり言ってる割に凄く楽しそうですよ、顔」

多分。

……いや、確実に受け継がれたんだろう。

なんてったって、僕の横には、

「ん? なんだ博士、じつと見つめて。これが食べたいのか? しかしこれは美夏のチョコバナナだがまあでも仕方ないちよつとぐらいは」

「いや、頬にチョコ付いてるから」

ちゃんと、親友ロボットの美夏が堂々と笑っているんだから。

第十三話

「僕と美夏と日々と今後の話。」

「人類とロボットが、ともに歩める世界を創造することだ！」

そのセリフを聞いてから、つまり僕が美夏たちと再会してから、数日が過ぎた。

「いってきまーす」

「行ってらっしゃい！」

「気を付けてね、春日」

「ういーす」

まあ、何か変わったかと聞かれればアイシアが返ってきたときと同じく、大きくは変わってはいないんだけど。

少しだけ、公園と研究所に行くことが多くなった、ぐらいの変化だ。

というわけで、今日も今日とて公園へ。

チョコバナナを買いに行く。

「おやつさん、1本！」

「あいよ。 なっちゃんならもう来て噴水のほうへ行っただぜ」

「ありがと！ また今度ー！」

「おう、気を付けてな！」

いつも通りチョコバナナを買ってすててー、と公園の中心部でもある噴水のほうに向かう。

そこには噴水の縁に腰かけて座るホルスタイン帽子の少女、というか、美夏がいた。

「よ」

「おっす」

そばに腰かけて軽い挨拶を交わす。

まあ、いつも通りのあいさつだ。

「なあ、そういえば次のロボットを産み出そうとしてるって聞いたんだけど……」

「うむ、確かにその案はある。コードネームμ（ミュー）に次ぐ、新たなロボット、μ（クシー）。まあ構想段階だから何とも言えないな」

「はー……頑張るなあ、春後輩もお前も沢井博士も。オーバーワークで倒れたりすんなよ？」

「ははは、それは大丈夫だ。皆休憩だけはちゃんと取るようにはしているからな」

「へえ……そーなのか。うんうん、いいことだ」

「まったく。昔、博士がぶっ倒れたから皆ちゃんと休憩だけはあるようになったんだぞ？ その博士に心配されるとは心外だ」

「はは、わるいわるい」

「返事だけは相変わらずだな……」

「美夏のマネ。上手くない？」

「自分のマネをされて上手いか下手か聞かれても。そうだなあ、美夏も所長のマネでもしてみるか」

ちなみに『所長』とは、ただ今本島に無期出張している天枷美春あまかせ みはること春後輩のことである。

「『バナナは素晴らしいんですよ！？ 栄養価にも優れ、ダイエット

トにも最適！ スイーツにもなる史上最強のフルーツです！！」
「ぶほっ」

似てる。

もう突っ込みどころが存在しないレベルで似てる。

「え、おい美夏。 僕お前に録音再生機能とかつけた覚えはないんだけど」

「ついているわけないだろう。 今のは美夏の実力だ、じ、つ、り、よ、く！」

「いや、どっかに入っているだろ絶対。 もはや本人じゃないか」

「ふう……これを聞いた人は皆そう言うんですよ」

「誰だお前」

「全く、困ったものです。 これだから博士は……」

「……………」

気づいた。

今、美夏は口を動かしてない！

「……………シーズ」

「はい、なんでしょう？」

「やっぱりお前か！！ 道理でおかしいと思ったよ！」

「ばれてしまいました。 どうしましょうか、ナツ」

「いや、どうしましょうかと言われても……美夏はただ四季姉さんに話を合わせただけで特に何もしていないじゃないか」

「あらまあうふふ」

「あらまあって……どうした、シーズ。 変なものでも食ったか？」

「一応私はロボットなんですけど……。 新たなキャラづけでもしてみようと思ひまして」

「無駄だからやめてくれ」

そうですか、それは残念です。

そう全然残念そうには見えない顔で笑うシーズ（ちなみに、“もう動かない”と言われたHM-A05の体を流用したμの体に入っている）。

「ふふふ、では用事の途中ですので」

「ああ、うん、またな……」

ぺこり、ときれいな礼をして去っていくシーズ。

残される僕ら二人。

「……………なにがしたかったんだろう、あいつ」

「……………さあ。お披露目でもしたかったんじゃないか、新しいボディの」

よくわからない空気を誤魔化すために、もぐ、とチョコバナナにかぶりついたのはほとんど同時だった。



それから僕はすぐに用事でそこを離れ、その後、所用をこなしたあ

とに再び美夏と合流した。

今日は美夏が休みなので、さくらと由姫さんに連絡を取って晩御飯を一緒に食べることにしたからだ。

「おかえり、美夏ちゃんとはーる♪」

「こんばんは、さくらさん」

「ただいま、さくら」

玄関口で待っていたさくらと挨拶を交わす。

やけにゴキゲンなのは気のせいではないだろう。

昔から、美夏とさくらは仲が良かったのだ、出会ってから数分で意気投合できるくらいには。

多分馬鹿っぽいけど実は頭がいいところとかがあったのかもしれない、なんて考察してみるがまあそれは割とどうでもいい。

「ごはん、ごはん」

「あーこらやめなさい。そわそわしない、わくわく……はしてもいいけど。落ち着きを持てっの」

「おいしいご飯が待っているのにそんなこと、できるわけないだろう！」

言うことを聞かない美夏がさくらを追ってリビングへ入って行く。

「……………はあ。ま、いーけどさー」

ため息を一つつき、僕もその背中を追いかけることにしたのだった。

ちなみに。

食事時に美夏を僕の親友だと紹介してから音姫ちゃん機嫌が悪くなっていたのは気のせいだと思いたい。



また違う日。

のんびりだらりと過ごす日々の中、天枷さんちの美夏ちゃんは僕に爆弾を投下した。

以下、会話ログとシーズ視点。

似たような恰好をした少年と少女——桜内春日と天枷美夏——は、マグカップ片手に談笑していた。

それはとても他愛のない、どこどこに猫がいてちよつとかわいがつてやった、とか、新発売のお菓子がおいしかった、とか、やっぱりバナナの産地はフィリピンじゃないとだめだ、とか、ふざけるなど

う考えてもコスタリア産だろう、とか。
そんな会話であった。

——その、一言がなければ。

「なあ、博士」

ふと、何かを思い出したかのように美夏は言う。
のんびりしている証拠だろう、語尾は伸びきっていた。

「んー、なにー？」

それに答える春日、もといハル博士。
彼の語尾も美夏と同じように伸びきっている。

その言葉を聞いた美夏は、先ほどと同じような様子で彼に訊ねた。

「言いたかったことがあるんだがー、というか気になっていたことがあるんだがー」

その言葉に、おざなりに返すハル博士。

「んー？　言ってみー？」

そして、美夏は彼が想像していなかった衝撃を次の一言で彼に与えることになる。

「若返ったのはいいけど、学校はどうするんだ？」

きょとん、と。

まさにその言葉が合うような顔になっているハル博士。

「————え？」

思わず漏れた、そんな声に美夏は言葉を続ける。

「だから、学校。　ギムキョーイク。　さすがに学校は行かなきゃ駄目だろう」

「え、いや、僕もう本校生だし」

うろたえた様子で答えるハル博士。
おそらくそこまで頭が回っていなかったんだろう。

畳み掛けるように美夏はさらに言う。

「昔はな。今は関係ないだろ？」

「や、でも」

「いや、でも、でも、でもない。さくらさんはあんまり言わなそうだから美夏が強く言っておこう」

強い意志を感じさせる目で、美夏は言った。

「————学校、行ってこい」

「……………はい」

以上。

というわけで、3年後に僕は小学校に通うことになった。

……正直、憂鬱でたまらない。

僕と美夏と日々と今後の話。(後書き)

学校に入った。

入った、けれど、やっぱりこれはだめだ。

周りが騒がしくて耐えられない。

そんな中、一人の女の子が――

次回。

「僕と歌と少女と学校。」

……え、白河？

……マジですか？

今回短すぎて自分で驚いた。

レポートエ……。

ちなみに、予定していること。

>学生√

おとなしく学生として過ごしていく√。

学園のアイドルとか、後輩とか、クラスの人と仲良くなれるかもしれません。

ただし、行動範囲がクラス、または風見学園付属校が行動の中心となるため、学園長や生徒会長など、上級生や偉い人とは会い辛くなるかもしれません。

>先生√

はっちゃけた春日は、大検を取得し海外へ。

飛び級を重ねてこちらへ帰還すると、唐突にこんなことを言い出す。

「あ、僕教師になるから」

学園内の幅広い行動が可能になるため、学園長や生徒会長などと仲が深まりそうな予感がします。

ただし、普通の立場の学園生とはそこまで深い仲にはなれなさそうです。

とか考えてみた。

というか、アンケート取りたくなった。

というわけで、アンケート。

>教師√……？

>学生√……？

先に書いてほしいほうを後ろの数字を書いて、書いてほしいヒロインの名前を書いてください。

あて先は感想だろうが作者へのメッセだろーが問題はありません。

誤字、脱字、矛盾点、気になること、ツツコミなどあれば感想まで。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

僕と歌と少女と学校。(前書き)

実は歌と学校はあんまり関係なかったりする。
更新早かった。

しかし昔のななかのキャラがつかめずに挫折した。
とりあえず、そんなこんなで第14話、はっじまってるよー。

僕と歌と少女と学校。

さて。

歌についての話をしよう。

僕を精神を構成する大きな要素。
それは、大きく三つに分かれる。

1、魔法。

2、ロボット工学。

そして3、歌。

僕は辛いこと、苦しいことがあるといつも歌っていた。
不思議と歌っている間は発作も起こらなかったから、何もかも忘れて歌い続けたことを憶えている。

歌詞の内容を想像し。

キャラクターを当て嵌め。

気持ちを込め。

そして、歌う。

ことりには覚^みられてよく笑われていたけど、想像の中なら自分
なりにでもなれたし何でもできた。
あまり動けない代わりに、想像力だけはあったんだ。

それしかない、と言う僕を、ことりはよく叱っていたっけ。

まあ、今回の話に歌は全く関係ないんだけどね。

と、いうわけで、今回は現代こうちに来て初めて出会った『白河』さんについてのお話。

ついでに、始まってしまった学校の話でもある。

では、始まり始まり。

第十四話

「僕と歌と少女と学校。」

僕がさくらの家に居候してはや3年。
つまり現代に来て3年が過ぎた。

時間の経過が早い？
それは許してほしい。
僕もいろいろ大変だったんだから。

まあ、あれから変わったことといえば、

・音姫ちゃんの部屋に僕の部屋直通の無線ホットラインが置かれたこと（魔法で通信するので電池いらす）。

・由姫さんが海外へ単身赴任している夫の元へ。

・アイシアも海外へ（ただし向こうに一年行って、次の一年はこっちで過ごす、というスタイルをとっている）。

・義之、たらしの才能を発揮しだす。

・月島小恋ちゃんつきしま こいが義之の友人に。

・美夏が論文を発表、世間的に騒がれ、ロボットの地位上昇にまた一歩前進。

次、一番重要。

・学校、通い始めてから2か月経ちました。

「桜内春日くん？」

「はい」

「この問題、わかる？」

「飴が1＋1＋2で4個です」

「正解。 飴1個と飴1個と飴2個を合わせたら4個になるよね」

誰か。

誰か、助けてください。

この簡単すぎる問題を答えて褒められる空気の中、簡単すぎる授業を受け、眠ってはいけない現実から。

今なら通知表A―A―『A』をとることぐらい簡単に思えて仕方ない。

「じゃあ次の問題は……白河ななかさん」

「わかんない！　すずきくん、こたえおしえて？」

「2だよ」

「2です！」

「正解。　だけど次は自分で解くように」

「ええー、やだあー」

周りの子供たちは騒がしく問題を教えあったり、席を立って動いたりしている。

あーあー。

先生怒るよー？

まあ、入学したてだからそんなことはないだろうけど。

教師が小等部を受け持ったときに大変なのは、椅子に座らせておくことらしい。

いや、本当かどうか知らないけど。

教師になろうと頑張ってるまひるっちからメールで聞いただけだし（ちなみに本校に進学した）。

全く関係ないけど、ミキミキもテストで死にそうって嘆いていた（受験するのに必要らしい）。

まあ、今は会おうと思えばすぐ会える距離にいる二人である。

あ、そうそう。

1回だけさくらの授業受けたけど、あいつ入学したての小等部生を何か勘違いしてない？

入学したての子供に掛け算教えてたんだけど。

「わかる人だけにわかってしまうさくらがくえんちよーのとくべつこうざ♪」とか何とか。

絶対僕やむかしのさくらぐらいにしかわかんないって。

または頭脳がちょっとすごすぎる人。

「やっておいて損はないよ♪」っていつてなんで二乗の話まで出てきてるんだよ。

後ろで聞いていた先生が少し呆れてたじゃないか。

他の生徒は楽しんでいたみたいだけど。

ちなみに、僕のクラスの授業にそれからさくらが出てくることはなかった、ということを追記しておく。

—○—

授業も終わり、昼食も終了した。

昼休みという退屈な時間がまた始まる。

というか、退屈じゃない時間ってあったっけ？

「ふあああ……」

というわけで、いつものように校庭を一周しつつあくびを一つ。

やっぱり暇だ。

こんな時は屋上に行くか本校のほうに遊びに行くか歌うかに限る。

時間見て……本校は無理、時間に間に合わない。

屋上は混んでるみたいだし、うん、歌か。

曲は——「あんたむかつくのよ!」——む?

この声は……クラスの女子の一人かな?

「じゃあね! いこ、みんな」

「うん」

「ばいばーい」

「……………」

ものすごく満足げな表情で子分二人を連れて帰っていく、ええと……高飛車さん(仮)。

わざわざ誰かを体育館裏に呼び出してなんか一方的に言って帰るよ
うだ。

そして、そこにいるのは、

「白河さん」

「……………え?」

白河ななかという少女だった。



クラスメイトの名前もともに覚えていない（隣の席の人の名前もだ。確か……雪原さん？）僕が、彼女の名前を覚えていたのは彼女が『白河』だったからだ。
その苗字だけは忘れることができないインパクトのようなものがあった。

僕に電流走る。

まあ、そんなネタを今言っているのは僕に全く余裕がないからです。

「……………」
「……………」

先ほど、つまり体育館裏で涙を食いしばっていた白河さんはぐずぐずと少し泣き、すぐに泣き止んだ。
しかし、空気が重い。

そんな空気を脱するべく、僕は担任に連絡、早退の手続きを取って桜公園まで彼女を連れだしたのだ。

うん、少し前の僕に言おう。

なぜ連れ出したし。

「……………」

「……………」

あまりのいたたまれなさにチョコバナナを一口かじる。

おいしい。

だが空気は変わらない。

「……………」

「……食べれば？　おいしいけど」

彼女の手にも握られているチョコバナナをさして僕は言う。
が。

「いない」

「さいで」

……………。

まどろっこしい。

ああもういい、地雷踏みに行く気持ちで行く。

「何があったの？」

「……………」

「言いたくない？」

「……………」

頷く白河さん。

それを見て話を続ける。

「じゃあどうしたい？」

「……………きらわれたくない」

「で、どうするの？」

「みんなのこころがみえるようになりたい」

「それは……………」

———ことり。

「辛いこと、だよ？」

「……………え？」

「人の心が見えるっていうのは、とっても楽で、平和で。……でも辛くて、怖い。人の心が見えるっていうのはそういうこと」

「……………」

「聞きたくない声も聞こえてしまうかもしれない。それでもいい

の？」

僕の問いかけに白河さんは眉をしかめ、返事を返す。

「……………わかんない」

「……………そりゃ、そうだよね」

わかったら凄い。

人の心の中にある悪意をこの年齢で知っていたらどんな奴だ、と説いてやりたい。

ふう、と、ため息を一つ。

能力を手に入れば、小さい頃や付属時代のことがそうだったように、彼女もきつと悩むことになるだろう。

手に入れるのを妨害しようにも、『願いを叶える枯れない桜の伝説』はすでに、女子の間で出回っているようだし。

つまり、この娘が望む限り妨害不可。

なら放っておけばいいんだけど……。

「確かに僕の知ったこっちゃない、しかし放っておけない、か」

「え？」

「こっちの話」

まあ、放っておくなんてお人好しな僕には無理なわけで。

今までのことと同じように接していれば問題ないはずだ。

読心術者には、慣れているから。

……………ことり、か。

「うん、歌うか」

「え？」

懐かしい気持ちを胸に、息を吐き出して、吸って、1フレーズ目を歌いだす。

白川小鳥1st アルバム、「桜の島」シークレットトラック。

作曲／K K T S J N、歌詞／H a L。

曲名、『まぶしくてみえない』。

歌いだして幻視するのはことりとさくらと僕と純一と音夢、5人が掌を重ね、その上に桜の花が乗っている思い出。

互いが互いが必要として、僕らは互いで支えあう。

当たり前のように、そうするのが当然の如く。
見えなくても、わかっていた、みんな。
皆となら、不可能なんてないと思ってた。

サビを、そんな日々（ユメ）をこめて、歌う。

まぶしくて、みえないけど、感じてる。

そんな僕の大切を。

そうして僕が歌い終わった時には、白河さんは目を丸くしていた。

……何してんだ僕。唐突に歌いだすとか。
なんかいきなり恥ずかしくなってきた。

「さあて、帰ろうかな!!」

いたたまれない気持ちを抱いた僕はちょっと立ち上がりシュバツと
手を挙げる。

「え、あ、」

「じゃ! 辛いときは歌ったり、僕に言うといいさ、チョコバナナ

くらい奢ってあげるから！」

何を口走ってるんだかわからないまま高速で口が回る回る。

「……………あ、」

「じゃねー！」

と、いうわけで、僕はそのまま一気に話を切り上げ、何かを言いかけた白河さんを放置して、勢いよく芳乃家へ帰宅したのだった。

つまり、

「……………げんきづけてくれて、ありが、とう」

その言葉は、風に撒かれて空に消えた、ということでもあった。

—○—

後日談。

やたら他人へのスキんシップが増えた白河さんに敵意の視線が増えたり減ったり、僕が手回ししたりしなかったりの毎日が始まった。まあ、敵視する気持ちもわかるけど違うものに回そう、とか、わざ

わざ女子のグループに僕が混ざりに行って白河さんを誘ってみたいだとか。

少々の手回し、もといお節介で、彼女は女子の友人も増えているよ
うだ。

……あの日、無断早退をしてこっぴどく音姫ちゃんに怒られ、毎日
毎日の登下校を一緒にしている僕は、偶然今日の登校時間が遅かつ
たさくらと話をしていた。

「あ、そうださくら、ちょっといい？」

「んにゃ？」

シャキッとした顔なのに猫語を使うのは抜けてないのか。
さくらは首をかしげて質問を待つ。

「ことりってさ、歌手してるわけじゃなか」

「うん」

こくり、と一つ。

「結婚は？」

「してないよー？」

あ、そうなんだ。

………少しほっとしている自分がいるのはなぜだろう。

「なんで？」

「白河さんって苗字の女の子がいるんだけどあれは？」

「従妹の娘さん、Niece、つまり姪だね。名前は確か……ななちゃんだったっけ？」

「あ、そうそうそんな感じの名前だった。クラスメイトなんだけど」

「へえ、クラス一緒なんだ。ことりちゃんも気にかけてたよ」

子供好きだからなあ、ことり。

もし歌手じゃなかったら保母でもやっていたんじゃないかな？

歌の上手い、美人な保母さん。

……うわ、超似合ってる。

まあそれは置いておいて爆弾投下。

「で、彼女人の心がわかるみたいでさ」

「ふー………って、え!？」

目を見開いて狼狽するさくら（ちなみに、全く話に参加していない音姫ちゃんは義之と小恋ちゃんの様子見をしている。聞かせたくないってのも少しあるけど）。

説明を続ける。

「ことりとまったく同じ、ってわけではないみたいだけどね。相手に接触すると読めるみたい」

相手に接触しないと読めないっていうのは不便だ。

でも読みたくななくても読んでしまうよりよっぽどマシ、なのかもしれない。

「その原因って――」

「能力のほうなら十中八九、枯れない桜だと思う。願いは多分、他人への不安とかじゃない？ 悩んでたみたいだし、他人に対して」

「……やっぱり、昔みたいに純粋な願いに反応しちゃうんだ」

「ま、ことと同じように周りの子供たちとは壁作らないように、こじらせないように僕はしてるから」

それを聞くとさくらは大きなため息をついて愚痴る。

「……ふう。このお人好し」

「ん、分かってる」

僕はその言葉に軽い返事をし、ぴよんと前に大股で飛ぶ。そんな僕の背中からかかる声。

「頑張るのはいいけど、はるが無理しないでね？」

若干の不安が含まれたその言葉に、僕は振り返ると、

「するかってーの。僕は僕のしたいようにするだけだからな、にはは」

満面の笑みでそれに答えるのであった。

本音。
け。

学校での暇つぶし、
もとい、やりがいのあること、
みーっ

僕と歌と少女と学校。(後書き)

ななか、ヒロインフラグ1。

こんなのしか書けなくてごめんなさい。

年齢が上がれば、きっともっとマシに……っ！

次回。

耐え切れない。

白河さんこと、ななかはもう一人でもやっていけそうだ。

← 暇。

← あまりにも暇。

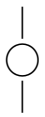
← そうだ、飛び級しよう。

← よろしい、ならば海外だ。

← 風見学園よ、私は(教師となって)帰ってきた！

教師✓

「僕と生徒と付属と風見学園。」



耐えた。

ふははははは、耐えた、耐えきったッ！

辛く退屈な日々を終え、義之らと進学した風見学園付属校。
これから騒がしい日々を始められそうだ！

学生√

「僕と義之と問題児と友人達。」

—○—

早いけど内容がすっかすかなものが出来上がった。
これ以上は限界なのか？

いや、そんなことはないはず。

あ、アンケート締め切りは7/20。
ただ今互いに競っておりますのでお早めに。

ついでに次回の短編アンケートも希望とります。

幼少期限定の、

？音姫ちゃんとの無線騒動

？白河さんとの試練の日々（笑）

？隣の席の人、雪村さんを僕が憶えるまで。 または僕を覚えるま
で。

？さくらとの外出with義之。

？まひるっちとミキミキとのテスト勉強。

？ただの日常。

のどれかの番号を書いて、感想かメッセージに送ってくださいませ。

誤字、脱字、矛盾、気になること、その他ありましたら感想まで。

次回は短編。

アンケート結果によって変わることになるでしょう。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

訂正。

転載で削除されたくないなので歌詞の部分を消去しました。

番外3「隣の席の雪村さん。」（前書き）

アンケート終了しました。

短編は今回のタイトルから察してください。

各ルートですが、集計にメッセで来た分を＋しましたので、教師√より先に学生ルートを書くことになりました。

ではどうぞ！

番外3「隣の席の雪村さん。」

話をしよう。

僕が付属小等部にいたころの話を。

今から見れば少し遠いぐらいの話である。
はくせつげっか

白雪月花が結成される前の、僕と雪村杏さんとの関係。
ゆきむらあんず

僕が付属小等部の前半にやった主な事といえば、白河ななかさんの周囲の人へのフォロー、そして、腐れ縁のように隣の席になり続けた雪村杏さんに勉強を教えていたことだろう。

ななかさん………さん付けが面倒くさいから呼び捨てにするが、ななかのフォローは比較的容易にいった……はずだ。

まあ、そっちの苦労は少なくはなかった、と思う。

でも、どちらかといえば、杏さんに勉強を教えることのほうが労力が要った。

頭は悪くないんだけど、どうしても覚えが悪いから時間がかかる。正確には、“覚えるのが遅いけどきちんと理解はしてくれるので、僕も楽しくなって余計な知識を教え込んだりしている”が正しいんだけど。

で、実は。

「何を笑っているの？ そんなに私と一緒に部屋のにいるのが嬉しいのかしら」

「ひんそーな体でよく言うね、杏さんは」

「あら、私みたいなないちちでも需要があるのよ。そう、ろりいのが好きなハルの心にもストライク」

「はいはい、わかったから宿題こなそうね」

その関係は今でも続いていたりする。

今回話すのは、そんな今の僕と、いきなり記憶力が上がった下があったりする杏さんの少し昔のお話。

番外3。

「隣の席の雪村さん。」

自宅のリビング、もとい芳乃家のこたつに入って勉強している師走のある日のことだ。

冬休みに突入してから、やることもないので雪村杏こと、杏さんを呼び、学校の宿題を終わらせにかか……いや、終わらせて、すぐに違う勉強を始めたんだった。

まあ、そんな宿題はさておき、難しい問題（本校レベル）の数学を教えることになった。

で、先ほどの会話に戻る。

……多分飽きて来たんだろう、勉強に。

手は動いてるんだけど、頭は別のことを考えてる、みたいな。

そういえば、手はしっかり動かしてるのに会話がちゃんとできなくてうらやましいって純一が昔言ってたなあ。

「いいのかしら？ 目の前にこんな素敵ばでいがあるというのに」

「そーなのかー。 よし、次の問題だけど——」

「さすがのスルースキル。 さすが私の相棒ね」

「いつから相棒になったっけ？」

「前世」

「そーなのかー。 じゃ、次の問題だけど——」

「さすがのスルースキル。 さすが私の相棒ね」

「いつまで相棒でいるんだっけ？」

「輪廻の果てまで」

「そーなのかー。 さて、次の問題だけど——」

「さすがの」

「無限ループって怖くない？」

「そうね。まさかそれに気付くなんて、さすが私の相棒ね」

「どこまで相棒としてついていけばいいんだっけ？」

「この世の果てまで」

「そーなのかー。　んと、次の問題ね」

「酷いわ。　流されるなんて私泣いてしまうかも」

「そーなのかー」

僕がじゃんじゃん問題を指定して、それを無限ループ気味な会話をしつつ捌く杏さん。
ぶっちゃんけ言おう。

この光景、異常である。

後日、義之に「あの時ハルと杏が、すげー怪しげなコントでもしてるのかと思った」と言われた。

閑話休題。

はてさて、問題を指定して解かせているわけですが……。

「ほら、終わったわ。　次の問題をよこしなさい」

「そうですか記憶力凄いですね」

「それほどでもないわ」

「雪村流暗記術は使うなって言ったじゃん！」

「使うんじゃないかって使ってしまうのが私なの。　ふふふ……」

そう、あっさり解いてくるんだよね、杏さん。

雪村流暗記術とかいう怪しげなものを使って全部の過程を記憶したりしてさ。

それじゃ意味ないってのに。

そんなことを考えていると、杏さんが僕が出した問題の一つに目を留めた。

「……あら。この問題、どこかで見たことあるわ」

「え、そだっけ？」

「ええ、確か……初めて難しい問題を教えてもらった時の問題のような……」

「あー、じゃあまだ『雪村さん』だった頃かあ。確かにそれぐらいの時に教えた問題かも」

「そうね。とはいっても懐かしい、というほど時間は経っていない気がするのだけど？」

勉強を教え始めた頃……つまり、僕が付属小等部に所属していたころ。

その時の記憶が、ゆっくりと思い出される。

それは学校が始まって4度目のテストが終わり、テストが返却された日のことだった。

その日の僕は、朝から色々あったせいでものすごく気が立っていた。そう、いつもなら流すようなことも、ついカッとなってしまうぐらいに。

そして、テスト返却が終わり、帰宅する前の帰りの会。

そこで一つの悲劇、もといからかいが起こる。

「おいおいゆきむら！ また0てんかよ、だっせえー！！」
「……………」

隣の席の雪、ええと、雪村さんがまた0点を取ったようだ。僕には全く関係ないのでスルー。

返ってきた100の数字を適当に折り畳んでバッグに放り込む（バッグだ。ランドセルでは断じてない）。

「おれなんて80てんだぜ？　すげーだろ！？」
「……………」

騒がしい。

クラスの男子の一人がちよっかいをかけているようだ。

というか周りの奴らの視線が冷め切っていることに気づけ。

ただ自慢したいだけか、お前は。

泣きそうになってるじゃんか、雪、ええと……雪、なんとかさん。

いや、まあ、小等部だったらそんなもんか。

「まじだっせえー！ はんぶんもとれないなんてしんじれられねー
！」

………というか、あんまりにも五月蠅くて本気で怒りそうなん
だけど。

限界を感じる。

破裂する前にここから――――

「……………ぐすっ」

僕は、前の席に座るななかの肩を叩き、振り返ったその頬に指を沈ませる。

「（ななか。 ごめん、この後のフォロー頼んだ。 ちょっと帰る）」
「……………うん、わかった！」

がたん、席を立ち上がり隣の席の雪なんとかさんを立ち上がらせる。荷物を持たせ、手を引っ張り教室の外へ。

「おい、なにゆきむらをつれていこうとしてんだよ！」

……………面倒くさあ。

って、そうそう苗字、雪村さんだった。

「さっきっから同じ話しかしてないみたいだからつい。 雪村さんに用事もあったから」

「はあ？ さくらい、おまえなにいつて——」

「話は終わりだね。 じゃ、これで」

「……………え？」

立ちふさがった体を押しのけて教室を出ようとする。露骨に立ちふさがる少年A。 しつこい。

「さてよ！」

「やだ。 じゃあまた明日」

「おい、ゆきむら！ にげるのか！？」

「……………」

「無視無視。 あーゆーのは無視に限る」

そもそも何、逃げるって。

子供の理論はわからない。

……あ、僕も今子供だった。

なんて考えは、次の言葉で霧散した。

「はっ、そんなんじゃおまえのとーちゃんもかーちゃんもろくなもんじゃないだろ！」

おい。

いきなり家族の中傷とか、Aの言うことがむかつき過ぎる。

本当に耐え切れなくなりそうだ。

……だけど、雪村さんは泣き出しそうな表情のまま固まっている。

勘弁してくれ。

「……………」

「……おい」

声をかけて止めようとすると、今度は、

「きつとじーちゃんもばーちゃんもろくでもないやつなんだろうな
」

なんて、ふざけたことをぬかしやがった。

「お前、言っていることと——」

「おばあちゃんをばかにしないでっ！」

雪村さんが、叫んだ。

……………沈黙が走る。

今の言葉が琴線に触れたのか、今までとは違う光を目に宿らせて、
雪村さんは叫んだ。

そして、ガキの煽りは加速する。

「は、ははは！ やーいやーい、おまえのばあちゃんをばかにされ
たくなかったらテスト50点ぐらいは1かいでとってみろよ！」

「とるもん！」

「むりだね！」

「とる！」

「むり！ おまえひとりなんかじゃぜーったいむりだね！ ぼくみ
たいにかていきょうしのおねえさんがついてなきゃな！」

「おしえてくれるひとをさがすもん！」

「だれもばかなおまえになんか————」

ひまつぶしはっけん
良い事聞いた。

すちゃ、と手を挙げて宣言。

「んじゃ、僕が教えよう」

「——え？ あ……あの、」

「ぷっ、あはははは！ いいぜ、それで！ わすれんぼのゆきむら
がぼくにかなうはずないけどな！」

勝ち誇る男子と戸惑う雪村さんをちらりと横目で見てぐい、と手を
引っ張る（ちなみにさっき一回離した）。

「あの、ちょっと」

「いいから黙ってついてくる。 さくらが学園長室にいるはずだか
ら……うん、行くか」

「え、あの、」

「ついてこい」

「……はい」

沸騰気味の頭を冷やしつつ歩き出す。

「さんすうのテストだからな！ おぼえとけよ！」

最後に。

そんな言葉が、僕らの背中に投げかけられたのだった。



「それで学園長室に乗り込んだんだっけか」

「それだけは覚えているわ。おぼあちゃんに対して酷い事を言われたこと、そしてハルに連れ出されたこと。……まあ、名前どころか苗字もわかってなかったけど」

「知ってる」

「そう、それはなによりね」

わざわざ名前を覚えてもらうために魔法まで使ったんだ、忘れるはずがない。

「――で、私たちの勉強会が始まって」

「最初の算数のテストを受けて」
「大負けした」

—○—

すっかり僕らの勉強の定番になった図書館へとやってきた。
隣には、散々笑われて涙目になった雪村さん。

まあ、10日程度じゃさすがに40越えはしても50点には届かなかった。

「……………うーん、理解力はあるのに記憶することができないのかなあ」

「……………ぐずっ」

「よしよし、頑張った頑張った。40点は取れてるんだ、一歩前進だね」

「で、でもっ、さくらいくんがっ、てっ、てっだって、くっ、くれたっ、のにっ」

「成長してるんだからいいの。前向きに、前向きに。ほら、お菓子食べな」

「変換／1kcal||こしあん大福」

頭を撫でつつあたかも鞆に入っていたかのように大福を取り出す。
手渡してからノートをカバンから取り出した。

「ひぐ、うっぐ、あむ」

「それにさ。……まだチャンスはあるよ？」

「……むえ？」

「あいつ何も条件を付けてこなかったから、再戦したっていいじゃないか」

頬に大福をつめている雪村さんに、にやりと笑って告げる。

「……？」

「ああうん、ごめん、忘れてるか。算数のテストとは言ったけど

“いつの”とは言っていないから」

「そうなの？」

「うん。ま、あっちは多分最初のだと思ってただろうから、再戦は1回しか無理だろうけどね」

ふふふ、揚げ足取りなら負けはせぬ。

今まで生きてきた分＋こっちで生きてきた分を合わせれば君らの約2倍位は人生経験があるのだよ、にはははは！

「……………さくらいくん」

なんて考えていて、さらに慣れない苗字で呼ばれたせいかな少し反応が遅れた。

そちらに顔を向けると、何か決意したような表情の雪村さん。

「……………ん、なに？」

「あの、その……もういっかいだけ、たすけて、くれ、ない？」

「……………いつか僕が困ったとき、雪村さんが助けてくれるなら」

持ちつ持たれつギブアンドテイク。
それが“ともだち” ってものだと思うから。

「うん……あの………ありがとう」
「ん、任せとけ」

そうして僕らはまた勉強を始めるのだった。



「で、テストがいつあるか先生に聞いて、僕が彼を挑発した、と」
「まあ、テストなんて私にかかれば楽勝だったわね」
「雪村流暗記術、凄いやなあ……。その物事に集中してないとい
けないのがたまーに傷だけど」

「ふふふ、頼まれたって教えないわよ」
「誰が聞くか。……初めて会ったときは人間不信気味だったのに、
よくここまで軽口が叩けるようになったなあ」

「彼のおかげ、というより、彼のせい、とでも言えばいいのかしら。
頭に血が上れば人間不信なんて忘れるのよ」

「なもんか。 あ、それ最後の一問ね」

「———あら、これは見たことないわね。 ええと、ここがこう
だから……」

—○—

運命の日。

算数のテストが返却された。

僕のプリントには100の数字。

そして——

「……………」

「100点、だね」

「……………うん」

——雪村さんの手の中にある、テスト用紙に映る数字は、100。

「にはは」

「あは、」

僕らは顔を見合わせ。

「よくやったー!!」

「あはは、すごいわ、ほんとうにとれちゃった」

諸手を上げて喜んだ。

素晴らしい、としか言いようがない。

なんてったって、昨日までの努力を雪村さんは実らせたのだ。

「な、うそだ、こんなの！」

「なにがうそなんだよ……」

「そうそう、そろそろまとめようぜー、ゆきむらちゃんががんばってたしさー」

「しんじられない！　ぼくが70てんしかとれないのにゆきむらが100！？　ぜったいずるしただろ！」

「うわあ、こいつきいてねえ」

「ごめんね、ゆきむらちゃん。こいつへんにえらぶってるからさー、こんどあやらせるからそれまできにしないでやってくれー」

「え、あ……うん」

「すごいね、あんずちゃん！　なにに、これどうやったのぉしえて！」

「ええとね、これは……」

なんか一気に友達ができそうな雰囲気になってるし。

付属小等部って素晴らしい。

あとななか、おまえの点数も実は酷かったんだな、気づかなかった。

今度はななかの勉強につきあわなきゃならないかもしれない。

とか考えつつ新しく買った本を読んでいると、目の前にはななかを連れた雪村さんが。

「さくらいくん、あの、あ」

「あー、あんずちゃん。ハルのことはハルってよばなきゃ」

「え？」

「ん、僕の名前、春の日って書くから。あだ名みたいなものかな」

「ともだちならそうよんだほうがいいよ！」

「ん、友達ならとーぜんかもな。ね、ななか？」

「うん、のとーり！」

「にはは、というわけで。これからよろしく、杏ちゃん」

「……うん、よろしく。あと——」

「ありがとう、ハル。てつだってくれて、とってもうれしかった」

そう、杏ちゃんは、輝かしい笑顔で言ったのだった。



最後の問題を解き終わり、ぱたんと本を閉じる。

伸びをする杏ちゃん……杏さんを傍目に僕はお茶の準備を始めた。

「お茶請け何がいいー？」

「甘いものがいいわ」

「りょーかい」

かちやかちやと音を鳴らし、ティーセットを取り出す。
本日はアールグレイなり。

「創造／5kcalⅡクッキー×25」

お皿にクッキーも載せ、準備完了。

「冬だねえ」

「冬ね」

「あったかいねえ」

「そうね」

今は寒い冬。

宿題も終わって、僕は炬燵に入って紅茶を飲みつつ、ほっと溜息をつくのだった。

番外3「隣の席の雪村さん。」（後書き）

最近自分の文に納得のいかないことが多い気がするのではない作者です。

これ、面白くかけて……ますか？

あと、歌詞の規制の関係でこれからは一文ちよろつと出したりするぐらいになると思います。

↓

桜の木が、変に感じる。

違和感があるのがわかるけど、それをどうしようか決めてない。

さくらに相談しようか、それとも僕が枯らしに……。

次回。

「分岐点…さくらのあるせかい」

2日には投稿したいな。

誤字脱字矛盾点その他ありましたら感想かメッセージまで。

夏休みに入りましたので一応言っておきますが、誹謗中傷はやめてください。

指摘なら歓迎ですが、心がおそらく折れますので。

では、ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

分岐点「さくらのあるせかい」(前書き)

ついに分岐点を短いながら更新。

ようし、頑張るかな。

分岐点「さくらのあるせかい」

「彼は何を願ったのか。」

それはわからずじまいになった。

枯れない桜は咲き誇る。

未だ、枯れずに。」

——はつねじまのさくらのでんせつ、一節より——

分岐点。

「さくらのあるせかい。」

僕がそれを思い出したのは、偶然だった。

それは枯れない桜のこと。

半分が黒く染まった花びら。

まるで昔の音夢が吐き出した真紅の花びらの色を黒く染めたような、
そんな色の花を散らした桜。

それを唐突に思い出した。

「……………どうしよう、かな」

？…何か嫌な予感がする。

桜をどうにかしに行こう。

? ..さくらに相談、かな。それからでも遅くない。

? ..そんなことより約束があつたはずだ。遅刻寸前じゃないっけ？

分岐点「さくらのあるせかい」(後書き)

? B A D E N D 1

? 教師√

? 学生√

それぞれのやつであとがきを。

では、次をどうぞ。

B a d E n d 1 「そしてだれかいなくなった」 (前書き)

タイトルで察してください。

これを書くのが一番長かった……………。

B a d E n d 1 「そしてだれがいなくなった」

……原因はわからないけど、どうにかしに行こうか。
音夢みたいな娘を増やさないためにも。

「さて、じゃあ善は急げってね」

善かはわからないんだけど。



まあ、こっそり行くために夜になったんだけど。
はてさて、やってきました枯れない桜。

月に照らされて怪しく光る桜を見上げる。

この時代に來た時も、雪を除けばこんな風景だったっけ。

「どうかしよう、とは言ったものの……」

何が悪いのか全く分からないからなあ……。
とりあえず調べてみようか、RPGよろしく。

「よ……っと」

桜に手を付け、目を閉じる。
枯れない桜から引き出すのはあの黒く染まった花びらについて。

「情報／100kcalⅡ黒い桜の花びら」

その情報を見た／読んだ瞬間、

「なんで俺が」「あの子ちょっとかわいいからって」「僕がなにをしたっていうんだ」「ふざけるな」「むかつく」「うざい」「殺したい」「馬鹿じゃないの」「消えてほしい」「死ねよ」「死ね」「

死んじゃえ」「死ネ」「しネ」「死ね」「死ね」「憎い」「死ね」
「死ね」「死ね」「死ね」「死ね」

「生きるを、やめてくれ」

「うわあああああああああああああああ！……！！！」

動悸が激しい。
頭が痛い。
吐き気がする。

「あ、ぐ、げ、げはっ、ごほ、が、あああああああああ！……！！！」

苦しい。
気持ち悪い。
息、息はできてるのか？

「あ、ぜつ、はっ、はあ、はあ、ごほっ、はーっ、はーっ……」

冷や汗で身体が冷え切って鉛のように重い。

幾分かましになったけど精神的なコンディションは最悪だ。

「これは、いったい、なん、なんだよ」

自分で思わず漏れた言葉だけれど、これは言うまでもなくわかっている。

悪意。

人の持つマイナス面。

この初音島にいる人間が想った、負の感情の塊。

それを僕は、自分から覗き込んだんだ。

「――――なきゃ」

自分の口からか細い声が漏れる。

そう。

枯れない桜に、こんなものがたまっていったらそのうち大変なことになるから。

「———けさ、なきゃ」

だからここにいる、僕が。

「こんなの、消さなきゃ」

消し去ってやる。

再び手を桜に付ける。

いつかの由姫さんの時を思い出す。

あれも大がかりなものだったから声に出したっけ。

まあ、今回もさくらが見つけてくれるだろ。

「目標…貯蔵機関消去」

取り除いても溜まってしまいうなら、その溜める機関をぶっ壊してやればいい。

「対象…枯れない桜」

枯れない桜がこの悪意を集めているだけだ。
なら、送られてきてもなくなってしまうればいい。

「効果…完全除去」

そう。

だからここでこの機関をなくせば、桜に悪意は溜まらないはず――
――！

「結果…除去、完了」

息が、荒い。

ただ僕の心には達成感が積もり、

「注意…重要な機関が破壊されました。 “桜内義之” の存在維持が不可能です。 対処をお願いします」

そして伝わってきたその情報で、そんなものは消え去った。

存在維持が不可能。
消える。
義之が。

「そんなの……」

許せるか。

「嫌だ！」

花を散らし始めてしまった桜に意識を溶け込ませる。

枯れない桜に義之が関係していたのかともうどうでもいい！！
自分の魔法で、何とか——！

「代替／????? k c a l 桜内義之」

「リソースが正しくありません。正しいものを使用してください」

「リソース！？ ああもう、もう一回！」

「代替／????? k c a l 桜内義之」

「リソースが正しくありません。正しいものを使用してください」

「何が必要なんだよ！！ 僕の身体！？」

「リソースが正しくありません」

「声！？」

「リソースが正しくありません」

「記憶!？」

「リソースが正しくありません」

「一体なんなんだよ!?!」

苛立ちと焦りが募る。

消える。

義之が消える。

あの弟分の存在が――――。

……存、在？

「存在」

「正しいリソースが発見されました」

「存在か!」

迷いはない。

なんせ一回死んだんだ。

義之を消すぐらいなら存在くらいくれてやる。

「代替／染衣春日↓桜内義之」

イコール 一方通行
⇓ではなく↓。

僕は義之じゃなくて、義之は僕じゃない。

僕の存在を義之に。

「代替完了。 桜内義之の存在維持に成功、並びに桜の代替も終了しました。 以後、枯れない桜に影響が発生しても桜内義之には影響がありません」

「あー、よかつー」

安心したと同時に、ぱさりと。

地面に帽子が落ちた。

「あ、僕の帽子。 拾わなきゃ」

手を伸ばして帽子を掴む。

掴、む。

つか……む。

「あ、あはははは……」

掴めない。

当然だ。

僕はもう、ほとんど消えているんだから。

「なんだ、そっか。 “ 誰からも覚えてもらえない存在になる ” と
かじゃなくて本当になくなっちゃうんだ」

手の向こう側が透けて見える経験なんて、一生に一度ぐらいしかないだろう。

「にははははははは！ ……………そっか、終わるかあ。 そうだよ
ね」

存在は、義之に譲った。

なら残ってる僕は消えるだけ。

「んじゃ、最後に。 この消える一瞬に、一曲歌おうかな」

ケータイをつけ、録音ボタンを押す。

「作曲、K&a m p; K&a m p; T」

「……作詞、染衣春日」

「曲名は、『i f I w i s h』」

歌が、桜と、この島に、響いていく。

If I wish for you , again . . .
と、ずっと、Dream again . . .

そして。

ぼくは。



さくらさんが見知らぬ携帯を持ってきたのは、枯れない桜が一度花を散らして再び咲き誇った次の日のことだった。

「ええと、じゃあその携帯、枯れない桜のところに落ちてたんですか？」

魔法使いの顔をした音姉が言う。
それにさくらさんが答えた。

「そうなんだよ。帽子とマフラーも落ちてたからもしかして、誰かがそこにいて何かしてたのかもしれないかって」

「それならその携帯、届けて調べてもらえばいいじゃないですか」

俺がそういうときくらさんは困った、という表情を浮かべて眉間にしわを寄せる。

「それがね、不思議なことに……これ、ボクの名義で契約してあったんだ」

「……え、さくらさん携帯二つも持ってたんですか？」

「契約した覚えはないんだけどね」

「ミステリーですね……」

机の上に置いてある携帯を手取る。

メールフォルダを開いてみるけれどデータが読み込めない。

「あ、それほとんどのデータが壊れちゃって何にもわかんないんだ」

「……本当だ。唯一ちゃんと使えるのが一部の画像と音楽みたいですね」

「音姉、近いって」

「もっとよく見せて、弟君」

ぐいぐいと近寄ってくる音姉。

「ああもう、助けてくれよハ——」

ハって誰だ。

俺は今、誰に助けを求めようとしたんだ？

「あ、これ再生できるみたい。 ええと、日付は……昨日!？」
「え、本当? 再生してみてもらっている?」
「はい。 ええと、これでいい、かな」

かち、と音姉がボタンを操作すると、少女か少年か分かり辛い声が
呟き始めた。

「『作曲、K & a m p; K & a m p; T』」
「『作詞、染衣春日』」

「『曲名“ I f ｝ I w i s h ｝ ”』」

その呟きが終わると、突然。
ピアノの音が鳴り出した。

「わぁ……………」

「……………すごい」

「これって、魔法……なのか?」

「多分そうだね。 風の音もしてるし」

ぽつりと漏れたひと言にさくらさんはちゃんと返答してくれる。

これも魔法なのか。

俺たち三人はそれ以降一言も発しない。

そして、曲は終焉を迎える。

「……」

「……」

「……」

「『……いままでありがとう』」

誰に向けたものはわからない。

でもその言葉にはいろいろな気持ちが詰まっていることがわかって。

「『さよなら』」

その言葉の数瞬後に、携帯が地面とぶつかる音が聞こえた。

無言。

俺たちは何も言えず、ただ黙りこんでいる。

と、音姉が口を開いた。

「……誰、だったんでしょうか」

「さあ、ボクにはわからないよ。……ただ一つ言えることは、もうこの人は多分この島にいないってことぐらいかな」

「誰に向けてたんでしょうね、最後の」

「うーん、誰に难道ろう？」

そのあと少し話合ったりしたけれど分からずじまい。

結局謎の人物ということになったのであったとき、まる。

「えー、なにそれつまんなーい」

「いや、そんなこと言われても」

「ななかに同意するわ。……さすが義之、つまらない男ね」

「酷いなお前ら。小恋にあることないこと吹きこむぞ」

「あら、いいのかしら？ 逆に痛い目にあうのはそちらかもしれな
いわよ」

「そうだよ、義之くん。女の子を怒らせるとこわいんだからねー」

「んなこと言われても……」

そんな顛末を仲のいいなかと杏に話したらをそんな返答が返ってきた。

家族ぐるみで付き合いのある朝比奈ミキ姉さんと小鳥遊まひる姉さんに話しても同じような反応が返ってきた。

いや、俺がつまんない人間みたいで嫌なんだけど。

目の前で騒がしく俺を攻め立てる二人を傍目に窓の外の空を見る。

そう、今日もいつもと大して変わらない寒さで――――

『……いままでありがとう』

『さよなら』

春の日は、まだ遠い。

B a d E n d 1

「そしてだれかいなくなった」

B a d E n d 1 「そしてだれがいなくなった」 (後書き)

B a d E n d。

春日消滅E n dです。

全てのフラグは義之に受け継がれます (え

書いてて一番きつかった。

なんかもう途中で苦しくなってくるレベル。

B a d E n d、もう書きたくねーなあ……。。

で、お次は教師√への分岐と学生ルートへの分岐ですよ。

6日までには書き上げたいな。

教師√分岐「さくらのはなし。」（前書き）

すみません、一つしか終わらなかった上に説教入ってます。

自分も何をしたのかわからない、キャラが叫んだ。

独自解釈、注意。

追記

＜投稿日の時点＞

P V 1 6 8 4 2 4、ユニーク 2 2 9 1 8。

お気に入り 2 1 6

総合評価 6 2 6

……すごいのかすごくないのか全くわからぬえー。
なにはともあれ、皆さんありがとうございます！

教師√分岐「さくらのほなし。」

さくらに相談しよう。

現代こじちに来て、未だに桜のことを知らない僕が手を出すのは危険だ。
下手に手を出して大惨事になったらたまらない。

「ん、じゃあさくらに相談だな」

携帯音楽プレイヤーで現在時刻を確認する。

友人たちとの待ち合わせには遅れない、ちょうどいい時間だ。

「とりあえず忘れないようにさくらに連絡だけしておこう」

電話を取り出してコール。

- 1。
- 2。
- 3。

「『もしもし、どうかしたのはる?』」

「ん、ちょっと聞きたいことが出来たから忘れないうちに連絡しておこうと思って」

「『聞きたいこと?』」

「のとーり。ただちょーっと簡単に済みそうじゃないから、時間とってほしいなー、って」

「『にやはは、りょうかーい。えーっと、夜でいいかな?』」

「大丈夫だ、問題ない」

「『OK、じゃあとでね♪』」

「おー、後でな」

「『See you!』」

……これでよし。

「さてと。じゃあ急ぎますか」

時間、見間違えてたなんて笑えない事はなかったんです。本当です。嘘じゃないです。

——急ごう、二人に叱られる前に。



時は過ぎて夜。

芳乃家にいる二人だけの住人が顔を突き合わせて言葉を交わす。

僕と、真剣な表情を浮かべるさくらとの話が始まってから20分が経過しようとしていた。

そして現在は、沈黙が場を支配している。

「……………」

「……………」

僕は驚きと、納得から。

さくらは、おそらく恐怖と自責から。

先に口を開いたのは僕だった。

「……つまり、あの枯れない桜は」

「……………ボクのエゴ。ボクが寂しさから生み出してしまったモノ」

「義之も、そうなのか」

「……………う、ん」

「ん、そっか。……そう、なんだ」

はぁ、と一つ溜息をつく。
なら仕方ない。

「で、晩飯どうする？」

「……………え？」

「晩飯。dinner。夕餉。好きな言い方でいいけど？」

「じゃあ夕餉、じゃなくて！　ボクに何も言わないの！？」

なにを言えと。

「なんで？」

「あの桜を咲かせちゃったんだよ！？　ボクのエゴで咲かせちゃったんだ！！　なのにはるはなんで何も言わないし言ってくれないの！？」

「そりゃ、孤独の辛さはわかるし、もし僕がさくらの立場だったら咲かせてるかもしれないから」

「それでも……………」

「シャラップ。今から説教じみたこと言うよ、さくら」

「え、あ、お、お手柔らかに……………」

「あのね、僕はさくらが枯れない桜について話してくれたことが嬉しいし、それをちゃんと話してくれたさくらを凄いと思う。もし僕がさくらの立場で、“なんで枯れない桜が咲いているのか”なんて聞かれたら誤魔化すに決まってるから。あとさくらは怖がりすぎ。最初に話をするときに僕に『嫌いだ』ってこと言われるのが怖かったみたいだけど、僕を馬鹿にしてるの？　さくらが隠し事をしていたことぐらいとつくの昔にわかってたし、それが何であれ受け止めるつもりでいたっての。夜遅くに帰ってくるのも、多分枯れない桜の調子見に行ったりしてたんだろ？　まあこの予測外れてたらめちや恥ずかしいんだけどまあいい、でもそれよりなによりやっぱり言いたいのは！！」

「ひうつ！！」

両手でちゃぶ台を叩く。ちょっと大きめの音が出たがまあいい。そしてビックリしてるさくらんぼ。だがまあどうだっていい。

「二回目だけどさくらは凄いつて言いたいんだよ!!! エゴつていうけど十分責任果たそうとしてんじゅんか! 義之にも優しくしてるしちゃんと枯れない桜も気にかけてる! 凄じゅんか!!! 僕には絶対できる気がしないことをさくらは当然のようにやってるんだから!」

「でも、ボクは」

「“でも”もヘチマもあるもんか! さくらは誇つていいんだよ、桜を咲かせたことを! それで生きてる人だっているんだから! だからそれをマイナスに取る必要なんてない!」

「それでも、」

「『願えば叶う。祈れば通じる……一人一人の力が足りなくても、たくさん心の心があれば、みんなハッピーになれる!』」

「————っ!!」

「さくらは、誰かをハッピーに出来てるんだよ。桜を咲かせたこと、それを気負う必要もないし責任……は、持ってほしいけど、悔やむ必要なんてない!」

「は、るっ……!」

「まったく、さっさと僕に言えばよかったのに。そうしたら楽になっただろ?」

「う、うううう……っ!」

「でもまあ、これだけは言っておこうか。………さくら」

ふう、と息を吐いてさくらを見る。

涙があふれそうになりつつもこらえている様子が何とも愛らしい。にっこりと、僕は笑ってさくらに告げる。

「――お疲れ様。よく頑張ったで賞をやるう」

そんなおどけた僕の言葉にさくらは笑い出す。

「……………あははっ、よく頑張ったで賞って、あははははは！！」

「僕らしいだろ？」

「あははっ、まったく、はるは、あは、はは、はははは………うわああああああああああん!!!!」

「よしよし、辛かっただろ。お前隠し事苦手なくせに背負い込むからなあ……」

「うゝあゝうあああああああああ！！」

「泣け泣け。涙は心の汗」
 つていうからな。泣いてガス抜きしないと破裂するからね」

「ざみじがっだ、ぐるじがっだよお！」

「うんうん、大丈夫、大丈夫。安心しな、今は抱きしめててあげるから」

半笑いから本泣きへと移行したさくらを抱きしめあやす。

この3年間……いや、独り立ちして海外へ行ってからの長い日々
分の清算。

その気持ちぐらい、僕が受け止めてやらないと。

「『僕はちゃんと傍にいるよ』」

「うああああああああああああああん!!!!」

——だから、安心していいよ。
——もし君が泣いたのならば。
——その涙が止まるまでなら。
——この胸ぐらい、貸してあげよう。

—○—

日差しが射し込んでくる。

瞼の裏からでもわかる暖かな光。

それが僕に起きろと囁いているようだった。

「ん……………ああ？」

体を起こそうとしたが、起きない。

「かな、しば、り？」

そんな寝ぼけた頭で目だけを動かし体を見れば、金の輝きが目に入

る。

「あー、そっかー。さくらかー」

あの後、結局さくらは泣き疲れて眠ってしまった（お前は子供か）ので、とりあえずしっかり寝かそうとした。

……だが、身体を離そうとしたら服をつかまれて動けない。
どうしようもないから傍に会って座布団とかで出来た即興の布団で
昨日は寝ることになったんだった。

「んー。……ねよ」

だがしかし、限界である。
実は眠くて眠くて仕方ない。

「おやすみ」

二度寝の旅に、さあ行こう。

「う、うにゃあああああああああああああ！！？」

「うわらばっ！」

誰かの盛大な叫び声を聞いて世紀末な声をあげて飛び起きる僕。

……………。

うん、特に何もしなし。

「さくら、何してんの？」

「あ、あうあうあうあうあうあう！」

さくらが柱に頭をぶつけて目を回してる以外は。

「落ち着いた？」

「うん、おーるおっけー」

「これ以上落ち込んだりしない？」

「それは……するかも」

「……ま、それはそれでいいか」

辛くなった時のために僕がいるわけだし。

「ねえ、はる」

「んー？」

「桜の木の異常、知ってるんだよね？」

「知ってるも何も、お前が教えてくれたんじゃないか。人の悪意も集めてて、それは枯れない桜に必要なものなんだろう？」

「うん。……でも実はちょっと不具合が発生してたみたい」

「……………はい？」

「悪意も循環させるはずだったんだけど、なぜか蓄積されちゃってるんだ」

「ええと、じゃあそれが積もりに積もると？」

「暴走する」

「えっ」

「桜が暴走して、どんな願いも叶えようとする」

「なにそれこわい。え？ それ不味くない？」

「不味いけど、すぐにどうこうなるものじゃないから。ボクの見積もりだと義之くんが付属3年になるころだと思うんだ。だからそれまでに対処する」

「対処するってお前、そんな研究に打ち込む暇なんてあるのか？」

「う……………そ、それはどうにかあれをこうして」

「どうするってんだ。……………んー、まあ、その話は後でいいか。さ、純一の家にご飯たかりに行こう」

「後でって…………」

「いいから。ほら、行くよ」

驚愕の事実をあっさり教えられた気がするけど、それは心に留めておく。

まあ、なによりお腹が減っては何もできない。

とりあえず僕はさくらの手を引くと隣の家に入り込むのだった。

「枯れない桜の暴走……かあ。どうにかしてみようかな」

教師√分岐『さくらのほなし。』

<システム>

春日は枯れない桜を治す決意をしました。

教師√へ進みます。

教師√分岐「さくらのはなし。」（後書き）

「あれ？ 今の……」

「桜の木は直すんじゃない。治すんだ」

「さあて、それじゃあ行きますか」

教師√第一話。

「僕と桜と生徒と風見学園。」

今回は難産。

説教じみたことがなぜかほとぼしった。

こんなんでも、楽しんでもらえたらうれしいです。

次回は13日までに更新したいな。

誤字脱字設定矛盾点、感想要望などは感想、またはメッセージまで。

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

……春日の設定ぐらい、出したほうがいいのかな？

学生ノ分岐「ぼくがいきっているせかい。」(前書き)

みーじーかーいーよー。

そのうち今までの全部加筆修正加えると思います。

時間をとってしまうのでその間更新停止かな？

修正かけるのがはるかに先だからまあいいんですけどね。

では短い本編どうぞ。

学生ノ分岐「ぼくがいきっているせかい。」

さてさてどうしようか、なんて考えてちらっとケータイで時間を見る。

「13：32」

「……………あ、マズ」

———時間が。時間がまずい。

ちよつと短い回想。

「はい、春日です」

「『もしもし、ハル?』」

「あ、ななか。ちやお」

「『ちやお。あしたひま?』」

「暇だけど、いきなりなんで?」

「『べんきょうをあんずちゃんといっしょにおしえてもらいたいな

って』」

「おっけー、了解。明日の何時ごろにする？」

「『ええとね、ちよつとまって！ あんずちゃん！ あしたなんじがいいー？』『ごこの1時半』『ごこのいちじはんがいいって！』」

「聞こえてるって。了解、じゃあ一時半に……どこにする？」

「『花よりだんご！』」

「わかった。じゃあ明日一時半に花より団子で」

「『うん、じゃあねー！』」

「ばいばい」

回想終わり。

導き出される回答はどれでしょう。

？魔法使いの僕のケータイは10分早い。

？二人は遅れてやってくる。

？遅刻する。現実是非情である。

ちなみに。

ここから花より団子まで、子供の足だとどう頑張っても10分が限界です。

というわけでどう考えても？です、本当にありがとうございました。

ケータイを開く。

ワンコールで出た相手に僕は、

「あ、ごめん。遅刻する」

そんな間拔けな言葉を送ったのだった。

—○—

花より団子で勉強会を開いた後、団子をつまんでいると（ちなみに僕の奢り。遅刻したから甘んじて受けました）、なかなか唐突にこんな言葉を投げかけてきた。

「将来の、夢？」

こくりと頷くななか。

「ハルがどんなゆめをもっているのかきになって。すごくあたまいいし、うんどうもできるし」

「そこまで凄いつもりはないんだけどねえ……。んー、そうだなあ……」

現代^{こっち}に来てから、そんなことを考えたこともなかった。

ロボット工学とか、そういうのを考えていた頃はあったけど、何か

違う気がする。

あれはもう趣味の領域に達してるからやりたい仕事ではないような。

そう、もっと違う、誰かのためになりそうな……………。

“にやはは、せいかーい♪”

“はーい、花丸あげちゃおうかな♪”

“さくら先生に、おまかせだよ！”

「————学校の先生、かな」



「で、何を聞きたかったか忘れたと」

「おういえー。なにかききたかった、はずんだけど忘れちった☆」

二人と別れて帰宅したら、さくらに聞きたかったことがあったよう
ななかったような。

まあつまり、僕はその用件をころりと忘れて帰ってきてしまってい

た。

「はあ……はる、そういうの多いよね。若年性痴呆？」

「誰が若年性アルツハイマーか。それは純一のほうを心配せい」

「うわ、お兄ちゃんが聞いたら怒るよ？」

「あいつが怒ったって怖くもなんともないっての。あ、そうそう。

今日将来の夢の話になってさあ」

教師。

友人二人は絶賛してくれたけれども、目の前にいる大先輩は何を言ってくれるのか。

「いいんじゃない？ はるは素質あると思うよ」

「あっさりだな！」

「むしろボクみたいに留学してとってくる？ いく伝手もあるしコ

ネもあるし楽だし早いよ♪」

「や、ごめんそんな急ぎじゃないからいい。ってゆーか素質なんてある？」

今までの人生で何かをまじめに教えた経験なんて2回ぐらいしかないはずなんだけど。

「アイシアとの授業を見てて思ったことだもん、間違いなくあるよ」

「そんな昔のこ、」

「はる？」

「失礼、あの頃か」

昔のこととか言うのはやめましょう。死を招く原因となります。

「あ、今日はご飯芳乃家なんだ」

「うん♪ 腕によりをかけてはるが作るよ！」

「って、僕が作るのかよ!？」

「もち♪ あー、楽しみ、天ぷら〜♪」

料理指定までしてくるし。

……………まあいいか、仕方ない。居候してる身だ、文句は言えぬ。

ただし。

「少しぐらい手伝ってくれるよね？」

「もちろん、当たり前だよ！」

その言葉を聴いて、僕は台所へ向かう。

そして、まってよー、と追いかけてくるさくらと笑顔を交わし、余計なことをしそうなのを阻止しつつ料理を作り始めた。



本日も晴天なり。

弟分、お隣さん一家、友人との関係は良好。
毎日が充実している生活を送れています。

というわけで、僕、桜内春日の過ごす世界は、今日も平和です。

「教師、ねえ。なってみるのも悪くないかも」

学生√分岐「ぼくがいきっているせかい」

>システム<

春日は学生として将来の夢を追うことに決めました。

学生√に進みます。

学生√分岐「ぼくがいきっているせかい。」（後書き）

「ってなわけで、僕はパス。それは白雪月花で勝手にやって」

「おいおい杏さん、勘弁してくれよ」

「そう、僕だ」

「―――非公式新聞部、名誉副部長。桜内春日とは僕のことだ！」

学生ルート第一話。

「僕と義之と問題児と大親友。」

疲れたあ……。。

というわけで、今回は学生√。

そして初っ端にヒロインとして来るのは……皆さんご存知、ないち
ちろり毒舌娘、雪村杏！

共通↓個別みたいな感じに書いていくことに、なるの……かなあ？

駄文でもよろしければ期待してお待ちください！

誤字脱字、設定矛盾点、感想、要望などは感想、またはメッセージ
まで。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

第一話。 「僕と親友と卒パと皆との関係。」 (前書き)

ながいので前後編。

さあさあ、学生ルートに突入ですよ!!

今回は説明回、というか関係性とキャラについての語り。

あ、とある人普通に生存させちゃったけど平気かなあ……。

8／23

タイトル変更、文章追加しました。

第一話。「僕と親友と卒パと皆との関係。」

学園祭。

その言葉を聞いてどんなことを想像するだろうか。

クラスで一致団結して作り上げた出し物？
放課後まで残って必死に準備をした日々？
意中の女の子と一緒に周ったこと？

僕は陰謀と火薬と暗闇しか思い出せない。

だけど。

「いらっしゃいませー」

「まいどありー」

「雪村さん、花咲さん、白河さん、桜内さん、お願いします！」

「あ、呼ばれたね」

「ご指名みたいね」

「うっふっふ……茜さんの美貌に皆陥落していくわあ……」

「なんていう悪女」

「杏ちゃんのほうこそ」

「じゃあやってやりましょ、ななか」

「おっけー、任せてよ杏、茜！ さあ、稼ぐぞお……」

「」「ふふふふふふ……！」「」

それは本日、完全無欠に、ブッ飛ばされました。

学生√第一話。

「僕と親友と卒パと皆との関係（前編）。」

「——いや、待て。ねえ、待って、待ってください。何で僕まで行くことになってるんでしょうか？」

思わずストップをかけてしまった僕に不思議そうな顔をして杏さんは言う。

「あら、そんなかつこうしパジャマ着ておいて何を言っているのかしら」

「着せられたんだよ主に君らに！」

髪を留めていたりボンを奪われているので、現在僕は背中までストレートの髪を下ろしている状態。

髪の色以外を見れば、昔のことりそっくりの髪型のはずだ。

そして服装は制服……ではなく、桜の花びらが裾のほうに大きく刺繍された空色の女物のパジャマ。

とりあえず、着せられたとは言っても剥かれたわけではない、と先に言っておこう。

今日は卒業パーティ（通称卒パ）。

文化祭的なものが多い風見学園の3大行事の一つ。

いつもは賑わいと明るさのみがあるその卒パだけれど、今回はやけに殺伐とした空気をも少し出している。

理由は現生徒会長、磯鷲涼芽さんいそわし すずめが放った言葉。

「模擬店で売り上げ1位になった所には、超豪華商品を贈呈しますッ！」

これのせいで、義之十杉並十小恋ちゃんチーム、渉チーム、杏さん十ななか十茜えさん（十僕）チームが争いを始めた、んだけれども。

僕のクラスの出し物↓「せくしーぱじゃま喫茶」

そして僕の現在の服装↓なぜか用意されてた女用のパジャマ。

「仕方ないよね、ジューズが服にかかったんだもん」

「あれはかけたって言うんだよ！ 絶対反省してないだらななか！」

「あたりま……シテルヨ、ハンセイ」

「何か言いかけたしカタコトになってるし！」

あまりにもわざとらしい行動をよけ切れなかった僕にも責任はあると思うけど！

思うけど！

それでもこれはちよつとばかり酷くないですか！？

「まあまあ。ほらほら落ち着いてー」

「茜えさん……。君だけが僕の癒しスポッ」

「お客さんのところに行こうよ」

「ブルータスッ！」

優しく声をかけてくれた茜えさんも敵だった。
いや、そんなことよりお断りを早く！

「僕は遠慮するからそっちでやって！」

「あ、ちよ、逃げないでよハル！」

「……………まあ、予想の範囲内ではあるわね」

「いつてらっしゃい、その恥ずかしい服装で」

脱兎のごとく逃げ出した僕が、ナンパされて逃げ出すまであと5分。



白河ななかと雪村杏。

二人と僕は親友、と呼ぶべきものなんだろう。

ななかはフォローをしたあの日から。

杏さんは一緒に勉強したあの日から。

仲のいい友人になるまで喧嘩もしたりしたけれど（そして僕が毎回謝ることになっていたけど）、今ではいい思い出になっている。

言葉で表すなら、親友以上恋人未満、みたいな。

そんな僕ら3人組。

そしてやはりというべきか、僕と関わるにあたって、ななかは杏さんに杏さんはななかに、友好関係を結んだようだ。

次に花咲茜さん。

癒しのオーラを持っている（気がする）同い年の体つきはすごいお姉さん。

裁縫や料理が得意だったり、ほんわかした物腰をしているのに軽い感じのするお方で、なにかとえろい方面に持っていたりする女の子。

なんか似合う気がしたので僕は茜さんと呼んでいる。

双子だそうで、片割れの女の子、藍^{あい}さんは本島に在住中。父親の単身赴任を単身にしないためらしい。

夏休みに1度だけ会ったが、茜さんとまったく区別がつかなかった。

藍さんいわく「実は内気だからそんな姿を見せたときは優しくしてあげて」。

そんな姿を見たことが無いのは、多分まだ1年程度の付き合いしかないからか。

まあ、色々あって1年のときに仲良くなった女の子。

付属に入学して2年、友人となって1年半ぐらい経つ彼女、杏さん、小恋ちゃん、ななかの仲良し4人組は苗字の一字目を取って『くせつげつか白雪月花4人娘』なんて呼ばれたりする。

なんだかんだ言ってみんな仲良くしているようだ。

仲がよすぎるのも困り者だって、さっき思ったけど。



酷い目にあった。

駆けつけた風紀委員に助けられたからよしとする。

「この格好のせいでしょ絶対……」

パジャマの裾を引っ張ってみる。

なぜか体のサイズにフィットしているのが気に食わない。

逃げ場所、特に制服がありそうな場所を探さねば。

ってなわけで、生徒会室なう（古いって言われた。最新だと思ってたのに※2055年現在）。

中にいたのは頭を抱えている次期生徒会長（予定）の我が義きょうだい兄妹、朝倉音姫さん。

音姫ちゃんはこちらに顔を向けるとにこやかな笑みを浮かべて小さく手を振ってきた。

「やっほー、ハルくん」

「やっほー、音姫ちゃん。ちょっと匿って」

「いいけど……ってなにその服装。そんなパジャマ持ってたっけ？」

「持っていない。コスプレみたいなものだよ、そういうことにしておいて」

「しておいてって……しかもなんか可愛いし。嫉妬しちゃうなあ」

「何に」

「ハルの可愛さ」

「音姫ちゃんも大分可愛いということをここに申し奉りたいんですが」

「何度も聞いたよ、それ」

くすくすと笑う音姫ちゃん。

無表情がデフォルトだった昔と比べてかなり変わったなあ、とまた思う今日この頃。

頭を音姫ちゃんが座っている机に載せてだれる。

そのまま目だけで音姫ちゃんを見て問いかけてみた。

「で、頭を抱えてたのは涼芽会長のことでしょ？」

「うん……あの会長はほんとにもう、最後の最後に大変な爆弾を落としていくんだから………」

「にはは、仕方ないっしょ、あの生徒会長だもん」

「まったく、人事だと思って……」

「ん、のとり。実際人事……の、はずだったんだけどねえ」

「え、何かあったの？」

「直接的には無いけど間接的には。僕も自尊心的な何かはあるわけですよ、主に男的な」

「うーん、十分可愛いと思うけどなあ……」

そうじゃない。そして優しく頭撫でるの止めてもらえませんか、まいしすたー。

「そういえばまゆきさんの姿が見えないけど？」

「んー？ ああ、まゆきなら————」

「杉並いいいいいいいいいい！！！！」

「はーっはっはっはーっ！！！！ 捕まえられるものなら捕まえてみる高坂まゆきいいいいいいいいいい！！！！」

「理解した。何も言わなくていいよ」

「あはは……まあ、いつも通りってことだよ」

相変わらず追いかけてっここが開催されているようで。
まゆきさんも大変だ。

とと、杉並で思い出した。

「音姫ちゃん、お腹減ってない？ 義之のどこ焼きおにぎりやっけた気がするから買ってこようと思うんだけど」

「あ、お願いしてもいい？ 実は忙しくて何も食べてなくて」

「任せておけ我がいもーと」

「頼んだよおにーちゃん」

「「……………」」

「にははっ」

「あははっ♪」

顔を見合わせて思わず小さく笑いあってから、僕は生徒会室の片隅に歩き出す。

ええと、確か上から13、右壁側から3つ。

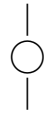
「じゃ、いつてきまーす。————てりゃ」

「え！？」

そのタイルがスイッチになっている。
足元がぱかと開いた。

浮遊感のち。

落下。



僕と朝倉音姫の関係は、この数年で大分変わった。

いや、発展したというべきなのか。

少なくとも『正義の魔法使いとその部下』からは脱出している。

今の関係を、周りの親しい人たちに聞いたらおそらくこう答えるだろう。

「『とても仲のいい、ちょっと不思議なきょうだい』」

それぐらい、僕と音姫ちゃんは長く、深く交流していた。

ほぼ毎日夜に会話し、互いに魔法について学び、互いの部屋に入り浸るぐらいに。

僕から言えば……そう、言うならば親友とか、恋人とか、そういうものを超えた“家族”っていう枠に入っている。

まあ、つまり音姫ちゃんは僕にとって可愛い妹で、頼れる姉で、信賴できる家族で、すばらしい魔法使い。

あっちもそう思ってくれていると嬉しいかな、なんて思ったりしてる。

そんな可愛い家族のために僕は買い物に出かけたわけです。

もう二人のうち一人がいると思われる、屋台へ。



「いらっしやいませー！ 美人が握った焼きおにぎりだよー！！」

「……………」

もう二人のうち一人だと思ったら違うほうがいた。
何を言っているのかわからねーと思うが、以下略。

「お姉さん、俺たちと屋台」
「お断りします」

列に並んで待つこと数分。
話しかけられた気がするけど一言で切って無視。

「いらっしやいま……！？」
「愉快的なことになってるねー、由夢ちゃん」
「ハ、ハルにーさん……………です、よね？」
「なぜに疑問系。———ああ、パジヤマ姿だからか」
こんな

いつもは後ろ髪を束ねて背中に流してるからなあ。
髪を根元でまとめて擬似ポニーみたいにしてる。

今はストレートだけだね、ふふふのふ。
おんなっぽいなあ、この格好、本当に。

「これ、早く脱ぎたいんだけどねえ、似合わないでしょ？」

「や、似合いすぎて怖いんですけど。ななか先輩ですか、コーディネートは？」

「……よくわかったね、びっくりだ」

「ハルにーさんの身近で一番センスよさそうなのはななか先輩か花咲先輩ですから」

「なるほどなー」

「それに桜の花びらの刺繍。ハルにーさんが桜の花が大好きって、長い間の付き合いがある人ぐらいしか知らないですもん」

「あ、確かにそれはそうかも」

一日眺め続けても飽きないから仕方ない。
なぜかはわからないんだけど。

「ところで、何個ですか？」

「へ？」

「焼きおにぎりです」

「ああ、うん、じゃあ3………」

「どうしました？」

「……………ごめん、小恋ちゃん。焼きおにぎり3個お願い」
「ハルにーさん！？」

「え、わわわ、は、ハルだったの！？」

「僕だったの。ごめん急いでお願い」

「つ、月島了解です！」

「答えてよにーさん！！？」

「じゃ、頑張れ由夢ちゃん。応援してるぜ」
「あ、待つ、もう！」

見えている地雷を踏みにいくほど僕はチャレンジャーじゃない。

とりあえず、これ以前、そしてこの後、恐ろしいぐらい料理下手な由夢ちゃんの焼きおにぎりを食べる人には合掌しておこう。

南無。



朝倉由夢は、手のかかる妹分だ。

なんて言ったら由夢ちゃんに怒られそうだけど。
まあ、そこが可愛いというか、なんというか。

義之に対するツンデレっぷりが物凄いことでも有名だ（ただし身内に限る）。

学校ではフレンドリーで社交的、しかも丁寧な性格で、可愛いルツ

クスも相まってすばらしい優等生だ。

……………が。

その裏モードを彷彿とさせる姿の裏は、その兄のかったるい精神を受け継いだぐーたら少女だった。

今でも目を瞑れば思い出せる、音姫ちゃんの叱責。

「おじいちゃん、由夢ちゃん！　ちゃんとしてって言ったでしょ！」

「「かったるい……」」

「こらー！！」

これだけ言われても治らないのはもはや血筋か。

そして、こんな性格のせいかな、まったく料理が出来ない。

……と、いうか、形がすでにおかしい。

で、やっぱり何かおかしい味がする。

ただ音夢よりはマシだろう。

あっちはまるでトラップのような、そんな気持ちを抱くレベルのものだから。

とまあ、なんていうか、祖父母の悪いところを引き継いでいるような女の子。

でも、僕を兄と慕ってくれる優しい娘だ。

ちなみに、義之は『兄さん』、僕は『ハルにーさん』と呼ばれている。

そういえばその兄さんがさっきパジャマ喫茶ぼくのきょうしつに向かうのが見えたから、ちよつとからかいに行こうかな。

第一話。「僕と親友と卒パと皆との関係。」（後書き）

「勘弁してくれよ」

「おい義之！ 誰だそのかわいこちゃんはやよ！？」

「ふっ、非公式新聞部、ここに参上！！」

「そうですね、たとえるならソースせんべい（中略）ぐらい嬉しいです！」

「お、小さな魔法使い君、やっほー」

次回。

「僕と義之と卒パと皆との関係。」

あとがきに書くことがあまりない気がする。

ああ、皆との関係はこんな感じに進みました。

次回は男組みと先生組みかその他組かな。

誤字脱字要望その他ありましたら感想、ユーザーメッセージまで。

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

第二話。「僕と義之と卒パとみんなとの関係。」（前書き）

長いうえに文章雑。

楽しんで読んでもらえれば幸いです。

多分そのうち学生√第0話を投稿しますのでよろしく。

感想ですが、次話投稿時に一括返信します。

最後、なぜか急展開。

第二話。「僕と義之と卒パとみんなとの関係。」

教室の控え室バックルームに入ると、外から聞きなれた4人の声が聞こえてきた。

「いらっしゃい♪」

「あら、義之。それと変態、いらっしゃい」

「義之君ちっすちーっす！ 変態君もちーす！」

「うわあああああ！ 俺は変態じゃなくて涉なんだあああああ
！！」

「お前ら、そんな陽気に涉の心を抉りに……っっていうかこの出し物、大丈夫なのか？」

「店的には問題ないわ。なんといってもカモフラにカモフラを重ねたから」

「私的には別にカモフラなくてもよかったんだけどお、やっぱりおみせできなくなっちゃうのは嫌だったからねえ……。……二つの意味で」

「どういう意味だよ」

「見せるって、ハア……ハア……」

「それはねえ」

「いや、やっぱ言わなくていいからな茜。それとこっちに飛びつこうとしないでくれ、この後絶対面倒くさいことになる。あと涉、キモイぞお前」

「……ちえり、作戦失敗」

「惜しかったね、茜。もうちょっとで小恋に決定的写真を送れたのにー」

「勘弁してくれ……」

「くそう、義之なんか爆発しちまえ！」

「お前ぶれないなあ、尊敬するわ」

桜内義之とそ
のご友人、来店。

なんか楽しそうなことをしているようなので、僕も混ざりに行く。

「あの……桜内さんっ!」

もちろん、全力で遊ぶために。

第二話。

「僕と義之と卒パとみんなとの関係。」

「は……………え、誰ですか？」

「わたし、白河さんの友達の春日^{はるか}って言います。こんにちは！」

「あ、ああ、うん、こんにちは……………？」

にっこりとオンナノコの気持ちになって義之に笑顔を向ける。

おお、困惑してる困惑してる。

名前をちょっと考えれば僕^{わたし}だってわかるかも知れないけど、その時はその時。

「く、ふふ、ふふふ……………」

「ふふ、ふ、さすが、ハル、ふふふっ」

「やるねえ、さすが悪戯好き。あれだけ嫌がってた服装で……」
「おい義之！ 誰だそのかわいこちゃんはよ！？」

後ろの3人が必死に笑いをこらえているが気にしないことにします。
キャラクターを演じられなくなるだろうから黙っていてください。

そして渉。
いたばしさん

お願いですからから黙ってください、なんか怖いです。

と、まあそんな外野を放置してキャラクターを演じる僕。
わたし

「あの、あの、あのあわたし、桜内さんにですね、言いたいことがありましてですね！」

「あーえー、うん、なんですか？」

想像するのは『空回りする暴走少女』。
イメージ

妄想癖強そうな女の子でも想像すればいいと思いますよ、はい。

ささ、さらに一押し。

「卒パ一緒に周りませんか！？」

顔を真っ赤にして、精一杯叫ぶ（演技）。

こんな悪戯今まで一回もやったことないから凄く楽しいです。

「え!?! いや、気持ちは嬉しいけどちよつと……」

「ジェッラスイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!」

動揺しつつも断ろうとする義之よしゆきにさらに畳み掛けます。後ろ? あ
ーあーなにもきこえませーん。

「わたしとじゃ、いやですか……?」

「う、そういうわけじゃないんだけど……であって初日だろ? 俺達」

「え———そんな、わたしのこと、忘れちゃったんですか……?」

「はい!?!」

「そんな……わたし、義之よしゆきのこと、毎日、毎日……っ!」

間違っていない。

毎日毎日、どう遊ぼうか、晩御飯はどうしようかとか音姫ちゃんと一緒に考えてますが。

ショックで顔を伏せるフリをしつつ、笑みを噛み殺す。

まだだ……! まだ笑うな……っ!

あと30秒後にネタバラしする時まで……っ!

「僕の笑いが収まるまで、少々お待ちください」

「……で、一体どこで気づいたの？」

「あんなに笑って大丈夫なのか、ハ」

「いいからさっさと質問に答えろ！」

「h a i ! ! こたえまう s ! ! 」

メイン盾になった義之が言うには僕が笑いをこらえて俯いたときに気がついたと。

なんか嘘をついたときに出る癖があるらしいんだけど、誰も教えてくれなかった（あとで音姫ちゃんにも聞いてみたけど教えてもらえなかった）。

ちくしょう。

「だってそのほうが面白いじゃない」

「確かに、ハルの嘘ってあの癖がないとわかりづらいもんね」

「おかげでわかりやすいよねえ」

「ま、ハルだからってことで俺は片付けてるけどな」

「マジか……ぜんぜん気がつかなかったぜ」

「「渉だし」」

「渉君だからねえ」

「渉君ですからねえ」

「お前ら酷いっ！ 俺泣いちゃうっ！」

「あー、泣くなら五月蠅いから教室から出て泣こうな……。……あんなだけ笑ってた僕があまり大きな声で言える事じゃないけど」

—○—

桜内義之は、僕の弟だ。

や、心情的とか比喩表現ではなく、本当にそういうことになっている。

戸籍上だと、僕が上、義之が下（年齢はひとつ違い）。

そんな僕らの立場ですが……。まあ、なんというか。

捨て子、という扱いらしい。

この話を軽い感じで話したらドン引きされたのもいい思い出。

同じ学年にいる理由は簡単、僕がひとつダブってるということにしているからだ。

“留学していた”という名目の元で。

実際、留学というかそれに似たようなことはしているんだけどね。

ヨローロッパのほう
向こうで、朝倉夫妻の家に泊めてもらったりとか。

……いい男だったな、さすが純一と音夢の息子だけある。

と、まあそれはさておき。

桜の木の下に二人で置いていかれたことになっている、僕ら二人。
住む家は違うけれど、仲良くやっている兄弟であると自分では思っている。

魔法を教えたのも僕と純一だし、最近ギターも教えたりしたし。

からかいあっても喧嘩しても、頼りになるいい兄でいられたらいい
なって、本当にそう思う。

ちなみに、3バカの一人。

巻き込まれ兼ツツコミ役。

3バカの残りについては、すぐ話すことになる気がする。



教室の外に出て、とりあえず出店を回り始めた僕ら。
そんな僕らを3件目の店先で待っていたのは、意志の強い目をした
いかにも体育会系な感じの先輩だった。

「まゆきさんちっす」

「お、ハル君ちーっす。弟くんと板橋もいるね、ちよおーど良かった！」

彼女は高坂まゆき。

音姫ちゃんと同じ学年の生徒会副会長。

宿敵は杉並。

まあ、また詳しく説明する機会があるだろうから追々。

「ゲッ！」

そしてまゆきさんの顔を見た瞬間に逃げ出す渉。

まゆきさんさんはそんな渉をちらりと見やると再びこちらに笑顔を
向けた。

「とりあえず、聞きたいことがあるんだけど？」

「あの、まずひとつお聞きしたいのですが――――」

「むう、ならば致し方あるまい。桜内兄の勧誘は諦めるとしよう」
「そーして。……………うーん」
「どうしたM V同志。何か悩み事があるなら相談に乗るぞ」
「いや、ちよつとまゆきさんに連絡しようかな———って、もういないし」

逃げ足も速い杉並だった。

—○—

3 バカ。

風見学園付属2年の中でこう呼ばれるのはおそらく僕の友人だけだろう。

さくくらいよしゆき
桜内義之。
いたばしわたる
板橋渉。
すぎなみ
杉並。

この3人が、僕らの愛すべき(?) バカ共だ。

簡単な紹介をすると、上から。

義之。

巻き込まれ役。
僕の弟。

次、板橋渉。

実行犯。

特徴、お調子者で女好き、そして変態。
だがここぞというときの意志の強さは凄い。
友人思いのいい変態。

軽音楽部所属のドラマーで、義之と小恋ちゃん、ななかとバンドを組んでいる。

音楽はけっこうまじめにやってたな、そういえば。

最後、杉並。

計画、実行犯。

特徴、神出鬼没でオカルトマニアの謎に満ちた男。

下の名前は誰にも知られていない（学校の名簿ですら下の名前がマーカーで塗りつぶされていた）。

非公式新聞部所属。

だからさっきの僕の拒否が通じたんだけど。

あとお祭り好きなのところもある……みたいだ。

宿敵は高坂まゆきさん。

なんだろう、やっぱり昔の杉並^{かこ}を思い出すのは。

あ、一つ言い忘れ。

こいつも、ちょっと変態っぽい（オカルト方面で）。

そんな3人が組んでいるのを皆から“3バカ”と呼ばれている。

なんだかんだ、面白い組み合わせだとは思うけどね。

—○—

とりあえず教室に戻っても着替えがないことに気がついた僕は、保健室に体操着を借りに行くことにした。

保健室には多分先生もいるしね。

「ふう……。あー、チョコバナナ食いたい」

「あー、確かに。祭りのときのチョコバナナは格別だよねえ」

「そうだよねえ、ほんとに。頭にも効くし」

「バナナミン豊富だしねー」

「……………や、なんで自然体でフェードインしてるの、ミキさん

「？」

「いやあ、君がいたからとしか言いようがないんだけどさ。似合うね、その格好」

「もうそう言われるのにも慣れたよ……。こんにちは、ミキミキ」
「ミキミキ言うな。……うん、ちっこい魔法使い君、やつほー」

隣から僕の呟きに乗っかってきたミキさんをみて溜息をつく。
あいかわらずフリーダム。

「いやはや、あの魔法使い君もこんなに大きくなって……」

「さつきちっこい言っただけだった？　というか、何でここにいるのさ。仕事は？」

「休暇とった。で、向こうは今月付けで転勤。そして転勤先の名前は『水越総合病院』。つまり、わたしは初音島に帰ってきたのだ！」
「な、なんだってー」

マジですか。

てかテンション高いな、ミキミキ。

「よかったじゃん、これで毎日まひるさんとラブレるね」

「誰が百合か。……でもうん、まあ、確かにまひると会おうと思えば会えるのは嬉しいかな」

「うんうん、それはよかった」

「……で、話ガラッと変わるけど、なんでそんな格好してるの？」

「出し物がカオスだった。これ以上聞かないで」

「ああ、もしかしてパジャマ喫茶？　わたしも勧誘されたよ、『お姉さま、いらっしやいませんか！？』って」

「誰だ……いや、むしろなぜだ」

「このミキさんからあふれ出るお姉さんオーラが学生諸君を魅了して止まないのだ」

「魅了（笑）」

「殴るぞこら」

「すみませんでしたー。看護師に怪我させられるとはだれも思わないだろうに」

「あ、私の勤めてる病院へどうぞー。もちろん入院費治療費は患者さん持ちですので☆」

「酷過ぎるコンボを見た。肉体的にも経済的にも大ダメージじゃんそれ」

「ふははー、なら崇めるがいいー！」

「わー、すごいぞー、かっこいいぞー、我らがみきさまー」

「……………ねえ、なんでこんな話してたんだっけ？」

「……………忘れた。とりあえず目的の場所には着いたわけで」

話ながら歩いているとやっぱり早い早い。

内容が有意義かはさておいても。

まあ、保健室^{このへや}に来たのもこれだけが理由じゃなくて…………。

「あ、いらっしや…………ミキちゃん！？ ハル君も！？」

「やつほー、まひる」

「こんにちは、まひるっち」

「へー」

「よー」

「「ぶらざー！」」

「あはは、二人が一緒にくるなんてすごい偶然だね！ 例えるなら（中略）ソースせんべいぐらい凄い偶然だよ！」

「うーん、あんまり変わんないね、まひる」

「2日前に会ったのにそんなにすぐ変わったらただの変人だよ……」

「まひるは変だから仕方ないか」

「酷いっ!？」

ポンポン会話が弾む、相変わらず愉快的な二人組だ。と、そんな話に水を差すようで悪いけどちょっと注文。

「ごめん、男子用の体操服とジャージある？」

「あるけど……なんで？」

「この服を着せるためだけにジュースぶっかけられて大変なことになった」

「うわぁ……でも確かにあの子達ならやりそうだね」

「どういう集団よ……」

「僕は気にしないほうがいいと思うよ。どうせ今度会うだろうし」

「私もそう思うかな。あ、気にしないほうがいいってどこね」

「……………なにそれ、怖い」

「あはは、はい、ジャージ」

「お、さんきゅー。……よし、女子用じゃないな」

「そこを疑うの!？」

E…体操服

E…ジャージ

ぼうぎよりよくが 2 あがった！

というわけで、ジャージと体操服をゲットした。
さっそく着てみるとしつくりくる。

まさか、僕にも由夢ちゃんと同じジャージジャージ愛好家の血が流れている
っ!?

……アホか。

「それじゃ、卒パはまだまだ終わらないから遊びに行ってくるー。
多分帰ってこないから会いたかったらメール頂戴!」

「おっけー!」

「わかったよー!」

そんなこんなで着替えた僕は、雑談に盛り上がる二人と別れて再び
卒パを楽しむのであった。

—○—

朝比奈ミキと小鳥遊まひるは年上の友人だ。

歳は結構離れているけど、あの病院での出来事から変わらず友達付
き合いが続いている。

今は社会人になっている彼女たちの職業といえば。

ミキさんは病気のまひるさんの世話をしていた時に思った看護師と

いう夢を叶え。

まひるさんは自分の長い入院生活をプラスにする仕事を探し、同時に自分が少ししか通えなかった学校に行ける教師を目指した。つまり、看護教諭。

その道をまひるさんはあつという間に駆け抜け、見事に風見学園の保険医となった。

評判は上々、マスコット性もあったためか男女合わせて人気も高い。舞佳ちゃんと話をしているところを目撃したのでちよつと聞いてみると、先輩だったとか。

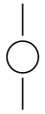
それはさておき。

初音島から出て行ってしまったミキさんを僕ら（まひるさんと朝倉姉妹と桜内兄弟）は寂しく思ったりしていたのだけれど、それも今月までみたいだし。

これからは親友漫才が見れることも多くなるだろう、なんて考えながら。

へーよー、ぶらざー。

また遊ぼうぜ。



宴もたけなわ。

散々引っ掻き回されたこの卒パも終わりが近い。

結果発表に生徒が集められるのもそろそろだと思い、放送が入る前に学園長室に顔を出しに行く。

「さくらー?」

.....。

「おーい?」

.....。

「さーくーらーさんやーい?」

.....。

「むむむ」

どうやら部屋にいないようだ。

中に入ってぐると見渡して、さくらがいないことを確認する。
ふと気づくと、足元に何やら纏わりつく感じが。

「んー?」

「あんあん!」

「おー、はりまお」

そこにはやけに丸い犬のような何か。

この鳴き声、形状。間違いなくさくらの飼っている犬(?)、はりまおだ。

なんでこう、さくらの飼うペット(?)は地球外生命体っぽいのか。

うたまるとか。

それは置いておいてとりあえずうたまる……じゃなかった、はりまおに聞いてみる。

「なあ、はりまお。さくらどこに行ったか知ってる？」

「あん！」

「知ってるの？」

「あん！」

「頷いてるよこの犬(?)……」

マジで知ってると思わなかったけど。

「あん！」

「ついてこい？ や、これから卒パのフィナーレなんだけど」

「あんあんあん!!」

「あー、はいはいわかったから！ ついていくって！」

開けてあったドアから走り出すはりまおを追いかける。

見逃さないようにしなきゃ。やけにすばしっこいからな、あいつ。

「待て、速いっての！」

「あんあん！」



芳乃さくらは、僕の家族だ。

比喩とかじゃなくて精神的なもの。

それは僕がばあちゃんに拾われたあの日から、ずっとずうっと変わらない。

昔から変わらないその位置は、僕が現代こっちに來ても変わらなかった。

友達とか恋人とか、そういうのを全部飛び越した存在。

傍にるのが当たり前、離れていてもすぐ近く。

僕にとって芳乃さくらはそんな存在だ。

僕に長い間隠し事をして、なにか無茶してるようだからいつか聞き出そうとは思うんだけど。

それを聞いたとき、僕ができることがあるのかわからなくて聞きづらい。

「へえ、そう。じゃあ頑張れ」

なんて、さくらに僕は絶対言えないだろうから。

僕に手助けできるようなことなら、嬉しいんだけど。

—○—

はりまおを追いかけること数分。

「あんあん！」

「おま、……っ、どこ……までっ、走らせんだ……っ！」

とつくに学校外へ出ているはりまおと僕は、それでも足を止めなかった。

「あー、絶対怒る、さくら、めっ！」

「あん！」

外靴の踵を派手に横に滑らせながら流れるようにカーブを曲がる。

「まだ!？」

「あんあん♪」

「はりま、お、お前、楽、しんで、走ってる、だろっ！」

噴水の横を通り抜ける。

周りには満開の桜。

「あん♪」

「こ、ここ？」

「あんあん！」

「ここって……」

ひとつ、少しだけ広い場所に出た。

すっかり暗くなってしまった世界の中で、月光を受けて佇んでいるのは僕らの始まり。

大きな大きな、綺麗な魔法の桜。

「枯れない、桜」

ぽつりと呟いた言葉は、月明かりに吸い込まれていく。

その咲き誇るさまはとても綺麗で。

僕がどうしてここに來たのか、忘れて――

「時間が、無いのにつ!!!!!!!!!!」

――しまえそうにない、そんな悲痛な叫びが聞こえた。

「早く、早くしないといけないのに、どうして!?!」

叫び声は続く。

「……………さくら、かな?」

「あん?」

はりまおに目配せしても首をかしげるだけ。

畜生なんだ可愛いじゃねえか。

ここに誰かい合わせてることに気付いてないだろう、さくらが三度叫ぶ。

「なんで、どうしてこうなるの!？」

悲痛な。

痛々しい、そんな叫び。

それが止んだと思えば、今度はすすり泣く声が聞こえてきた。

それに乗せられた言葉は、小さくて、とても小さくて聞き取りずらかったけど。

「誰か、誰か助けてよう……………」

その言葉は、僕に行動を起こさせるには充分だった。

「助けてほしいって？」

「…………え？」

「昔言っただろ、さくら。『僕はさくらを助けることが出来ないかもしれない。でも、手伝う事ぐらい訳ないことなんだ』ってさ」

「は、る？」

「これと言ったな、ほとんど同じシチュエーションか。『頼れよ。寄りかかれよ。一人で抱え込むじゃねえよ! お前の友達は

「ここにいるだろ!」

「なんで……?」

「歳食っても泣き虫な家族の鳴き声が聞こえたからちよつと飛んできた」

「うそつき」

「知ってる」

にやりと口の端をあげて笑うとさくらも少し笑みを漏らす。
そして僕はすぐその笑みを崩して、さくらに問いかけた。

「さて、何が起こってるのか、1から10まで説明^{プリーズ}してくれ」

なぜか大声で笑われた。

第二話。「僕と義之と卒パとみんなとの関係。」（後書き）

「桜の、暴走？」

「ただいまー……」

「今日から一緒のクラスで勉強することになった——」

次回。

「僕とさくらとサンタと転入生（機）。」

感想に「最後超展開過ぎワロタWWW」とか言われても仕方のないレベル。

内容が薄いなあ、もっと頑張ろう。

早めに桜の暴走バレをするのは、この後の√展開を簡単にするため
と言いついてみる。

とうわけで、感想誤字脱字批評その他ありましたら感想、または作者にメッセージ送信を。

ここまで読んでいただき、誠にありがとうございました。

第三話。 「僕とさくらと治療と転人生（機）。」 （前書き）

サンタ要素が消失したので次回。

とりあえずの妥協案を春日は見つけたようだ、的な。

時間も飛んだり大忙し。

とりあえずどうぞ、楽しんでくれりゃ幸いです。

桜関係の要素が多いかな

第三話。「僕とさくらと治療と転入生（機）」

「前略。

お元気ですか？

海外はいろいろ大変のようですね。

僕は変わらず元気です。

何か変わったことでもありましたか？

こちらは毎日が楽しいです。

色々な人から話を聞きました。

素晴らしい人になっているようです。

才能があるっていうのを久しぶりに感じました。

カリスマ、っていうのかな？

それは置いておいて。

そろそろ二枚目に突入するので、最近あったことはそちらに書きます。

（二枚目）

さて、ここからは普通に書かせてもらおうかな。

最近あったこととしては、枯れない桜にちよつと手を入れたことぐらいだね。

もしかしたら話したことないかもしれないから書くけど、最初の魔法の桜は、僕のばあちゃんがさくらのために植えたものなんだ。

それのおかげ（せい？）で、僕やことり、音夢は、病気が軽くなったり不思議な力を持ったり、病氣じみたものになったりした。

音夢の病氣は、純一のへたれさも原因の一つだと思うけど。
え、その他の原因？

さくらの無駄な策謀とかだと思うよ、たぶん。

まあ、本題ではないのでそれはさておき。

僕らがその桜を枯らした後、アイシアがこの島にやってきた。

魔法使いになるために、魔法を教わりに。

初めは純一、次はさくら、最後に僕。

師事したのはそんな順番。

でも、魔法を教わりつつも目の前で不幸になっていく人を見て、居ても立ってもいられなくなったアイシアは、枯れない桜を再び咲かせ『すべての人が幸せになるように』願った。

だけど、知っての通り、その真摯な願いをかなえた魔法の結果は、大混乱で。

なにもかもが手遅れになる前に、たどり着いた僕は、ありったけの魔法でその願いを消し去った。

その代償は、僕の命で。

最後に見えた光景は、桜の花が散っていく中、謝りながらも泣き笑うアイシアと、ぐっと我慢して泣くのをこらえるさくら。

そして、泣き叫んで僕を抱きしめたことりの姿だけだった。

それが僕の、一度目のおしまい。

でも、僕は二度目を迎えた。
幸せに生きられる二度目を。

ありがとうって誰に言えば分らないけれど、僕は感謝してるんだ。

だって歌をまた歌える。
何かをすることが出来る。
誰かと笑いあえる。

奇跡みたいなことが起こってるから、僕は感謝したいんだ。

誰にかはわからないけどね。

……よくわからないことばっかり書いてごめん。

また咲いた枯れない桜を見たから、なんか思い出しちゃって。

まあ、また咲いていた桜に手を入れただけだから問題ないよ。
枯らしたわけでもないしね。

それじゃ、無茶をするかもしれないけど頑張って生きてるから。

お返事、お願いします。

敬具

あなたの心友、染衣春日、改め桜内春日より。

P. S.

全世界一周ライブツアーが終わったら、一緒に歌を歌えることを楽しみにしています。

皆集めてみるつもりだから、連絡取れる人がいたら連絡よろしくつ
！」

——とある歌手に届けられた一通の手紙より。

第三話。

「僕とさくらと治療と転入生（機）。」

「これは、ボクのエゴなんだ」
「エゴ？」

大笑いをした後、事情を聴いた僕にさくらは目を伏せたままそう言った。

「そう、寂しくて仕方なかったボクの想い。その時に研究していた苗木から、枯れない桜は生まれたんだ」

「へー」

「『へー』って……もつと言うことあると思ってたのに」

「たとえば、何を？」

「『枯れない桜を研究してたのか』とか『ふざけんな』とか、その、

……『最低だ』と、か」

「言っほしいの？ それなら言っあげるけど」

「うっ……」

ジト目で見つめると分かりやすく狼狽えるさくら。

本当に、この娘っ子は。

「はぁ……まったく、なんでさっさと言わなかったのさ。僕に怒られるとでも思ったの？」

「だって心配かけたくなくて……」

「何を心配しろと」

「桜の木の暴走を」

「暴走!?!」

とんでもないことを聞いた。
だって暴走だよ？

ゴジ○で言うメルトダウンだよ？

Let'sメルトダウン！

なんて混乱してる僕に取り繕うようにあわてた様子でさくらは言う。

「あ、や、その、違う、別に暴走なんて、そう、報道！」

「……………」

「テレビの報道で大変なことになるのが心配になるんじゃないかな
って！ ほら、はるがいつの間にか現れた所だし！」

「……………」

「だから、その…………あの、えと……………」

ねーよ、みたいな顔とジト目で見続けてたら次第に萎れていく。

や、報道されるなんて実際ねーよ。

こんな場所にある桜、報道されたとしても“大きい桜ですね”で終わ
りだ。

ましてや、一年中桜が咲いてるこの島で本島の人たちが取り上げる
ことと言ったら、『咲き続ける桜』ぐらいしかないだろうに。

それはともかく、桜の暴走について追求せねば。

「とりあえず話してほしいんだけど」

「な、なんのことかなー？」

「桜の暴走のこと」

「…………う、やっぱりバレてるし」

「何故あれでバレないと思ったんだよ…………僕を馬鹿にしてんのか」
「ぴゅぴゅひゅひゅ♪」

口笛を吹いて誤魔化すさくら。その様子は可愛いと思う、残念な口笛だということを除けば。

「へたくそな口笛だな、相変わらず。ハーモニカのほうが上手いんじゃない？」

「そりゃ、当然でしょ。ボクが唯一使える楽器だもん」

「そーかい。で、話を逸らそうと必死に考えてないで話せ。僕は気が短いかもしれないんだ」

「えー……うー……無茶、しない？」

「時と場合による」

「じゃあダ」

「あー、凄く桜枯らしたくなってきたなー」

「うう……話します」

そんなやり取りをしてから十数分。

桜の木の下で、さくらは僕に全てを話した。

このままいけば、桜の木が暴走して大変なことになること。

いままで夜が遅かったり、泊まり込んだりしていたのはその対処をしていたからということ。

そして、暴走を止める術が見つからず、自分を犠牲にしても何とかしようとしていること。

最後に。

まだ、自分を犠牲にすることの踏ん切りがつかないことを、さくらは語った。

「ばーか!!!」

「うにゃ!?!」

「ばーかばーか! さくらんぼのばーか! お前なんてスイカの種でも食べてお腹からつたを伸ばされて苦しめばいいんだ!」

「なんで季節的に大外れな例えでボクに苦しみ宣告をするの!?!」

「僕に頼ればいいじゃんか、そんなバグなんてなんとかしてやるさ!」

「無理だよ、試しにはるの魔法でやる方向性で計算したら、一回で桜を完治させるのに50年以上も――」

「だったら、一回じゃなくて分割すりゃいいことでしょ?」

「――――え?」

ぽかん、と。

そんな顔をして呆然とするさくら。

僕の魔法を使うことを想定していてもその提案、というか発想を思いついていなかったようだった。

複数回に分ける。

一回ではなく、複数回。

桜の治療に多少の睡眠時間だいしやうは必要になるだろうけど、それも長期休暇の時にやってしまえばいい。

消費カロリーを計算して、それだけの分を消費して、桜をだんだん

作り変えていく。

そうすれば何ら問題はなく、治療を行うことが出来る……はず。

社会人になれば何とかなるし、それこそ学園の教師になれば夏季休暇だってある。

もし時間を潰したくないならお金を使ってカロリーの高いものを食べまくればいい。

方法なんていくらでもあるんだ。

“僕のできる”方法だけど。

「そっか……確かに、なんで気づかなかったんだろ」

「多分無理に考えすぎてたんじゃない？ ま、僕に任せりゃ一瞬だつての。……や、嘘、訂正。一瞬じゃなくて簡単だった」

「あはは、そっか、そっかあ、うん、そうだ、簡単だね」

空笑い。

そう表現できるような顔で、笑っている。

その顔は酷く儂げで、なにかを忘れてしまったようで。

だから、僕は。

「——だからさ、さくら。もう泣いていいぞ？」

「……………」

「充分頑張ったんだ。肩の重荷、降ろしていいんだよ」

「うん………」

「ほら、こっちこい」

「……ん」

さくらを、傍に呼んで抱きしめる。

こんな小さくて華奢な身体で、どんな辛かったのか。
そんなのわかるわけないんだけど、それでも。

「お疲れ様、さくら。やっと手助けできるな、待たせやがって」

僕がそれを少しでも共有できるなら、嬉しいって思えて。

「————うん、ありがと、はる」

顔を埋めた肩から、少し震えたそんな言葉と、温かいなにかを感じた。



ぱあっと。

さくらは、笑う。

憑き物が落ちたような顔で言った第一声は、

「あー、お腹すいた」

こんな気の抜けたセリフだった。

「そうだな、卒パも参加してなかったみたいだし」
「ああーっ、忘れてた！ しかもはるのパジャマ姿見忘れちゃうし
！」

「マテ学園長。なぜ貴様がそれを知っている」

「だってななちゃんにはるのパジャマの案出したのボクだし♪」

「……おま、お前、お前なーっ！ それで僕がどんな目にあったのか知ってんのかっ!？」

「しーらないっ♪ ま、ななちゃんも同じようなビジョン持ってたみたいだったけどね」

「え、何？ なんていった？」

「おーしえなーい♪」

「くそ、いきなり楽しそうにしゃがって……覚えてろよ!」

そう愚痴愚痴言いながら枯れない桜に歩いていく。

右手で軽く触れ、目を瞑る。

「[調査／5 Kcal] バグ修正に必要な消費カロリー」

「[Answer] Error。値が大きすぎます」

「[調査／5 Kcal] 消費カロリー 2500 Kcal でバグ修正に何日かかるか」

「[Answer] 22630 Days, 21 hour, 41 min, 22 sec」

「[調査／5 Kcal] 分割してバグ修正を行う場合の最適な最少区分」

「[Answer] 消費cal 30000 Kcal。ただしその時点で2500 Kcal 無いことを前提とします」

「[調査／現在の所持cal] ???」

「[Answer] 1485 Kcal」

「ええと……今からやってちょうど新学期始まる前か。……うーん」

今からやると大体23日と半分以上。

と、言うことは3／15現在、この作業をすると大体4／7、8あたりに起きることになる。

「はる？」

「ちょっと調べてみたら、区切りのいいところまでやると4月までかかるみたい。始めたいんだけどいいかな？」

「え、いや、ちょっと待って、4月？」

「Yes、4月。善は急げってことで始めるね」

「治療／30000 Kcal] バグ修正」

「不足分 28515 Kcal] 23.7625 Days」

桜の花が一瞬白く染まり、そして再び綺麗なその名の通りの桜色を取り戻す。

同時に、僕の、からだの、ちからが、ぬけてきて、せなかを、さくらに、あずけて。

「あとはたのんだ、さくら」

「ああもう、まったく！ はるは人の話をぜんっぜん聞かないんだから！」

ぼくは、そんな、ことばを、きいて、さいごに、わらって、いしきが、とだえ――――。



なんだか、不思議な夢を見た。

桜の木の、ふしぎな、ふしぎな夢を。



目覚めるとそこは教室でした。

「あ、ありのまま今起こったことを話すぜ。『僕は起きたらなぜか学校の新しいクラスの自分の席に座っていた』な、何が起こったのかわからねーかもしれねえ、以下略」

「ポルポル乙。久しぶりだな、ハル」

きちんと突っ込みを入れてくる義之が大好きです。
家族的な意味で。

「おはー、義之。元気だった？」

「おかげさまで。ほら、カロリーのお友達」

「さんくー。お、チョコレート味。カロリーのある炭酸まで持ち出すとはさすが義之わかってる♪」

「はいはい。それと、ちゃんと覚悟しとけよ」

「————は？ いったい何を？」

ぼかんとした顔をする僕に歩みよってくる2つの影。

「あ、杏さん、ななか、おは、よ……？」

「あら、お早いお目覚めね。私たちの用事をすっぱかして、そんなに睡眠しなかったのかしら？」

「あはは、違うでしょー、杏。わたしたちの用事をすっぱかして、芳乃学園長のお願い事を聞いていた、でしょ？」

「そうだったわね、ななか。でもただ寝ているだけっていうのは納得できないものがあるのよ」

矢継ぎ早に交わされる会話。

そう話している彼女らの頭にばってん、もとい怒りマークが見えるのは————

「……あのう、お二方、もしかして……怒って、らっしゃいます?」

「別」

———気のせいじゃ、なかったようです。

「うあー………うう、どうしよう、埋め合わせするから許してください」

「ほう、埋め合わせとな。はてさて杏殿、どうなさいますかね」

「そうね、ななか嬢。花より団子でメニュー端から端まで奢りとかどうかしら」

「それはよろしいですなあ、杏殿。極上のスイーツを味わうチャンスでございますからな」

「ええ、素晴らしいタイミングだわ。ねえ、ハ・ル?」

「ああ、ええ、はい、奢らせていただきます……」

「わかればいいのよ。それじゃ、これからまた一年間よろしく、ハ・ル」

「そうそう、わかればいいのだー。よろしくね、ハ・ル!」

「……あ、そっか、クラス同じか。よろしく、ななか、杏さん」

ようやく怒りを引っ込めて笑う二人を傍目にクラスを見渡す。

去年のクラスメイトで知ってる人が数名。
そして……。

「これで我々の万全なる体制が完成したなあ板橋！」

「おうっ！ 去年張り合っていた強敵ともが同じクラスに集まるたあ、奇跡のようだぜ！」

「あ、いいんちょー、小恋ちゃんのこの格好、どう思う？」

「ちよちよちょ、茜！ なんでそんなの今持ってるの！？」

「月島さん、さすがにこれは引くわよ……」

「寝てる間に着替えさせられただけなのにいー！」

カオスな問題児ゆうじんたちが勢ぞろい。

「なにこれ怖い」

「な、だろ」

「さくらの陰謀だろこれ……それか生徒会」

「まゆき先輩がそんなことを言ってた気がする」

「まゆきさんエ……」

このクラスだけで学校を恐怖に陥れられるような気がしてきたのは気のせいじゃないはず。

しかし、この面子、オールスターである。

「恐ろしいな、今年のお祭り騒ぎが」

「不安しかないのは気のせいじゃないよな？ 俺が間違ってたわけじゃないよな！？」

「義之、お前は間違ってる。間違ってるのは他の奴らだ」

だっておかしいもん、こんなの。

絶対おかしいよ。
わけが分からないよ。

「現実逃避も終わったかー？」
「あ、舞佳ちゃんちっすー」

いきなり目の前に現れた友人のロボット博士に軽い挨拶をする。
あれ、なんだか久しぶりに会った気が。

「ちーっす。うんうん、挨拶は重要だなあ、ハル少年。けどな、残念なことに私は今、博士じゃなくて先生なんだ」

「ええ。……ええと、だから、何？」

「呼ぶなら『水越先生』か『舞佳先生』でしようがっ！」
「あいた!?!」

眞子^{むかし}のようなげんこつが僕の頭に振ってくる。
痛い。

っていうか、怒られるほどのこと？

「私の話を聞かないのが悪い」
「ぶーぶー、おーぼーだあ！」

「【反論は却下されました。】さあて、喜べおまえら。転校生のお知らせだ！」

「」「はあ!?!?」「」「」

唐突過ぎる転校生。

杉並が『馬鹿な、この俺をもっても情報も掴めなかっただど！』

？』とか言ってるから本当に唐突だったのかもしれない。
非公式新聞部はどこかおかしいからなあ……。

「質問は入ってきてからするように。じゃあ、どうぞお入りください」

「や、なんで転校生の年下に舞佳ちゃんは丁寧語を使ってんの……
……さ……」

僕の日もおかしいみたいだ。

牛柄の帽子と真っ赤なマフラーと付属の制服を着た、稼働時間40
年越えの変なロボが見える。

「今日からこのクラスと一緒に勉強することになった——」

「天枷美夏だ。好きなものはバナナと人間！ ロボット留学生第一
段階選抜者としてやってきた。皆、よろしく頼む！」

……………。

や、おま、ちょ、あの、え、は、その。

[illegible]

幸いなことに、その僕の叫びは皆の歓声にかき消され、すぐに打ち解けた美夏はこのカオスなクラスの一人に参加することとなった。

——カオス度、加速中。

第三話。「僕とさくらと治療と転人生（機）。」（後書き）

「「学生い？」」

「ふはは、どうだー」

「や、いつもどおりアホに見えます」

「間違えたあああああ……」

次回。

「僕とサンタと現実逃避と平凡（？）な日常。」

番外編を挟むかも。

文章力がほしい、切実に。

こんな駄文でも楽しんでもらえたら幸いです。

感想、誤字脱字、批評、設定の矛盾、その他ありましたら感想、または作者にメッセージ送信を。

ここまで読んでいただき、誠にありがとうございました。

第四話。 「僕と仲間とサンタと家族。」 (前書き)

一か月更新がデフォになりそうで怖い。

文章をもっとうまく書きたいなあ。

第四話。 「僕と仲間とサンタと家族。」

『前略。』

こんにちは、久しぶり。

相変わらず丁寧なところは変わってないね。

いろいろ言いたいことは多かったんだけど、これぐらいしか言えませんでした。

こちらは元気でやっています。

世界をまたにかけるシンガー、なんて呼ばれてるけどそこまで凄なことだとは自分でも思えません。

貴方があの時、ああなっていなかったら私は歌手にはなっていなかったでしょう。

歌手にはならず、保母さんとか、そんな仕事についていたかもしれない。

……まあ、そんなifの話をしてもし方ありませんけどね。

少し前、桜の木がまた咲いたと聞いて、一時期心配になりましたが、さくらちゃんと純一くん、そしてハルがいるから安心してます。

なにかするにしても無茶するな、とは言いませんが、約束は守ってください。

絶対に誰かを悲しませるようなことはしないで。

私との、約束っす。

では、また手紙を送ってくれると嬉しいです。

お返事、待ってます。

P・S・

ライブの件、了解です。

ただし、私もそろそろいい年だからちよっと手加減すること。

みっくんとともちゃんには連絡が取れています。

このツアーが終わったら、必ず。

楽しみにしてるっすよ、ハル。

貴方の心友、ことりより』

「……相変わらず、ことりは心配性だなあ」

「うん、それは春日が悪いと思う」

「だよね」

「だな」

「……デスヨネー」

――朝倉家、晚餐終了後にて。

第四話。

「僕と仲間とサンタと家族。」

学校が始まった。

……と、言うのも今日の午前中だけの話。

もう昼を少し過ぎた学校は本日の終業を迎え、新しいクラスメイトと親睦を深めるため思い思いのグループが『んじゃ、遊びに行こうぜ!』という空気になっている。

僕ら（僕、義之、涉、杉並、杏さん、小恋ちゃん、茜えさん、ななか）はその例に漏れず、どこへ行くかの相談を始めていた。

「ん、じゃあどうする義之?」

「俺は特に希望はないけど……杉並は?」

「行きたいミステリースポットは幾らでもあるが、今日は親睦の会。同志たちが向かう所に向かうとしようではないか」

「じゃ、義之と杉並は多数決の時よろしく」

こういう時、自主性がない、というか押しが強いのはいいことなのか悪いことなのか。

とりあえず案を出せそうな人にばしばし話を振っていくことにする。

「さて、じゃあ何か言いたくてうずうずしている茜えさん。どこ行きたい?」

「茜さんはショッピングとかいきたいなあ?」

「ごめん、却下。きっと僕を含めた男勢が耐えられなくなってアホなことをやりだす。あと茜えさんはなんか仕掛けてきそうで嫌だ。次、元気に手を挙げたななか」

「花より団子！」

「ん、奢りを今日しようとするのはいいけど他の奴の分も奢りになりそうだからごめん、今日は却下ってことで、また今度。次、何か思いついたみたいだから渉」

「ランジェリーショップ」

マジな目だった。

そして空気が凍った。

「「サイテー」」

「しんじらんなーい……」

「ちょ、ちょっと場を和ませようとしただけなのに……しどい」

「ならニヤけながら言わないほうがいい」

「あと、もうちょいマジな目じゃないほうがいいな。次」

「はい」

すっ、と杏さんが手を挙げる。

いつみても思うけど、かなり様になってるよなあ、優等生。
いやまあ、それはともかく。

「はい、杏さん」

「ボーリングでチーム戦点数勝負とかどう？ 勝てば官軍、負けても誰かの弱みは握れるかもね、ふふふ」

「なんか怖いよ杏さん……。ああでも、人数的には問題なし。２レ
ーンで何とかなるし、現実的な案ではあるね。怖い後ろのセリフを
除いて」

「ふふ、策謀が入り乱れることを楽しみにしているわ」

「ワイ、タノシミダナ」

にしてもボーリングねえ。

最後に行ったのは2年前ぐらいだっけ？

「他に案ある人々？」

「茜さんは特になくし！ 杏ちゃんにさんせー！」

「わたしも茜と同じでボーリングに一票いれるね」

「月島、特に希望ないのでボーリングに……」

「あゝらあ？ そんなこと言っているのかなあ、小恋ちゃあゝん？」

茜えさん、ななかの賛同。

そのあとに消極的な意見を出した小恋ちゃんに茜えさんがずいと詰め寄って耳元に囁く（僕の位置だと丸聞こえ）。

っていうか相変わらず押すなあ、茜えさん。

「(な、なに、茜)」

「（義之くんと急接近できる何かをばうん！とかないのかなあ？）」

「な！ な、ななな無い！ 全然！ これっぽっちも！」

「ホントにいい？」

「う、え、そ、その、えつと……」

「こら茜。その辺にしておいてくれ、小恋が茹つて使い物にならないくなる」

「うう、よしゆきい」

凄いね、絶妙なタイミングだよ、義之^{ヒーロー}。

それを聞いて後ろでくすくす何か言ってるやつらが居たりするけどさ。

「まあ、仲のよろしいことでございますことやら」

「まあまあ、これではわたくし達の出る幕がありませんわ!」

「杏さんにななか、ノリノリだな」

「「まあね」」

君らも凄く仲がいいことで。

そんな騒がしい中、ようやく行き先がボーリングに決まり、各々自分の道具を担いで外へ向かうことになったとき。

「あれ、美夏さんは?」

「研究所。レポートを書き終えてないからやってくるってさ」

「……ご愁傷様、美夏さん」

ちなみに、去り際の叫びは「研究者なんてやめてやるうううううううううううううううう!」だった。

「で、チーム分けが出来たと。なんでこうなった」

「運の悪さ……いえ、良さじゃない？」

「綺麗に割れたねえ」

「同志桜内兄……貴様が敵になった以上、俺の美技、披露せざるを得ないではないかっ！」

「ソウダネー……」

チーム、策謀家と手下。

渉、杏さん、茜えさん、杉並。

「楽勝だな、なんとってこの俺様がいる！」

「全員注目。後で渉が2連続ガーターしたらジュース奢ってくれるらしいわ」

「おう、いいだろう！」

「あはは、すぐ失敗しそうだね」

「渉君だもん、仕方ない仕方ない」

「しどい!？」

チーム、桜内兄弟とその仲間たち。

義之、小恋ちゃん、僕、ななか。

……………。

杏さんに近寄って耳打ちする。

「(杏さん杏さん)」

「(何か用かしら?)」

「(籤に細工しましたか?)」

「(してない)」

「(そうですかありますがどうイカサマ凄いですね)」

「(それほどでもないわ)」

「……やっぱりしてるじゃないですか! やだー!」

「あら、何のことかしら?」

小恋ちゃんに最後に引かせたのはやっぱりイカサマですか。

まあ、小恋ちゃんのことを思ってやってるんだらうから何とも言えないけどさあ……。

「(……まあ、いいか。別に何か変わるでもなし)」

「(ふふふ、友達思いのいい女でしょ。嫁にどう?)」

「(せっかくだけど遠慮します)」

「(あら残念)」

「(というか、慎みを持ちなさい。すぐに『嫁にどう?』とか言わないほうがいいって、勘違いする人多くなるから)」

「(……ハルにしか言わないんだからね)」

「(え、何?)」

「(なんでもないわ。それに、そんなことからかいがある人しか言わないから安心して)」

「(あ、そう、うん……うん?)」

なんか小声で言った気がするけどその後の発言が爆弾発言な件。
からかいがあるっておいこら待ちたまえそこに座れぬあんだその目は！

「僕がからかいがいがあ」

「第一回！ チキチキ、ボーリングチーム大会！ はっじまっるぜ
——！！！」

「「「いえー♪」」」

「いえー！」

「いっえ————い——！！！！！」

「いえーい」

「る……いえー」

僕のそんな疑問なんてあっさり流された。
わかってた、わかってたよそんなこと。

「一番手え、義之くん！」

「見せてあげて、義之！」

「……任せろ、気楽にいくさ」

「涉くん、ガンバ！」

「期待してるわ……主にジュース方面の」

「ガンバレーイ、板橋い！」

「うおっし、任せとけ！」

……まあ、気にしても仕方ないし。
義之の言う通り、気楽に行くと思いますか。

「ふう、ギリギリだな」

「ナイススパー、義之」

「流石義之くんだね」

[illegible]

「よし、ジュース奢りだな板橋」

「あ、わたしお茶！」

「月島は果汁ジュースお願い」

「100%バナナジュースで」

「炭酸」

「俺の分もだ」

「そ、そんな、こんなはずはあああ！」

がつこーん、つてね。

そんなこんなでボーリング終了。

他のみんなと別れて、僕はさくらに連絡して、晩御飯の買い出しをしてから帰りになった。

「帰宅路なう！」

「古っ！」

「酷っ！　そしてふと漢字で、『皆酷い』って書くと残酷に似てる気がしてびっくりした！」

「……いや、気のせいだからそれ」

「や、負けた気分を払拭しないと後が怖いんですヨ」

「ま、まあ、それは仕方ないんじゃないか？　その場で出来た罰ゲームみたいだし」

「だからって『言うことを一回聞いてもらえる権利』はあんまりじゃない？」

「罰ゲームなら仕方ない」

「ケツバットとか？」

「桜内、アウトー」

「僕ら二人ともかよ！」

「冗談じゃない、俺は桜内をやめるぞー！（バリバリ）」
「やめて！」

そんな義之と漫才じみた言葉のドッジボールをしながら数分。

僕らの帰路である春の陽気漂う、桜の道の中に。

「う、うあー……」

行き倒れのサンタクロースを見つけた。

「……………」
「……………」

思わず義之と顔を見合わせる。

「（チラッ）」

「（チラッ）」

視線を交わすと僕は、

「……………」

「……………」

何事もなかったかのようにその横を通り過ぎ、

「晩飯、どうするんだっけか義之！」

「カレーかな！　そう今決めた！」

「そうか楽しみだなにははは————」

「無視していかないでえ！！！！」

晩飯の相談をしたところで呼び止められた。

「「行き倒れてるサンタの知り合いなんていないので」」

「二人して息ぴったり！？　酷いよ春日あ、義之くうくん……………」

「何で倒れてるのかわからないけど、とりあえず立てば？」

「……………って、……………の」

「なに？」

「…………おなかが減って、動けないの！」

しよーもない理由で動けなくなっている魔法使いだった。
運ぶしかできない、荷物状態みたいだ。

「仕方ないか。義之、そっち宜しく」

「了解。んじゃ、せーので持ち上げよう」

「「せーのっ！」」

「うおわ、軽っ」

「本当だ、二人で持ち上げるほどでもなかったな」

「うーっ、うー……」

そんな人間ブランコをしながら僕らは帰路を辿っていくのだった。



帰路を半分ほど過ぎたころ。

「サンタ少女ですが最近友人の対応が冷たいです……」

途中まで意味不明な言葉を言っているだけの人形だったアイシアは

起動するとそんな言葉を言い始めた。

「あー、はいはいごめんね、アイシア。お帰りなさい」

「まさか行き倒れてるとは思わなくてさ。お帰り、アイ姉」

「ただいま二人ともお……何とか今年も帰ってこれたよ……」

うう、人間ってあったかい……とかなんとか言いつつ幅涙を流して
帰宅のあいさつを告げるアイシア。

今回は南のほうの国に行ってきたようで。

「向こうは冬が暑くて大変だったよ……」

とのこと。

「そりゃそうでしょ……」

「あはは……ご苦労様」

「うう、忘れてたのが運のつきだったよ……」

「……あ、そういえばなんでこの時期に帰ってきたんだ？ いつも
アイ姉が帰ってくるのって夏休み前だろ？」

「お、言われてみれば。なんで？」

「学校に潜入するため！」

「へー」

「へー」

あ、温泉卵食べたい。

「よしゆきー、温玉作って温玉」

「自分で作ればいいだろ……魔法使えば一瞬だ」

「おなか減っちゃうんだもん、仕方ないね」

「ゆで卵で我慢しろ」

「うーい」

「……何かいってよお」

涙目になったアイシアがいつも通りでちょっと安心した。



で、晩飯時になって。

「え、じゃあ義之つてこっちに住むことになったの!!??」

驚愕の事実までとはいかないけれどそんなことを教えられた僕がいた。

「あれ、知らなかったっけ？」

「さくらさん、俺がこっち来たの卒パの日です」

「あー、なら仕方ないか。はる寝ちゃってたもんね♪」

まさにその日の夜に睡眠したからな、僕。
や、そうじゃなくて。

「もんね♪じゃなく。……そうか、わかったぞ！」
「なにがですか、ハルにーさん」

もう何を言おうとしているのかわからなくなっている僕の口からの
出まかせに反応してくれる由夢ちゃん。

「これは僕を陥れるために計画されたものだ！」

心の中では数人が『な、なんだってー！』と叫んでいたりするが細
かい描写は割愛。

カレーの皿を持った音姫ちゃんがまだ出している炬燵のところまで
やってきた。

「わ、なんか変なこと言いだしてる」

「ドッキリ！ ドッキリカメラはどこだ！？」

「や、そんなモノ探してもありませんってば。はやくご飯食べまし
ようよ」

「はいはい、ほら、ハルのご飯」

「……あ、どうもありがと、音姫ちゃん」

なんか二人に言われてテンションが落ち着いた。
由夢ちゃんにまで言われたなんて、よっぽど重症だったようだ。

とりあえず。

「……ん、あー、そのー、なんだ、義之」
「んぐ？　なんだよハル」

スプーンを咥えた義之に、ぺこりと頭を下げて、

「これから、よろしく」
「こちらこそ、よろしく」

互いに挨拶を交わした。



「いただきました」
「ごちそうさまでした」
「お粗末様でした」

そんな挨拶が終わった後。

「で、なんで学校に潜入しよう？」

「……………え？」

「や、だからなんで潜入？」

「……………！！！」

サンタがなんか身悶えしてる。

「え、何その動き、なんで？」

「拾ってくれたことが嬉しくって、ずい……！」

半泣きのアイシアさんである。

「あー、その、なんか、うん、ごめん」

「いいの、拾ってくれたから。投げっぱなしジャーマンじゃなかったから。ジャーマンの意味は知らないけど」

「あ、ああ、そう。で、なんで？」

話の先を促してみると彼女は満面の笑みでこう言った。

「久しぶりに授業受けてみたくて！ 学校来週からだよね！？」

「残念ながら今日が始業式です」

その言葉で固まる笑顔。

凍る空気。

そして、BGMは後ろに響くさくらの笑い声。

「……………え」

「今日が始業式。僕らの格好で気づこうぜ」

「ま、」

「ま?」

プルプル震えたかと思うと、再びアイシアは幅涙を流して、

「間違えたあああああああ!」

そんな叫びをあげるのだった。

—○—

「「この紋所が眼に入らぬか!」」

僕とさくらのセリフがかぶる。

互いに顔を見合わせて笑い、僕は話を切り出した。

「桜は?」

「平気……って、言っているのかわからないけど、状態は確実によくなったね」

「そっか、ならよかった。……そういえば義之、本当にこっちの家で暮らすことになったんだな」

「うん。一緒に、家族みたいに。そんなふうに暮らせたらいいなあ
って思ってるよ」

「そんなの簡単だろ。だって……」

「だって？」

少し不安げな顔をしたさくらに、片目を閉じて軽くウィンクをしながら笑顔で僕は言う。

「僕やアイシアがいる。それにあいつは僕の自慢の弟だからね」

「にやはは、そうだね。うん、そうだ。……よし、さらに元気出て
来た♪」

「いい傾向だ。から回らないよーに」

「りょうかいっ！ んじゃあ、ボクはもう寝るから」

「僕も寝ようかな。お休みさくら」

「お休み、はる♪」

そんなこんなで、今日の夜は更けていった。

「……あ。やば、杏さんとななかに花より団子いつ行けばいいか聞
くの忘れてた」

第四話。「僕と仲間とサンタと家族。」（後書き）

次回。

「ええと。SSPって、何？」

「彼女ほしー！」

「もうクリパ、か。時の流れは速いねえ」

第5話。

「僕とクラスとクリパと出し物。」

短編はさんで更新予定。

今回の反省..アイシアがいじりやすすぎてびっくりした（いじりすぎた）。

コロコロ次回予告詐欺になる。

ヒヤッハー！ お祭りだア！

誤字、脱字、矛盾点、気になること、ツツコミなどあれば感想まで。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました！

第五話。 「僕とななかと音楽と部活。」 (前書き)

騙して悪いが、ななか回（微）なんadena
クリパかと思っただか？ 違うよ！

そんなこんなで、ななかを全然書いていないことに気が付いた自分
はきょうきょいつもよりハイペースでこの分を書き上げた
しかし駄文なのは確定的に明らかなんだが？

あ、アンケートは否でした。

そんなこんなで、ぐだぐだのはじまりはじまり。

あ、短いですヨ。

第五話。「僕とななかと音楽と部活。」

Q1..質問よろしいですか？

「……それがすでに質問な件について。まあいや、何？」

Q2..名前、身長、体重、スリーサイズを教えてください。

「桜内春日、160、43、男に訊ねることじゃない」

Q3..お気に入りのアクセサリーはありますか？

「幼馴染にもらった髪留めと、心友にもらった帽子。片方はどっかの聖歌隊で使ってるって聞いたよ」

Q4..髪を伸ばしているようですが、なにかこだわりでもあるんですか？

「昔に褒められたことがあって、それ以来ずっと伸ばしてる。髪留めは重宝するね、無いとロングヘアーみたいに見えるから」

Q5..そうですかありがとう女っぽさ凄いですね

「それほどでもない。微妙に茶髪だからさらにそう見えるってこと

を気にしてるんだから黙れ（ゲシゲシ）」

Q6…では最後の質問です。部活動は何かしていますか？ あ、蹴らないでください痛い痛い。

「（ゲシゲシ）……ああ、部活動だっけ？ そうだね、今は——」
「——」

——とある少年へのインタビューより——

第伍話。

「僕とななかと音楽と部活。」

ちゅんちゅんと鳥が囀っている。

「っ……あー……………」

二度寝をした体はなかなか重い。

一つ伸びをしてから瞼をこじ開ける。

肌寒さを少々感じる休日の朝、何か忘れていたような気がしつつもとりあえず起床。

台所へふらふらと歩いて行き、コップに牛乳とコーヒーを6…4の割合で注ぐ。

注ぎ終わったらコップの中の液体に手を少しだけ付け、目を閉じて。

「変換／10 kcal ≡ 温度上昇…40℃」

「あさはー……やっぱりー……こーひーみるくー……♪」

「あ、ハル。おはよう」

小声で歌う僕の背中に声がかかった。

この声は……うん、音姫ちゃんだ。

寝ぼけた頭でもそれぐらいはわかる。

「んあ……ああ、おはよ、音姫ちゃん。今日は早いんだね」

「うん、生徒会の仕事があるからね、学校に行かなきゃいけないくて、弟君と由夢ちゃんの朝ごはん、こっちで作っておこうと思って」

「おー、すばらしいー。頭を撫でてあげよー」

「あはは、くすぐったいってばあ」

ちょうどいい位置、とは言えない位置のさわり心地がいい頭を撫でているうちに目が完全に醒めた。

手を離すのにこやかな笑顔で料理を作り始める音姫ちゃん。

僕も手伝おうか？と聞けばすぐにできるからいいよ、と返される。

こくりと頷いてそのまま居間へ。

テレビをつけてほっと一息。

春になったとはいえ、やっぱりまだ肌寒い。

「あー、さむ。こんな日はあったかい飲み物に限る」

「そうだねえ、本当に。あ、お皿の用意お願いしていい？」

「任せといて。しかし、大変だね音姫ちゃん、休日に学校なんて」

「うん、特にハルと弟君のクラスが大分かわってるんだけどね」

特に杉並君とか。と言葉をつづけられてしまうと返す言葉が謝罪ぐらしいかない。

「あははー……なんかごめん」

「別にいいですよー……っ。はい、朝ご飯」

「わーい！ 音姫ちゃん料理上手！」

「えへへ……そんなことないよ」

洋風な朝食。

朝からオムレツ食べられるってすごいと思うんだ。

というわけで、音姫ちゃんと食卓を囲む。

「さくらは今日は休みなんだって」

「珍しいね、さくらさんが休みなの」

「確かに。だから面白い物にでも一緒に行こうかなーって思ってたさ」

「いいなあ……最近ショッピング行っていないから行きたいのに」

「音姫ちゃんのことは待つつもり満々だったんだけど。待ってるからさ、帰ってきたら皆で一緒に行こうよ」

「……ありがと、ハル。よーし、お姉ちゃん頑張っちゃうぞー！」

「その意気だよ。ま、義之は嫌がりそうだけど」

「弟君は優しいから断ったりしないよ？」

あなたのオーラにやられてるんです。

そう言わない僕は家族思い……なのか？

「あ、そろそろ行かなきゃ」

「そうだね、行ってらっしゃい」

「……何言ってるの、ハルは部活があるんでしょ？」

「え？」

「え？」

互いに顔を見合わせてしばし沈黙。

……………部活？

いや、だってななか達からは連絡も何も……。

「一昨日の晩御飯の時、『ななか曰く、春休み中の遅れを取り戻すんだってさ。明後日は大変だ、朝から練習なんて……ふう、やれやれだぜ』って自分で言ってたのに」
「……………」

音姫ちゃんありがとう、スターでプラチナなあれを使う人の真似まですてくて。

あー、そっか、そうだった、だから朝早く起きたんだったか。

にはははは、忘れてた忘れてた。

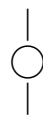
……………。

「音姫ちゃん」

「なに？」

「3分だけ待って、着替えてくる」

はいい♪という言葉が背中を受けて、僕は自分の部屋に走り出した。



軽音楽部に入ったのは偶然とか昔がーとかじゃなくて、ななかに誘われただけのことだった。

ギターを弾けることを知っているななかが僕を誘ってきたのはある意味必然だったのかもしれない。

感想は、といえば。

昔は部活とかに入ったことがないからすごく新鮮な気持ちで参加できる。

音楽を楽しむのにまさに適切なところだ。

あくまで学生レベルで弾ける僕にとって、部員の方々とはいいレベルで並んでいられる。

“楽しい部活動” っていうのが凄く感じられた。

そんな軽音楽部が、僕の所属する部活動だ。

……なんでこんな話をしてるのかって？

僕が音楽室にたどり着くまでの現実逃避じかんかせぎの内容だよ。

「お、遅れるところだった……！」

ぜはー、ぜはーと荒れた息を整えずに音楽室に入る。

え？ モノローグ？

何それ？ 歌？ 外人？ 知らないよ、そんなもん。

「おっはよ！」

「おはよー」

「はよーっす！」

「おー、はよー……はーっ……」

バンドを組んで入るななか、小恋ちゃん、渉の挨拶に答え、息を整えつつ席にがたりと座る僕。

「お疲れさん」

「あー……うん……もー……時間ってのは……あと少しだったのに……どーしてこー……」

「わかる、わかるぜ！ 俺ももっと長くけ」

「もし放送禁止用語に引っかかるようなことを言ったら音姫ちゃんの前で何か叫ばせる」

「け…………結婚気分を味わえないのかなって…………」

「前から知ってたけど渉、君ってあほだよな」

「な、なにい？」

「や、そこがいいところかもしれないけど…………っ」と

渉と言葉を交わし、壁に立てかけてあるギターを手取る。

小恋ちゃんに目で感謝を述べると照れた笑みで返された。

うむ、やはり小恋ちゃんはいいい娘だなあ。

早く義之とくつつかないかなあ。

そんな願望、もとい妄想は置いておいて。

「じゃ、行ってみよう！」

「おーいえー♪」

「う、うん！」

「おっしゃあ！」

なかなか発声準備に入る。

小恋ちゃんがベースを構えなおす。

渉がスティックを握る。

僕は、帽子を軽く上げると、息を吸い込んでピックを強く握る。

そして。

48回目の演奏が終わって、皆で一息。

「いやー、やっぱり難しいな」

「んー、確かにそうだね。改良点はいっぱいあるかも」

「うん、頑張らないとっ!」

「さあさあ、次はどうする?」

「その前に、というか時間的にお昼だね」

「お、そうだな! へへ、俺は豪勢な昼飯を」

何か言おうとしている涉に僕は口を挟んだ。

「あー、ストップ。僕、昼ご飯持ってきてない」

「……ごめん、私も」

「実は……月島も……」

「な、何い!? お、俺以外皆持ってきてないのか!?!?」

はい、そうです。その通りです。

本当に申し訳ない。

それに僕はちよつと……。

「あー、うん、ごめん涉。なんてーか、今日はちよつと午後は家族サービスに行きたくて」

「私は1日歌い続けるのは楽しいけど、声が枯れそうでちよつと…

…」

「わ、私は忘れただけ！ うん、お昼無くても平気だよ！」

「いや、そんなに頑張らなくてもいいって……んじゃ、俺も帰るとすっかな」

僕は驚いた。

あの渉が、音楽を不真面目にやる奴は殴り飛ばしそうな渉が、怒らずにそんなことを言うなんて。

「……珍しい。渉なら『そんな不真面目でいいのかよ！』とか言うと思ったのに」

「よくわかってるじゃねえか。いや、最初は言おうと思ったけど今日はさくらさん休みなんだろ？ ならいいかなって思っただけだ」

「……渉」

「板橋君……」

「渉くん……」

感動した。

すげえ、何？ 渉が凄く恰好良い。

照れくさそうな笑みを浮かべて、渉は空を見上げる。

そこで何かを考えるそぶりを見せた後に、一言。

「……はあ。内申点あがんねーかな」

おいこら。

「台無しだよっ!!!!!!!!!!!!!!」

「サイテー！」

「見直したと思ったらすぐまた……」

「え、え？ あ！ いや、今思ったことを言っただけだぞ！？」
戯
矢利尊先生の授業きついから！」

「タイミング悪すぎるって、ある意味長所だね……」

「涉、もうちょっと考えてから発言しようぜ」

「いや、だってよ……そう、そうだ聞いてくれ！ 戯矢利尊先生が
さ———」

そんなこんなで少しの間ギャーギャー騒いで、今日はお開きになった。



帰り道。

「ねえ、ハル」

「なーに、ななか？」

「あの歌のことなんだけど」

所用があるらしい小恋ちゃんと昼飯を知り合いと食べるという涉と

別れ、僕とななかは帰路に着いた。
のんびりと歩いていく僕らの歩く道の脇には、満開の桜が。

「どれのこと？」

「わかってるくせに。“桜笑み君想う”のこと」

「あー、あれか」

昔に作ってお蔵入りした曲だ。

明るい感じの曲を目指して作った、気がする。

ま、作詞とか作曲とかを始めてやった曲だから思い入れは深い。
恥ずかしいから絶対言わないけど。批判を食らいたくないから黙っているけど。

ちなみに、“まぶしくてみえない”は作詞だけやった。
作曲は皆でだったなあ……懐かしい。

「あれがどうかしたの？」

「あれ、まぶしくてみえないにちょっとだけ似てる気がする」

「……あー、確かにそうかも。おんなじような意味を込めて歌うからさらにそう感じるんじゃない？」

「うーん、そうかなあ……？」

「そうだと思うけど」

すみません、多分僕がおんなじような気持ちの時に作ったせいだと思います。

「ん？」

「なにさ、そんな顔をじっと見つめて。何もないよ？」

……………。

「構成／100kcal心理プロテクト1回」

「えーい！」

「……………」

なんとなく、というかやはりといえるぐらいこの行動をしてくることがわかっていたので予防線を張っておいた。

ふはは、これで読めまい！

貴様にはなあ、無理なんだよお！

すみません、無駄にテンション高いのはこの大きくてやーらかい二つの物体から意識を逸らそうとしてるだけなんです。

……………つか、なんでハグ。

正面からとかびっくりするので勘弁してほしい。

誤解を生む原因ですヨ！

そんなことを考えて頭がぐらぐらしてきたところでなかなかは眩いた。

「ふう……落ち着く」

「……………」

「ハルって抱き心地良いよねえ、凄く安心するんだー」

「……………」

「……あれ、ハル？」

「……………いつまで」

「え？」

「いつまでハグしとんじゃーい！」

こちらとらいろんなものが限界近くまで行っただけなの！
そっちは安心して居るかもしれないけどな！

「まったく、人前でハグはダメ、ゼツタイ。わかった？」

「はいはい……」

「返事は短く一回！」

「は、はいっ！」

「まったく、まったく、まったく。ハグされたほうは恥ずかしくて仕方ないってのに」

「あはは……ごめんね、ハル……」

声に元気がなくなっていく。反省はしたんだから落ち込まなくてもいいのに。

ちらりと腕時計に視線を向ける。12…44分。

「ま次に生かしてくれればいいさ。……時間、ちょうどいいかな」

「え、何が？」

「花より団子で奢りの話。あれ、今日でもいいでしょ？」

「でも、さくらさんと……」

後ろ手に持っていたケータイを取り出す。

先ほど、さくらとの話を纏めたところだ。

「実は連絡とってあるんだよねー。15..00に服屋で皆と待ち合わせ、ってね。にはは」

「へえ、そう、なんだ……。ええと、じゃあ、いいのかな？」

「何遠慮してんのさ、良いに決まってる。さて、行こう」

「あ、ちよちよ、待ってよ！」

すたすたと歩きだす僕の横に並ぶななか。

にこやかな笑顔がとてもまぶしい。

その顔を見て、こっちも知らぬ間に笑顔になっていたのだった。

ごまかし、成功。

余談。

ごまかしの代償は昔で言う諭吉1枚と一葉さん1枚分だった。
いつか僕も食いまくってやる。

第五話。 「僕とななかと音楽と部活。」 （後書き）

ななか回（笑）でした。

最近気が付いたことは、自分、セリフ書いてから地の文書くのと地の文書いてからセリフ書くのじゃ密度が違うということに気が付きました。

地の文、もっと多くしなければっ！

次回は杏さんのたーん。

誤字、脱字、矛盾点、気になること、ツツコミなどあれば感想まで。

特に感想は活力になりますので！

そうそう、返信はこまめにやることにしました（リアル話）

そんなこんなで今回はこれにて。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0779p/>

D.C.? C.S. ～ Cherry Blossom & Spring Days ～※更新停止中

2011年11月14日23時28分発行